

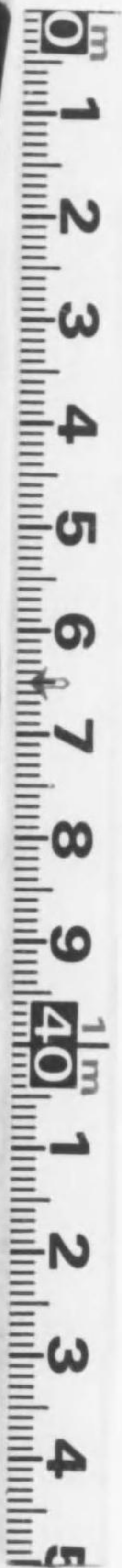
浄土文類聚鈔述義

310-126

X

310

126



始



宗教
3393
永久保存

講師 大須賀秀道述

浄土文類聚鈔述義



昭和十三年安居



310
126

浄土文類聚鈔述義

目次

開講の辭……………一

第一 文前懸談……………五

一 撰述の年時……………五

二 別撰の意趣……………一〇

三 一部の大意……………一七

四 廣略二本の同異……………二六

五 四法の開合……………三一

六 題目と撰號……………三七

七 一部文段の構成……………四二

目次

一

第二 總說段の解説

一 序

說

一 序文提撕	四
二 發端文旨	五
三 勸順二尊	六
四 敬信真宗	六

二 正

說

一 別依大經	六
二 斯經大意	七
三 教德結嘆	七
四 經宗經體	八
五 大行名體	八
六 十七願名	九

七 往還開出	一〇
八 廻向行信	一〇
九 大行體相	一三
一〇 破闍滿願	一六
一一 稱名轉釋	一八
一二 成就連引	二一
一三 付屬經文	三〇
一四 二論引意	三五
一五 不廻向行	四七
一六 四句結嘆	四九
一七 行信一念	五一
一八 淨信名體	六一
一九 十八願名	六二
二〇 難易料簡	六六
二一 四句結嘆	七五

- 二二 無因他因……………一七
- 二三 證果體相……………一八一
- 二四 正定滅度……………一八七
- 二五 因淨果淨……………一九一
- 二六 還相廻向……………一九五

- 三 結 勸……………二〇六

- 一 聖權素懷……………二〇六
- 二 他利利他……………二〇九
- 三 時衆勸誡……………二二五
- 四 慶嘆述意……………二二八

第三 偈頌段の解説……………三三

- 一 註論の引意……………三三
- 二 造意と偈題……………三三

- 三 偈頌の文解（略之）……………三六

第四 問答段の解説……………三七

- 一 合三爲一の趣旨……………三七
- 二 三心の字訓釋……………三三
- 三 字訓の會合釋……………三四
- 四 約法釋の大意……………四九
- 五 至心の約法釋……………五二
- 六 信樂の約法釋……………六〇
- 七 欲生の約法釋……………六六
- 八 會三爲一の釋成……………七一
- 九 大觀二經の三心……………八一
- 一〇 兩經小經の一異……………九一

第五 結嘆釋の解説……………九六

一 三經隱顯と一心能入……………二九六

二 獲信の因縁……………三〇〇

三 總結四法の趣旨……………三〇〇

巳上

附 科文總表

淨土文類聚鈔述義

大須賀秀道述

開講の辭

宗祖聖人、其二代に於ける眞撰の聖教、漢和に通じて十餘部の多きを數へ、其中特に漢文を以てせられたもの四部がある。曰く教行信證、曰く淨土文類聚鈔、曰く愚禿鈔、曰く入出二門偈、是等孰れも弘願眞宗の正意を顯はし、化益を中外に施せるものであつて、たゞ二宗の寶典であるばかりか、誠に日本國民の寶であり、世界人類の寶である。これを研鑽して其眞價を闡揚することは、我等遺弟の輝かしき任務である。

今夏圖らずも 尊命を拜し、謗劣を顧みず、其中淨土文類聚鈔を講讀させて頂く。本鈔は廣文類に對して略文類と稱せられ、教行信證を窺ふの方規とせられる。廣本六軸は、立教開宗の本典として、規模を廣く二廻向四法の態勢に構へ、眞假を深く三願三經

の網格に判じて、文義の整備せる、機構の精緻なる、固より宗祖撰述の中に其王座を占めてゐる。而して愚禿鈔と二門偈とは、これが左右補翼の位序にあり、更に此文類聚鈔は、廣本の直系に置かれ、恰も國の王子が父王の血と面貌とを傳へたるにも喩ふべきであらうか。

されば本鈔は其文簡約、僅に一卷十七帋に過ぎないけれど、其義は廣本六軸の精要を該羅し、眞宗の肝腑、安心の骨目、此の中に罄きて盡さざるはない。但し廣本の撰述は其目的立教開宗にあれば、時代教學の批判が主要とせられてゐるけれど、略本は絶對的に他力安心が開顯せられてゐる。勿論廣本にも絶對的な眞宗の開顯あり、安心の妙處が闡明せられてゐるけれど、一部の構成としては、相對的教相の面が重要な部分を成してゐる。然るに此略本は、其相對的教相の面を去つて、純粹な安心の面だけが絶對的に打ち出されてゐる。これ即ち時代教學の批判は已に廣本で遂げられたから、教相判釋といふ相對の立場を超えて、直に絶對他力の妙旨に徹到せしめんとせられたものと窺はれる。古來廣本は教相の書、略本は安心の書と稱せるは、兩書に於ける斯る特色を物語つてゐるのであらう。

然るに徳川時代では、佛教の諸宗諸派が、鎖された封建制度の日本國內で、久しく對立的情勢に置かれてゐた。隨ひて當時に成れる我が宗學も、亦自ら廢立を強調し消極的に教義を理解する傾向に追ひ込まれたことは無理はない。爲に此の略本もそれが絶對的の立場であることは認められつ、動もすれば稍々相對的に理解せられることを免れなかつた。若も廣本の教相的廢立の立場で略本を見てゆけば、そうした相對的の理解も、それが決して錯誤でないばかりか、宗義に對する消極的の見方といふことも、實際に尊い意味を持つ。されど略本の眞面目は絶對にあつて、その内容が教相を去つて安心に就き、因願に依らず、願成就に依れることは、全く横超者願成就一實圓滿之眞教眞宗是也（釋尊）といへる絶對横超の立場にあるものとして、そこに開顯せられる純粹眞實の何てあるかといふことが、本鈔研究の主題とせらるべきである。

今や日本は昔日の日本でない。新に東亞安定の一大勢力として、其が指導の地位に立つてゐる。隨ひて日本の佛教も亦この國策の線に沿うて、大陸への躍出發展が目指されてゐる。勿論眞宗の本義は、萬古不變にして時局から超越すべきであるが、已に其宗義の見方に相對絶對の二の立場があるとすれば、その解説について消極的な見方から積

極的な見方へと轉廻することは、容ざるべきであるに相異なる。それゆゑ本鈔の絶対的な立場が、今日に於いて如實に理解せられ、宗義が多少積極的に見直されるといふことは、現下の眞宗として必ずしも意義なしとはしない。されば爰に佛祖の冥鑑を仰ぎ、先輩諸師の芳轍に違ひ、聊か卑見をも加へて、以て本鈔の眞旨を窺ひ、現代に處して我が眞宗精神の昂揚に資すべく念願する次第である。

第一 文前懸譚

一 撰述の年時

本鈔を講ぜんとするに、文前に於ける序講として五門を開く。第一には撰集の年時を考ふ。然るに此文類聚鈔の著作せられた年時に就いては、證憑すべき史實の傳へられてゐるものが乏しい。それゆゑ的確にこれが撰述の年時を定めることは困難である。

先づ高田派の所傳では、高田正統傳六^{右三}に、八十歳三月四日文類聚鈔御製作^{已上正中}記存覺傳と記されてゐる。そして茲に存覺傳とあるは、正明傳四^{左一}に聖人八十歳正月ノコロ御病疾ニテオホヨソ絶食ノヤウニアリシガ二月ノ初ヨリ快然タリ、因テ三月ノハジメヨリ文類聚鈔ヲ書タマヘリとあるを指したものらしいが、是等の記録の信用し難いことは世間既に定評がある。それゆゑ此の八十歳撰述説は採用し得られない。

次に舊く越後國高田淨興寺に秘藏せられてゐた一本があつて、その奥書に、建長七

歳七月十四日書之愚禿親鸞八十三歳と識されてある。此の一本何時の頃からか、東本願寺に納められ、現に御所藏となつてゐることだが、これを古來宗祖の御眞蹟本であるやうに傳へてもゐたけれど、現存せるものは古寫本としか拜見されない。但し香月院や易行院は、此一本の卷末には、六字十字九字の三の尊號が列ねられ、其次に建長七歳云と書かれてあると言つてゐるし、了祥師は之を怪みて、三尊號が奥書に列ねられてゐるやうなことは、宗祖の撰述に例のないことであつて、これは信用し難いことだと評せられてゐる。現存本山御所藏本の奥には、この三尊號が掲げられてゐないので、不審とせられる所であるが、兎も角も現に此一本に建長七年八十三歳で書かれたことが識されてゐれば、それは證憑し得られる。加之、江州福傳寺所傳古寫本にも、其奥に建長七歳乙卯七月十四日は書、愚禿親鸞訃と識され、又理綱院所傳の存覺上人御延書の本にも、これと同じ年時が記されてゐることであれば、これらも亦淨興寺本と同系のものとして、八十三歳撰述説を助證するに足るのである。

然るに別に覺如上人御延書本が傳へられ、其奥に、本云正嘉元年林鐘四日書寫之、釋親鸞八十五歳點申之と識されてゐる。惠空師自筆の此延書寫本で見れば、此奥書の傍

に、本奥鸞聖人以朱被染御筆とあり、又其前に本願寺聖人以被染御筆眞名正本依願主所望難避以和字所延寫也と、延寫の由來を註してゐられる。之に依れば覺師が和譯せられた時の底本は、宗祖の眞蹟本であつたことが知られ、八十五歳書寫の事實が信憑し得られることとなる。

斯の如く前の淨興寺本には單に書之とあり、此御延書本には書寫之とあれば、本鈔は建長七年宗祖八十三歳にしてその草案方に成り、正嘉元年八十五歳の時、再治清書の上、朱點まで加へられたものと推定せられ得るのである。

孰れにせよ、撰述年時を考證すべき資料が、この二種より外にはないから、八十三歳草稿、八十五歳清書といふ古來の説に従うて置くより外に年時を知るべき方法はない。今や略本には御眞蹟と認められるものが傳つてゐないし、古寫本も右の二三に限られてゐるので、外に資料の現れない限りは、漫に勝手に想像は容されない。古く日溪の蹄澁記に、略本撰述の年曆恐くは廣文類の前にあるかと云ひ、近く高田學報第六に同じく略前廣後の説に多少の内容的考査を加へ、前に略文類の腹案成りて、後に元仁元年の廣文類が書かれたものであらう。建長正嘉二本の奥書は、俱に書寫の年時であらう(生鸞宛)と

言はれてゐるけれど、何等陽證の據るべきものがなければ、斯る説は採用せらるべき價値がない。

されば宗祖の撰述中、教行信證が元仁元年五十二歳の著作であるとすれば、此の略本は八十歳以後に完成せられたのであつて、廣本に遅るゝこと三十餘年の後に撰述せられたものであり、又八十歳の時に二門偈の草本、八十四歳にその清書が成り、八十三歳に愚禿鈔が述作せられたといふ説に従へば、是等の聖典概ね畧本と前後して、宗祖の晩年に成れるものである。其他和語の聖典の多くも、概ね御老後に書かれた本が遺つてゐるのに由つて、宗祖の老いては増々旺んに在したことが知られるばかりか、其思索も亦圓熟せられてゐたことと察せられる。

而して廣本は五十二歳で御草稿が成つたとしても、六要會四^四に此書大概類聚之後上人^レ幾^{ナラ}歸寂之間不及^レ再治^二とあるに徴すれば、常に之を座右に置いて御老後まで修治せられしもの、如く、隨ひて御在世中門弟の中で廣本書寫を許されたもの、至つて少數であつたことは、之を想像するに難くない。然れば略本の成立が廣本を縮收して愚鈍の下機に與へたものであるとしても、略本は略本としてこれを獨立したものと考へ

てよい。已に廣本の傳持せられるのが至つて狭い範圍に限られてゐたとすれば、當時略本を拜受し又は手寫して讀むことを得た輩も、其多數は恐らく廣本と之を併せ讀むことはできなかつたであらうか。されば宗祖の撰述意圖の上にあつても、縦ひ廣略二本は初めより關聯せるものに相異ないとしても、それを讀ませる對機の上から見れば、必ずしも略本は之を廣本から鈔録したものととして與へられたのではなく、これを獨立せる著述として授けられてゐたのであつたと考へた方が事實に近いかも知れない。特に略本が安心の要書であるとすれば、それが全く獨立せる立場で書かれてゐると見ることが、寧ろ當然である。されば略本の始終いづくにも、廣文類から略鈔せるものであることが記されてゐないのであつて、之を略本又は略文類と名づけることは、後人の呼稱に過ぎない。隨ひて略本自爾の構成にあつては全く獨立せる御撰述として拜見し得られるのであつて、殆ど年月とか時處とかいふことから超越せる趣きがある。是れ古來廣前略後と定められてゐるのにも係らず、一方にまた略前廣後とも見られ得ると言はれる所以であらう。

二 別撰の意趣

宗祖聖人、別に此書を製作したまへる意趣果して何れにあるかといふに、先づ一に總じて言へば自信教人信報佛恩の爲であることは言ふまでもない。本書の序説に敬信眞宗、教行證とあるは、正しく宗祖自督の表白であるゆゑ、これ自信である。また末代、教行專可修此、濁世、目足必可勤斯とあるは、その切々たる教人信を披瀝せるものと見るべく、更に特知佛恩、窮盡明用、淨土文類聚と、こゝに本書の述作が報じても窮め盡し難き報佛恩の爲であることを開陳せられた。凡て書物の序文はその作者の著作意志の現はれてゐるものであるゆゑ、本鈔製作の意趣が先づ自信教人信報佛恩の爲にあることは、この序説の上で何人にも承認せられるであらう。更に結勸の文に嘆所聞慶所獲、採集眞言鈔出師釋專念無上尊特報廣大恩とあるのも、また此の意趣を物語れる文字であつて、御撰述の目的偏に此にあることは、本鈔を研究するものゝ、必ず常に銘記すべき所である。

二に別して言へば廣本の肝要を略鈔して、末代の下機に授けんが爲である。廣本六軸は三經七祖を初めとし餘經餘論に至るまで、その引文六十四部に及び、その文甚だ廣汎であり、一部の態勢は淨土眞宗を經とし、二種廻向を緯とし、教行信證四法の錦を織り成せるものと見られる。而も眞假批判聖淨批判より廣く内外批判に及び、具に三願三經三機三往生の水際を分ち、細に四法三願・二廻向四願・六法五願・眞假八願といへる體系を立てゝゐる。されば文の廣汎なる上に、其義亦複雑にして、識者すら難解とするところなれば、一般の時衆之を辨ふることは頗る難き惱みがある。されば廣本を縮小して其要を容易く知らしめんが爲に、本鈔を製作せられたといふことは、今日にあつても之を推知するに難くない。否、それは既に教行信證大意に當流聖人ノ一義ニハ教行信證トイヘル一段ノ名目ヲタテ、一宗ノ規模トシテコノ宗ヲバヒラカレタルトコロナリ。コノユヘニ親鸞聖人一部六卷ノ書ヲツクリテ教行信證文類ト號シテクハシクコノ一流ノ教相ヲアラハシタマヘリ。シカレドモコノ書アマリニ廣博ナルアヒダ、末代愚鈍ノ下機ニヲヒテソノ義趣ヲワキマヘガタキニヨリテ一部六卷ノ書ヲツマメ、肝要ヲヌキイデ、一卷ニコレヲツクリテ、スナハチ淨土文類聚鈔トナツケラレタリ。コノ書ヲツネニマナコニサヘテ、一流ノ大綱ヲ分別セシムベキモノナリと示されてある。大海を渡るには船筏

を要する。廣本の大海を越えんと欲せば、必ず略本の船後に依らねばならない。例せば天台にあつて摩訶止觀の後に小止觀あるが如くである。されば吾祖の御老後その切々たる矜哀の御心から、廣博にして且つ深奥なる教行信證六卷の精要を鈔出して、この略本一卷となし、愚鈍の下機に授けんが爲に撰述せられたものであると見られ得る。

三には更に廣本に隠れたる幽意を顯彰せんが爲である。廣本は餘りに廣博深奥なれば、たゞこれを縮少せられたばかりでない。これを鈔略すると同時に、未だ廣本にあつては其表面に打ち出されてゐない微意を彰さんが爲に、此書を作らせられたものと察せられる。然らば其幽意とは何であるかといふに、且らく其主要なるものを擧ぐれば、(一)、四法の開合自在なる義趣を顯はすといふこと。(二)、選擇相傳の奥旨を顯はすといふこと。

(三)、因願の極意は成就を以て知れといふことの三要件である。

第一に四法の開合自在なる義趣を顯はすとは、廣本は四法各々卷を異にして獨立せるが故に、四法互に聯繫して開合自在なる趣は隠れてゐる。然るに略本にあつては一連の文章中に四法を明せるが故に、自ら四法の開合自在の趣旨が顯はれてゐる。此義後の大意の題下に詳説することとする。

第二に選擇相傳の奥旨を顯はすとは、廣本は其後序に選擇書寫の事を記し師資相承の旨を傳ふるも、行卷の外に信卷を別開して、報土の眞因唯信心にありと顯はせるところ、稍選擇集に於ける念佛爲本の義に相違するに似てゐる。これ他より背師自立の謗を被れる所以である。然るに今略本の組織は、前より後へと順觀すれば、一部は教行二法を以て貫き、信は行の中に攝まる。故に選擇集が十六章段の中、初の教相二行の二章を以て綱領となし、他の十六章はこれが助成に外ならず、教行二法を以て一部を統べてゐると一致し、吾祖の四法建立が元祖の選擇集に違せざることとなる。されど略本は之を後から前へと逆觀する時は、その歸結は三一問答にあつて、信心を以て最要とする説相である。これ選擇集も三心章にその重點を置いてこれを見れば、信疑を以て迷悟の分界となせる精神と一致せるものである。随ひて廣本に於いて吾祖が行の外に信を別開したまへることも却つて亦選擇集の奥旨を發揮したこととなる。斯の如く略本は之を順觀すれば選擇集の文相に任せて念佛爲本の旨を相承したこととなるし、また之を逆觀すれば選擇集の釋意を酌みて信心爲本の旨を相承したことが彰されることとなる。されば廣本も固より選擇集の教義を更に展開せしめたものではあるけれど、廣本の外に略本を作られ

たのは、特に選擇相傳の旨を顯はすにありと見られてゐる。

第三に因願の極意は願成就を以て知れといふことにあり、第十八願成就はこれ他力安心の根源である。されば改邪鈔本^三ソレニツイテ三經ノ安心アリ、ソノナカニ大經ヲモテ眞實トセラル、大經ノナカニハ第十八ノ願ヲモテ本トス、十八ノ願ニトリテハマタ願成就ヲモテ至極トス、信心歡喜乃至一念ヲモテ他力ノ安心トオボシメサル、ユヘナリと、これを一流相傳の要義とせられてゐる。即ち淨土の三經之を攝末歸本すれば大經に收まる。大經は其宗致たる四十八願に收まり、四十八願は其王座にある第十八に收まる。然るに此の第十八願を以て觀經の住立空中へ移して佛體即行を談ずるのが西山流であり、又此十八願を以て觀經の下々品へ移して自力念佛を募るのが鎮西流である。獨り此十八願を願成就へ移して一念業成を力説するところに、他力眞宗の立場がある。されば信卷末^謂に横超^ト者即願成就一實圓滿之眞教眞宗是也と、眞宗の肝要、他力の奥旨、全く願成就にあると見られたところに、一宗が成立したのである。然るに廣本は立教開宗の本典なれば、四法六法を建立する礎石として因願も成就もこれを共に引證せられた。それゆゑ廣本ではなほ成就を至極とする精神が顯著でない。されば略本では因願を略し

て成就のみを引用し、こゝに他力安心の淵源は、願成就にあることを明白ならしめたのである。

以上製作の意趣について、從來の學説を叙べたことであるが、初の自信教人信報佛恩の爲であると言へるは、他の製作にも通ずる總の來意であり、第二の廣本の肝要を略鈔して末代の下機に授けんが爲にといひ、第三の廣本に隠れたる幽意を顯彰せんが爲にといへるは、此の略本に限れる別の來意である。然るに私は別に略本を其の獨立せる安心の要書と言へる立場から見て、略本撰述の意趣は、宗祖自らが敬信の領解を開闡して、他力安心の自督に資せんが爲であるとの一項を加へることとする。

略本が宗祖自らの敬信眞宗教行證といへる領解を開陳せられたものであることは、其序説から四法總説段に亘つての態勢に依つて明に看取せられる。而して其四法の能所因果の關係は、信樂の一念を横に展開してそれが内外因縁和合の相を解了せしめたものに外ならない。思ふに宗祖の廣略文類に引用せられたる要文は、それが悉く自己の領解内容たるに於いて、彼の尊號眞像銘文に出されたる多くの銘文と其意味相通すべきである。而して銘文は尊號又は眞像の上下賛文として書かれたものであるが、これら銘文の

内容を検するに、教行信證といへる四法は、即ちこれら銘文の内容を類別すべき標目であると看做してよい。故に略本にあつて、四法の標目の下に簡潔な要文の引かれてあることは、二廻向四法といへる因縁和合の體系の下に、これらの銘文を通じて、他力真心の扉が開闡せられて、そこに大聖矜哀の善巧より顯彰せられたることに感銘せるものと思察せられる。

而して次の偈頌の一段は、更に此の横の因縁の體系的領解を豎の歴史傳統の上に仰ぎ視て、悠遠な時劫に流れ貫く偉大な攝化の力に感激し、他力行信の救ひの空しからざるを實證すると同時に、是等聖典師釋に恵まれ、遇ま行信を獲て遠く宿縁を慶ばれたものであると拜察せしめられる。而して終の問答段は自督の一心が本願の三心と全く一つに融け合うて、疑蓋無雜の信樂に外ならぬことを明證せられたもので、茲に傳統の淵源に動かぬ礎石が與へられたと同時に、敬信眞宗の要は唯疑蓋無雜の一心にあることが闡明せられた。

斯く略本一部の構成について、その來意を考察すれば、宗祖撰述の意趣は、全く自己敬信の領解を開陳して、他力安心の自督に資せんが爲であることが知られる。これを

改悔文ていへば、初の四法總説段は、モロ／＼ノ雜行雜修等の一段に當り、三一問答段は、即ちタノム一念ノ時往生一定であり、正信偈は、コノ御コトハリ聽聞マウシワケ候事御開山聖人御出世ノ御恩等に當るとも見られ得る。孰れにもせよ、略本が安心の要書であり、それが絶對的に他力信心を開顯せるものであるとすれば、その撰述意趣も、この見地より略本一部の構成について、これを考查せらるべきである。

三 一部の大意

上に製作の意趣について叙べたが、更に文前に於いて略本一部を概括する大意を確めておくことは、本鈔を窺ふについて、必要な準備である。然らば何等の要領を以てか略本の大意とすべきであらうか。

略本が既に廣本を鈔略せるものであるとすれば、略本の大意を識らうとするには、先づ廣本の大意を定めなくてはならない。然らば廣本の大意如何といふに、教行信證六卷は、廣く眞假の四法を明して之を批判するにある。即ち前五卷は顯淨土眞實の四法であり、後の一卷は顯淨土方便の四法であつて、眞假の四法が對照せられてゐる。次いで更

に廣く聖淨相對し、内外相對して、宗教一般の批判をも與へてゐるけれど、其主要とする所は、要弘相對し眞假差別して、彼は要門假門なるが故に方便化土の往生である。此は弘願眞實なるが故に眞實報土の往生であると、方便の四法に對して眞實の四法を明せるものが即ち六卷の主旨である。されば方便の末を廢して眞實の本に歸せしむれば、唯眞實の四法を明せるものであつて、これを外題に教行信證と標榜せられてゐる。而して此の眞實四法たるや往還二廻向の外にあるのではなく、二廻向も亦四法の外にあるのではない。二廻向四法は一南無阿彌陀佛の名號の徳相に外ならざれば、これを顯示せんが爲に、二廻向を經とし四法を緯とし、以て淨土眞宗を組織されたのが廣本六卷である。故に教卷の初に、謹案淨土眞宗有二種、廻向一者往相二者還相、就往相廻向有眞實、教行信證と總標せられた。されば廣本六卷の正所明とするところは、唯眞實の四法にあれど、證卷より眞佛土卷を開出し、眞佛土に對して化身土を顯はせるが故に、化身土卷は眞佛土卷に收まり、眞佛土卷は證卷に收まる。而も還相は證果の大用に外ならざれば、これを往相證果の中へ攝して、證卷に歸屬されてゐる。斯くの如く廣本一部の始終を大觀すれば、六卷の精要たるや、唯眞實の四法を明すにあるのであつて、是れ

卷首卷尾俱に顯淨土眞實教行證文類といへる題號の置かれてゐる所以である。これを要するに廣本六卷の正所明とする目標は、全く眞實の四法に置かれてはゐるけれど、立教開宗の本典たる廣本としては、廣く眞假の四法相對せしめて、時代教學の批判をなせる所に、その大意を認めなくてはならない。

廣本の大意已に眞假の四法にあり、之に對して略本の大意は如何といふに、一應は唯眞實の四法を明すのが即ち略本の大意であるというてよい。即ち略本も同じく二廻向四法を明すにあれど、要弘眞假を分別せず、唯絶對的に眞實の四法を開顯せられたのである。これ廣本は立教開宗の爲の著作として、時代教學の批判といふことが主要な目的とせられてゐる。それゆゑ同じ眞實四法を明すについても、相對的に其眞實を開顯し、其四法の根據を建立することに、深き注意が向けられてゐる。これ廣本が安心の書といふよりも、教相の書であると思はれる所以である。然るに略本は廣本に於ける方便の方面は全く之を省略し、單に其眞實の方面のみを開顯せられたから、絶對的な立場にあつて、唯眞實四法のみを顯揚せられた。これ略本が安心の書と思はれる所以である。

斯く略本は既に絶對的な立場で、眞實四法のみを開顯せられたのであるゆゑ、單に廣

本に顯された眞實四法を略鈔せられたといふに止らず、更にその四法の開合自在の旨が彰されてゐる。即ち略本では、四法は或は三と成り、或は二と成り、或は一となり、一三四の開合は全く無碍自在である。既に廣本は四法各々卷を異にし、而も四法の建設に力を用ひられたのであつて、こゝに四法の眞實は相對的に開顯せられてゐるとしても、まだ四法の開合自在なる旨が比較的に隠れてゐる。然るに略本では、四法卷を異にせず、一連の文章に書き現されてゐるから、廣本に隠れたる開合自在の相が此略本に至つて闡明せられた。故に略本の大意は同じく眞實の四法を明すについても、その開合自在なる旨を彰はすにあると見らるべきである。

されど略本が斯の如く四法の開合自在なる旨を彰はせるは何の爲であるかといふに、それは他力信心の趣を明かにせんが爲に外ならない。されば同じ四法の開合自在でも其要點とする所は、行信二法の開合自在なる邊にある。即ち略本が行中攝信の態勢であるといはれるのもこれが爲であつて、行の中に信を攝めて、行信は之を二とすれば二となく、之を一とすれば一となる。二にして而も一、一にして而も二、行信二法が全く一具不離なるところに、他力廻向といふことの妙趣がある。これ即ち行信能所機法一也と

言はれる所以であつて、他力安心の内容が機法一體であるといふことも、この行信の二法が一具不離であるといふことの外にはない。何となれば若し機を以て法に攝すれば、信は行の中へ攝まりて、所行の法體たる名號を外にして衆生の能信なく、若し法を以て機に攝すれば、行は全く信の中へ攝まつて、衆生の信心の外に法體の名號はない。往相廻向の四法にあつて、行信の二は因にして證の一は果である。唯一の證果に對して、因となるべきものが二ある筈はない。然るに因に行信の二あるといふことは、行信の二法共に是れ往相廻向の内容であるから、二にして而も二ならず、一は法にして一は機であるから、一にして而も一ならず、行信二法の開合自在なるところに、他力安心の妙趣あることを知らしめたのが、この略本に於ける行中攝信の態勢である。

然らば略本は何を根據として、四法の開合自在、殊に行信二法の開合自在なることを彰はせるのであるかといふに、それは願成就の文を根據とせられてゐる。既に廣本は四法の建立を本旨とすれば、彌陀本願の源に就いて、二廻向四法を明すに必ず先づ因願の文を引き、次に他の諸文を引證せられてゐる。而も行卷には十七願、信卷には十八願と、嚴正に分たれて、行に屬すべき文は必ず行下に引き、信に屬すべき文は必ず信下に引か

れてゐる。然るに略本にあつては、因願を略して成就のみを引き、而も行章に於ける型を破つて、十七十八の二願成就が連引されてある。これ因願にあつては願々別個に誓はれてゐるに拘らず、成就に至つてはそれが自由に散説せられ、殊に十七十八の二願は、緊密な聯鎖の下に説かれてゐるのであつて、そこに行信二法の開合自在といふことの根據が見出されたことと考察し得られる。加之、十八願成就の文にあつて、其名號とは十七願成就の行であり、聞といひ信心歡喜乃至一念とあるは信であり、即得往生等とあるは證である。而も其中間に至心廻向の四字が置かれ、行信證の三法悉く是れ他力廻向なることが彰されてゐる。更にこれを十七願の諸佛能讚からいへば教である。されば十七十八二願成就の文に、教行信證の四法具備せられてゐるばかりか、已に往相他力の廻向たることまでが顯されてゐる。これ即ち一家安心の極意は、願成就にありとし、蓮師御文の教化が全くこれを傳承せられた所以である。

以上叙べ來れる所、之を要するに略本一部の大意如何といへば、即ち廣本に開顯せられた眞實の四法を叙べるに、特に願成就の經意に基き、四法の開合自在なる旨を彰はし、以て他力安心の趣を明すにありと見るべきである。若し之を廣義に見れば、四法の開合

自在を明せりと言ふべく、若し之を狹義に見れば、行信二法の開合自在を明せるところに、深甚の旨趣が味ひ得られる。而して願成就にその根據の置かれる所以は、前述の如く願文の内容に廻向の四法の開合自在なる相が歴々と顯示されてゐるからであるには相違ないが、更にまた考ふべき要義がある。何となればこの成就の文は、十八因願が彌陀招喚の相であるのに對して、釋迦發遣の相として説かれてゐる。即ち願成就にあつては釋尊が善知識の地位に立ち、第三者として其御心に映れる本願の相をその本懷の儘に説かれてゐる。後の天親菩薩は、その自督として本願の三心を約して我一心と表白せられたが、宗祖の安心が殊にこの一心の華文を仰がれたことは今更言ふまでもない。而も論主が三心を合して一心とせられたのは、全くこの成就の信心歡喜乃至一念の御言に示唆せられたものとして、そこに根據が見出されてゐるではないか。然るに本願の三信は約法なる故に三であり、論主の一心が約機なるが故に一であることが既に定義とせられてゐるとすれば、成就の信心歡喜乃至一念もまた釋尊が、これを約機の立場から説示せられたものであることが推考せられ得る。故に信卷末卷では、これを衆生の機受に約して、これらの實語に解説が與へられてゐる。而して願成就の上にあつて、四法が開合自

在であり、殊に行信が一具不離であるとすれば、略本に於ける絶対的の立場といふことも、これを機受の上に認めるといふことは、強ち予輩の臆断であるとは言はれまい。

是に於いてか私は再び之を略本一部の構成の上から考察を試みることにする。何となれば今は略本一部の大意を論定せんとするのであるから、これを一部全體の構成から再びこれを考察しなくてはならない。略本の内容は、下に詳説せられるやうに、(一) 總説(二) 偈頌(三) 問答の三部分から成立する。其中初の四法總説段は、行中攝信の態勢であつて、四法を並べ説けども、信は行の中に統攝せられて、主として行の絶対性が昂揚せられてゐる。これに對して第三の問答段は、三信の中に名號の行體を認めて、信の中に行を統攝し、信の絶対性が確立されてゐる。然るに第二の正信偈はその中間に位して、古來行信の不離を意味するものと考へられ來つた。予輩亦この見解に違ふものであるが、茲に深き注意の拂はるべきは、何が故に行信の不離を彌陀釋迦七祖といへる歴史的傳統の下に詮顯し、而も偈頌といへる讚歌の表現を爲されたかといふことである。これ恐らくは彌陀の大願が地上に於ける釋尊を俟ちて、それが願成就に於ける如來如實の言となり、又七祖と言へる弘經の大士宗師により、如來の本誓機に應ずることを明にせられた

ところに、本願の宗教たる行信不離機法一體の救済が上下三千年の歴史を貫いて、この人類の上に流現されたものと考ふべきではないか。而も此の地上の傳統として普く流行せる行信は、全く概念や教義を超えた絶対的なものであつて、これは叙述や論議の形式に依らず、寧ろ讚歌の偈頌として讚嘆せらるべきものである。されば正信偈に於ける行信不離といふことを斯く歴史的傳統に貫流せる絶対的なものとして考ふることによつて、それが行の絶対性を昂揚せる總説段と信の絶対性を確立せる問答段の中間にあつて、偈頌自らの持つ役割が重い位置にあることが知られる。

之を要するに、略本が絶対的に他力安心を開顯せる書であり、而も願成就を根據として四法の開合自在を彰はし、而も行信の關係に重點の置かれてゐるといふことは、これを略本一部の大意として、宗學として深き研鑽に値ひするものがある。而して略本一部の機構といふことも、この大意の下に考察せられてこそ、これを吾人がその大意と推定せるものが、眞にその大意となり得るのである。

四 廣略二本の同異

略本は廣本を略鈔せるものであるとすれば、廣略二本を比較するに、其内容の一致せるものあるは勿論である。されど既に廣説と略説との相異あれば、文に廣略あると共に其義においても彼此の間に幾多の差異が見出される。

されば古來廣略同異の題下に、これが考察に力を盡し、種々の相異點を數へた。先づ香月院は十個の異を擧げて之を辯じ、易行院は更に二個を加へて十二個の異を數へ、開悟院は更に三十六個の異を數へて之を論じ、眞成院は尙ほ仔細に之を數へて五十個の異を立てられた。

香月院の數へた十個の異とは、(一)方便、四法有無、異(二)三願相待有無、異(三)眞假、二土有無、異(四)四重、教判有無、異(五)二門、眞假有無、異(六)二道、眞偽有無、異(七)教、屬_三往相_二不_一屬、異(八)六十行偈安處、異(九)所引、文證具略、異(一〇)列明四法具略、異の十異である。易行院はこの十異の外に、更に題號について眞假、相對有無、異といふを立て、終の問答について三一問答具略、異といふを立て、これを十二異とせられた。これら

の相異點は、廣略二本の比較について考察の目標を與へるものであつて、略本を窺ふに就いて尊重せらるべきである。若し仔細に相異の個處を數ふれば、それは限りもないことであつて、開悟院の三十六異、眞成院の五十異、亦以て參考せらるべきである。

されど是等相異點の多きを數へるよりも、廣本から略本が鈔録せられるに當つて、如何なる條件の下にこれを省略せられたのであつたかといふことが問題となる。即ち宗祖が廣を縮めて略とせられるに當つて、斯の如き相異點の生ぜしことは、何に由つて來れるかを考察せずにはゐられない。それゆゑ皆往院はこれが條件として、(一)略_{ニシテ}方便_ヲ就_ニ眞實_ニ異(二)略_{ニシテ}傍依_ヲ就_ニ正依_ニ異(三)略_{ニシテ}教相_ヲ就_ニ安心_ニ異と三異に之を取り纏めてゐられるし、香涼院は更に其要を提げて(一)相對絕對の異(二)影略互顯の異といふ二異に統攝せられた。斯く廣略相異の由つて生ずる條件につき三異又は二異を立てられたといふことは、これが考察に一步を進めたものというてよい。

但し今の時、更に之を検討すれば、廣略同異の問題については、これが同異は同異として之を比較し、又其間に相異の由つて現はるゝ所以の規準については、別に之を規準として考察せらるべきであらう。而して廣略二本を比較し、その相異の個處を點檢し之

を數へ擧げることとは、ほゞ先輩の業績に盡きてゐる。されどこれが鈔録の規準といふことは更に之を考へ直さるべきである。香涼院が影略互顯の異と言はれてゐるのも、適切な見方であるには相違ない。されど影略互顯から現れた相異點であれば、それは相異であるといふよりは、寧ろ相異に似て實は相異ではないのである。廣略二本の間にかゝる相異點があるとしても、それは鈔録の規準たる立場の相異ではなくて、同じ立場から出た文相上の軽い相異に過ぎない。

それゆゑ私は、この相異の規準として、(一) 略ニテ相對ニ就ク、絕對ニ異 (二) 略ニテ教相ニ就ク、安心ニ異 (三) 略ニテ約法ニ就ク、約機ニ異の三を立てる。思ふに廣本の廣本たる所以は、其内容に相對と絕對とを具へ、教相と安心と相備り、約法約機共に含める所にある。故に廣本は相對であり、略本は絕對であるといふ如く、これを相對絕對の異としてのみ考へてはならない。廣本は立教開宗の本典なるが故に、時代の教學を批判せんが爲に、或は内外相對し、或は聖淨相對し、或は眞假相對して、その開顯が相對的の立場に置かれてゐる。されど眞宗の本質たるや全く二廻向四法の絕對眞實なるところにあるのであつて、それは廣本の前四卷に詮表せられた所である。故に略本では廣本に於ける相對批判の方

面を切り捨て、絕對開顯の方面にのみ就いて、これを鈔録せられたのであつたから、香月院が數へた十異の中、前の六個の異點の如き相異が現れるに至つたものと推考せられる。

斯く相對を略して絕對に就けるは、全く教相を略して安心に就かんが爲であつた。教相は批判を主義とすれば、それは相對的の立場に置かれなくてはならない。廣本が三々の法門を以て其組織の綱格とし、眞假の批判に目標を置く所以は、内外の諸宗諸派の間に立ちて、弘願一乘の眞宗を創建せんが爲めであつた。故に二雙四重の教判を出し、二道の眞僞二門の權實より、淨土の眞假を辨別して、絕對不二の眞宗を打ち建てられたのが、即ち廣本六軸であつた。略本は既に廣本で打ち建てられた眞宗について、偏に實踐上に他力の心行を獲得せしめんが爲に、廣本に於ける教相の方面を略して、主として安心の方面を記されたのであつた。これ廣本と略本において、幾多の相異の現るゝに至つた所以である。

然るに教相と安心とは離れたものではないが、一應之を分てば、教相は約法であり、安心は約機である。故に略本では約法を略して約機に就けるものと見られ得る。されど

廣本にあつては、約機の信に相對批判の根據が置かれるので、却つて約法の行に絶對の立場が置かれやうとした。即ち信卷に正定聚之機と標し、至心信樂之願として、これを十九二十の至心發願と至心廻向とに對立せしめ、こゝに批判の基調を置けるより見れば、約機の信はこれを機の趣入の上から寧ろ相對の立場に置かれたものと見てよいのである。されど信體その物は本來絶對であつて、信卷末卷の如き、願成就に依れる信の絶對性を高揚せるものであるから、一概に言ひ去ることはできぬが、廣本に於ける機法の絶對不二といふことは、却つて行卷に顯れてゐる。されば略本が約法を略して約機に就けるといふことは、他力信心の絶對性を信の上に見たばかりか、更に行中攝信して、行をもまたこれを所廻向の物柄として、絶對的の立場から見えてゐるのである。略本に於ける往相の大行が絶對の行であるといふことは、それが往相の淨信と對立するものであらう筈はないからである。従來廣略の相異について、十異十二異と數へられても、行下に於ける二願成就の連引がどうやら輕視されてゐたやうであつた。行中攝信といふことは、略本の特異點として、是非之を考察に加へられなくてはならない。

以上之を要するに、略本の特徴とする絶對とか安心とか約機とかいふ立場から言へば、廣本もまた固より之を其内容とするものであつて、略本はそれから抜摘せられたのに外ならない。故に是等の方面では、廣略相通じて全く同とも言はるべく、されど相對といひ教相といひ約法といはれる方面では、これは廣本にあつて略本にはない。いや略本にないとはまでは言はれぬけれど、それが略本の特徴ではないと言つてよい。これ廣略の規準各別にして彼此相異せる所以である。

五 四法の開合

教行信證の四法は、宗祖が一宗の規模として建てられた獨創の名目である。廣本は眞實の四法を建設し、此の礎石の上に淨土眞宗を開立せられたのであるから、教行信證各々卷を異にし、四法各別に開顯されてゐる。然るに略本は、其別撰の趣旨とするところから、四法の開合自在を彰はすにありとすれば、本文に入るに先ちて、四法の開合について豫め其義趣に考察を加へなくてはならない。

前にも叙べたやうに、四法の開合自在とは、教行信證の四と別けられてはゐても、此の四法は或は三と成り或は二と成り或は一と成り、一二三四の分開と統合とが、全く無

碍自在であるを言ふ。今これを略本總説段の機構から見れば、その科段が四法として
も、三法としても、また二法としても分けられる。これを左に圖表すれば

- (一) 四法具足ノ科
 - 一、明教……………然言教者
 - 二、明行……………言行者
 - 三、明信……………言淨信者
 - 四、明證……………言證者
- (二) 教行證三法科
 - 一、明教……………然言教者
 - 二、明行……………言行者
 - 三、明證……………言證者
- (三) 教行二法科
 - 一、明教……………然言教者
 - 二、明行……………言行者

といふ三重の科段が立つ。若し略本偈前に表れた文脈の起盡に隨ひて科すれば、第三の
教行二法を明せるものと見るが、最もその文相に親しい。即ち初に教を明し次に行を明
し、其行の下にて本願力廻向から往相と還相との二廻向が開出せられてゐる。故に下に

出せる信も證もまた還相廻向も、皆この本願力廻向の中に統攝せられ、南無阿彌陀佛
の廻向から展開せるものに外ならぬのである。これ即ち序文に末代教行とある教行を承
けたものと見られるのであつて、教行二法を明せるものと見ることが、一部の文相に適
へるばかりか、選擇集相承の趣旨さへも、この教行二法科で彰されてゐる。これ略本の
科文としては、第三重の教行二法科の用ひられる所以である。

次に第二重の教行證三法科の立てられる所以は、文面に四法肩を並べてみれば、其信
は行の中に攝められる行中攝信の態勢である。故に行下に亦有淨信と信を開出し、序
文にも眞宗教行證と三法が陳ねられてゐる。此の趣を彰はすが第二の教行證三法科であ
る。されど略本が廣本の縮寫であると思れば、第一重の四法具足の科段もこれを立てず
にはゐられない。即ち四法一々に標して之を別釋別嘆し、廣本と同じく敬信眞宗教行證
の相を開陳せるものに外ならざれば、略本も亦眞實の教行信證を明せるものと見らるべ
きである。

斯の如く略本の態勢が、或は四法として、或は三法として、或は亦二法として科段が
重々に建てられるやうに、成立してゐるのは、四法の開合自在を彰はせるものと見られ

なくてはならない。今更に廣本に各立せる教行信證の四法が、略本に來つて、或は三法と成り、或は二法と成り、或は一法となる相を明して、四法の開合無碍なる關係を詳説すれば、(一)教行證の三法となれる例 序文に眞宗教行證と三法を出し、又前の第二重の三法科の如きがそれである。(二)行信證の三法となれる例 總説段に教の一は往相廻向に加へず、行信證の三のみを三願に配して願力廻向となせる如きがそれである。(三)教信證の三法となれる例 本鈔^{六七}の結尾に唯説阿彌陀不可思議願(教)聞眞實功德獲無上信心(信)速證大涅槃(證)の如き、行を教中に攝めてある。(四)教行信の三法となれる例 序文に受行最勝弘誓而捨穢忻淨(行)奉持(信)如來教勅(教)とある如き是である。以上は四法が合して三法となれる無碍自在の相である。

次に四法が合して二法となれる例を出さば、(一)教行の二となれる例 前に出せる第三重科の下の如し。偈に依諸經論撰教行とあるも亦是である。(二)教信の二となれる例 偈文に應信(信)釋迦如實言(教)といひ、唯可信(信)斯高僧説(教)といへる如き是である。(三)教證の二となれる例 偈に眞宗教證興片州とある如き是である。(四)行信の二となれる例 就往相有大行亦有淨信と行信二法を往相廻向の内容とせられてゐる。

(五)行證の二となれる例 本鈔往相廻向の下を行中攝信と見れば、若因若果と結べる因果は、行因證果に外ならない。以上は四法が合して二法となれる無碍自在の相である。

最後に四法が合して一法となれる例を出さば、(一)教の一法となれる例 言教者則大無量壽經也とあるのを絶對的に見れば、行信證の三はそこに統合せられて教の外にはない。(二)行の一法となれる例 往相廻向の中に大行淨信の二つがあれど、行の中に信を攝すれば、行は絶對にしてたゞ一南無阿彌陀佛の廻向に外ならない。故に四法は擧げて行の一法となる。(三)信の一法となれる例 本鈔^{五六}明知緣二尊大悲獲一心佛因とある如き、大悲の廻向を信の一法にのみ歸してゐる。(四)證の一法となれる例 淨土文類聚鈔といふ題號の淨土を所期の義に約すれば、則ち證の一法を標せることとなる。以上は四法を合して一法となせる開合自在の相である。

上來煩を厭はず、略本に表はれた四法の開合自在を、幾多の例證に依つて詳説した。斯うした開合自在の相は、廣本を初めとして、其他の聖典の到る處に見られるけれど、今は特に略本の上でこれが例格を微覽したのである。而して更に茲に闡明せらるべきは、何が故に殊に略本にあつて、斯る開合自在の關係が彰されてゐるかといふことである。

それは既に一部大意の下や別撰意趣の下でも一應の解説は與へたことであつたが、今ここで再び其意義を明瞭にするならば、それは略本が絶対的の立場で書かれてゐるからである。既に教行信證の四法は、往還二廻向の内容の外に出でず、其體から言へば、一南無阿彌陀佛の外にはないのである。廣本に於ける教行信證の四法は、方便の四法と相對せられるけれど、略本に於ける四法は、何等これと相對せられるものはないのである。されば之を四法として機法因果の約束が分相せられるけれど、それは全く本願力廻向の絶対的な内容に外ならない。従つて教も行も信も證も、各々それ自らにあつて絶対的である。四法は常に如來の願心にあつて、一具不離であるから、四法の一々を開けば、他の三が引き出され、その一々にまた他の三が攝められる。斯くてこれを二法とするも一法とするも、開合無碍であり、伸縮自在である。一たび絶対超越の境地に入れば、機法一體であり因果亦不離である。能證もなければ所證もない。だから教の一でも救はるれば、行信證いづれの一つでも救はれる。これ即ち願力廻向が時尅の極速たる一念發起に達成せられる所以であつて、四法の開合が無碍自在なればこそ、私共は本願力の廻向によつて救はれるのである。

その絶対的な立場が、往還二廻向として顯されてゐる。教行信證の四法には方便の四法が認められるけれど、二廻向には方便の二廻向といふはない。四法では眞假が分別せられるけれど、二廻向にあつては、眞假が分別せられてゐないのは、それが絶対的だからである。而も其往還は一の本願力廻向に於ける二種の相であつて、それが全く別なものとのみは考へられない。廣本では謹ニ按ニ淨土眞宗ニ有ニ二種ニ廻向ニ一者往相ニ二者還相ニと、宗名の下に二種廻向の語で稍相對的に顯されてゐるが、略本では本願力廻向有ニ二種相ニとして、二種を本願力廻向に於ける一體兩面ともいふべき意味に彰されたのが注意させられる。孰れにせよ、略本の開顯せるところは、他力救済に於ける絶対眞實そのものであつて、そこに四法が開合自在であることの根據の存することを指摘し置くこととする。

六 題目と撰號

淨土文類聚鈔といふ六字の題目を解説するに、例の如く初に離釋すれば、先づ淨土の二字に就いて、所期に約すると所宗に約するとの二義がある。所期に約すれば、此の穢

土に對して西方の安養界を淨土といふ。但し淨土の語は諸佛の淨土にも通ずれど、六要會一一言淨土者彌陀報土、淨土之言雖二且十方意在西方三と言へる如く、今は彌陀の淨土の別名とせられてゐる。次に所宗に約すれば、淨土とは聖道諸宗に對して淨土宗又は淨土門と呼ばれる宗旨の名である。此の二義の中、初義の時は後義必ずしも具せざれど、後義の時は必ず初義を含む。何となれば、聖道門は此界にあつて、父母所生の肉身を以て入聖得果す。淨土門は必ず安養淨刹に生れさしてから入聖得果せしむれば、これを淨土宗と名くるが故である。されば今本書に淨土と題せるは、所宗の義に依れるものなれど、亦所期の義をも兼ね含んでゐる。

次に文類聚とは、文は要文、即ち經論釋の中の肝要な語句であつて、下註採集眞言鈔、出師釋一といへる眞言師釋のことをいふ。又類は類別で要文を種類別にすること。聚とはあつむ、あつまらしむ、歛む、積む等の意でそれ二の物を一つに寄せあつめること。類聚は易經に方以類聚と出て、種類別に聚めることをいふ。今は經論釋の要文を教行信證といふ如き種類別の下に、それ三一つにして聚めるので文類聚といふ。鈔には採摘の義と包攝の義との二義あり、唯信鈔文意註ハスグレタルコトヲヌキイダシテアツムル

コトバナリと釋す。此釋の中自ら二義が顯されてゐる。

更に六字を合釋すれば、其中淨土文類聚の五字は、廣本に通ずる題目にして、顯淨土眞實教行證文類といふに同じと見るべく、鈔の一字は略本の別目である。故に淨土文類聚の鈔であつて、六合釋の中依主釋に當る。以上先哲の見方に違ひ、略本は廣本を鈔録せるものとして、此の題號を解説したのであるが、若し略本を獨立せる絶對的な著作とすれば、淨土文類聚が即ち鈔であつて、此場合は六合釋の中持業釋がかかることとなる。序說に明用淨土文類聚とあるのが、本書の内容たる文類聚であり、且つ鈔の字が省かれてゐる所から見れば、この淨土文類聚が即ち題號の淨土文類聚鈔でなくてはならない。そして淨土文類聚の五字は、それが廣本に通ずる名であるとしても、今やそれが既に略本の題號とせられてゐる限りは、それが略本の内容を詮顯するものでなくてはならない。もとより略本は廣本から切り離して考へらるべきでないけれど、略本を正しく見てゆくには、その絶對的な立場に置いて見てゆくことが大切である。上に出す採集眞言鈔二出師釋一とある鈔の字が、題號の鈔の字と一致せるものと見れば、此に眞言といひ師釋といへるが、必ずしも廣本のこととは言はれまい。

さて此の題目につき問題となるのは、廣本の題目に比較するに、何故に顯眞實の三字を省き、又教行證の三字をも略せるかといふことである。これ即ち廣略の相異と見るべきであつて、先づ教行證の名目彼にあつて此になき所以は、廣本は四法を建立して立教開宗するにあれば、教行證を内題とし、教行信證を外題としてゐる。略本は他力安心の定得を目的とすれば、四法の名はこれを省きて題目に掲げないのである。又顯の字を省けるは、略本は其中に四法を明せるも、他に對して四法を建立せられたのではない。故に顯の字を要しないのである。又眞實の言を除けるも、廣本は方便の四法に對するが故に眞實といふ。略本は已に相對を超えて絶對の立場にあれば、眞實の語もまた之を省かれたことと窺はれる。

然らば何が故に淨土の二字を用ひたるか、淨土の二字もまた聖道に對する相對の語ではないかといふに、宗祖の絶對的の立場にあつては、聖道の諸宗は既に其眼中にはないことと解したい。即ち聖道諸教行證久廢淨土眞宗證道今盛（五）とあつて、聖道門は事實に於いて廢滅に歸してゐる。それゆゑ廣本にあつて化卷の終に聖淨相對の判を加へては居るけれど、たゞ三時の興廢について、聖道の諸師を誘引せるに過ぎない。而も華嚴涅槃等の聖道諸經が、行信證等の眞實の卷に引證せられてゐるのは、果して何を物語れるであらうか。何れにせよ廣本に於ける眞實が、假に對し僞に對する語であるから、それが聖道や外道に及ばぬとまでは言はれぬけれど、題號に於ける眞實教行證の、正しく對向するところは、聖道又は外道よりは、十九二十の方便教行證にあつて、批判の目標とせられてゐる。されば顯淨土の淨土の語に、聖道を對簡する意なしとは言はれぬけれど、既に聖道權假の方便の拂ひ去られて後は、たゞ絶對的の淨土眞宗だけが存在するのである。

然らば何が故ぞ眞宗文類聚鈔と名づけざるか。念佛成佛是眞宗といひ、殊に敬信眞宗教行證とあれば、相對的な淨土の二字よりも寧ろ眞宗と呼ぶのが絶對的に近いではないか。今云く略本が選擇集を承けて其精神と一致せしめる意味を持つことは、屢々縷説せる如くである。元祖既に淨土宗の名を以て世に弘通したれば、淨土の二字必ずや其傳承を現はせる意の存することが察せられる。されば選擇集にあつて猶ほ相對的なりし淨土宗が、今や宗祖に至つて絶對的の立場まで引き擧げられたところ、そこに略本の偉大な功績が認められる。序文に敬信眞宗教行證と表白しつゝ、而も次下に明用淨土文類聚

矣と結べる所以のもの、正に以て願成就一實圓滿の眞宗こそ、これ絶對的の淨土宗であると示されたのである。既に明用淨土文類聚矣の動機が、純粹な特知佛恩巨窮盡にありとすれば、そこに相對的な意圖の夾雜すべき筈がない。

次に本鈔題下の撰號について、異本がある。越後淨興寺所傳本、江州光延寺所傳古寫本、福傳寺所傳古寫本、には、愚禿釋親鸞集とあり、寛永丙子版には、愚禿釋親鸞集記とあつて記の一字を加へ、坊刊本に愚禿親鸞作となつてゐるものもある。廣文類には愚禿釋親鸞集とあれば、之に准ずるに古寫本を正とすべきであらう。愚禿は吾祖御卑謙の稱であり、親鸞は御實名である。今は其詳説を略す。

七 一部文段の構成

略本一部に於ける文段が如何に構成せられてゐると見るべきであらうか。この構成の内容をどのやうに見るかといふことは、それが直に宗祖の撰述意圖を規定することとなるから、本鈔を講ずるに就いて、その見方が甚だ重要である。

先づ大體に於いて、一部本文の内容が、一に總説、二に偈頌、二に問答の三段に分れ

てゐることは、誰の見方も一致する所である。初の總説の一段は、廣本に明せる教行信證の四法を總略して説述せるものであるから、之を四法概説の一段と名づくべく、第二段の偈頌は行卷の正信偈を改作せるものと見られるから、轉作偈頌の一段と稱すべく、最後の問答段は、經の三心と論の一心との同異について問答せるものであるゆゑ、之を三一問答の一段と呼んでゐる。略本の本文は此の三段の内容で構成せられてゐる。

然らば此の三段は、如何なる意味でそれが本鈔の内容を構成してゐるのであらうか。或は此の三段を更に二に取り纏めて、第一の四法總説の一段を略本の正説段と看做し、第二の偈頌と第三の問答とを重釋段と見るといふ見方がある。これは第二の偈頌を以て廣本行卷の精要を鈔出せるものであると見て、第二第三の二段をば、重ねて四法の中の要義たる行信二法を釋顯せるものと見たのである。即ち初の四法總説段は總じて廣本六軸の精髓を略鈔せるものと見て、本鈔の主體はこの一段にありとし、他の二段は別して行信二卷の精要を鈔出して、重ねて總説段の所明を補へるものと見るのであつて、一應これは無理のない妥當な考へ方であるといつてよい。

既に偈前總說段が、其中に序說正說結勸の三科を分ち得る程に整備せる體裁となつてゐるから、略本の主體たる部分が第一段であることには誰も異論はあるまい。たゞ爰に問題となるのは、何の爲に其後へ偈頌と問答とが附加されてゐるかといふことである。勿論偈頌は行卷の精要であると言ひ得られるであらうけれど、何の理由あつてか、行卷に於ける他の要義を以てせずして、殊に正信偈をこゝに出さねばならなかつたのであらうか。又信卷にも幾多の要義が其中に記されてゐるのに、何が故に三一問答だけを此略本に出さねばならなかつたのであらうか。更に詳密に言へば、本鈔所引の問答段には、化土卷に出てたる觀經の三心や小經の一心に關する問答までも出されてゐて、縦ひそれが三經一致門から略本に出されたのだとは考へられるとしても、必ずしも信卷に屬する精要だけだとは言ひ得られない。それゆゑ後の二段が行信二卷の精要を鈔録したものとしても、何の爲に偈頌や問答が特に鈔出されたかといふことが何等かの意義づけを要求してゐる。

茲に私の其に關する卑見を陳べるならば、第一段が廣本六卷の綱要を略鈔せる正說段であることは、前說の如くであるとして、第二の偈頌の一段は、眞宗に於ける彌陀、釋

迦、七祖といふ豎の傳統弘化を顯せるものであり、又第三の問答は其傳統の淵源に本質的な根據を見出してゐるものと考へるのである。何が故に斯く見るのであるかと言へば、初の四法總說段が、他力眞宗といふものゝ組織的な横の見方であるとすれば、次の正信偈が彌陀、釋迦、七祖と次第せる歴史的な豎の見方であるといふことは、何人も之を認めるであらう。而して後の三一問答は經の三心と論の一心との相異を融會し、其間に於ける信心の本質的聯鎖を明徴にしたものであるから、これは傳統の淵源にその根據を確立せるものというてよい。されば本鈔内容の三段を斯く見ることが容されるとしたら、此の三段が略本の構成要素として、それ〴〵に意義を持つこととなり、行信二卷の中から重ねて此等の精要を鈔出せられた理由といふことも、自ら了解せられることとなるであらう。

思ふに、一國の國體が、その基礎を歴史的傳統に置き、そこに國家精神の根據を有つがやうに、宗教もまた其の有する歴史的傳統の下に、独自の信仰が確立するのである。されば眞宗の信仰に教行信證の四法といへる横の體系的機構が、その成立根據を爲すと同時に、豎に歴史的傳統を有つといふことが、その精神的基礎を與へることとなる

に相異なる。而して廣本行卷には、引文が經典及び七祖の相承次第で引證せられてゐるばかりでなく、正信偈に於ける彌陀釋迦七祖の次第讚頌は、そこに一貫せる行信二法を以て、眞宗に於ける歴史的拯濟の事實を顯はすものでなくて何であらうか。この歴史的傳統の下に、他力の行信が人類の上に流傳せられてこそ、こゝに教行信證の四法は、單なる思想や教義ではなくして、始めて地上に生きて動ける宗教となるのである。されば總説の終の結勸の下六に至り、觀經に於ける提婆阿闍世の逆害を縁として、淨土の一教茲に興つて地上の宗教となることを感嘆せられてゐるのも、注目に價するものがある。加之、この歴史的傳統は、第十七の願意に酬ひて、諸佛如來が孰れも名號を讚嘆するに其端を發するものであり、龍樹天親等の七祖が、同じくその名號讚嘆を傳へ説くところに往還二種の廻向を内容とする本願力の救濟が達成せられるのではないか。故に總説段の終に、行信の因も證の果も、往還の廻向も悉く如來清淨願心の廻向成就せる所なりと結び、次に總結勸信するに、是ヲ以テ淨土縁熟ヲ調達闍王興ニ逆害ヲ云々と、前の總説段の旨を押へて、是ヲ以テこれを承けてゐる。されば其後に出せる正信偈は、これを豎に二廻向四法の傳承を時代順に讚頌せるものであるとすれば、以て本願の救濟が、人類の歴史

を貫き、地上の宗教として生動しつゝあることを示せるものであり、またそこに偈頌といふ讚歌の表現をなせる意味が看取せられるであらう。

されどまた國體の明徴には、歴史の初に遡り、建國の精神が吟味せられるがやうに、眞宗の傳統を明確ならしめるには、亦その歴史の當初に立ち歸らねばならない。これ即ち本願の三心と論主の一心とに就いて、そこに且らく疑問を至して、遂に明證の出さるに迫んだ所以であらう。而して本願の三信を信樂に攝め、その信樂を成就の一念に會して信樂有一念ニといひ、而も信心無二心一故曰一念是名二心一と、論主の一心と同一ならしめ、更に善導の金剛眞心に結びつけ、以て其歴史の淵源にあつて、彌陀、釋迦、論主等の根本精神の一致せるを顯揚せるものと見るべく、これ三一問答を鈔出して、略本の最後に加へた所以であらうと考へられる。されば三一問答段を終つて下の六に論家宗師開ニ淨土眞宗ヲ導ニ濁世ノ邪僞ヲ三經大綱雖レ有ニ隱顯一一心爲ニ能入一故ニ經ノ始ニ稱ニ如是一論主建ニ言一一心一即是レ彰ニ如是一之義ヲ等の語を以て本鈔を結べるもの、深く留意せらるべきである。

以上之を要するに、略本を構成する三部分は、全く横豎の兩面から他力眞宗にその成

立根據を與へ、人々の信仰に不動の立場を闡明せられたものである。かくて本鈔の序説に於ける受行最勝弘誓は彌陀、奉持如來教勅は釋迦、歸印度西番論說仰華漢日域師釋は七祖であつて、此の歴史的傳統の下に、敬信眞宗教行證と宗祖自らの信念が告白せられてゐる。而も特知佛恩巨窮盡明用淨土文類聚矣と、撰述の意圖を表明せられた。されば此の序説に於ける祖聖の表白が其儘に以下正説の三段となつてゐるのであるから、宗祖の心境にあつては、初の總説段が後の偈頌や問答で補足せられるのではなくて、寧ろ後の偈頌や問答が初の總説四法段の背景となつてゐるものと考へてよい。何れにせよ、此の三段は他力安心の成立について、その内面的考察に缺くべからざる要素である。それゆゑ私は此の略本内容の三段を

- 第一段……………總説……………總説四法示眞宗機構
 - 第二段……………偈頌……………別作偈頌顯傳統拯濟
 - 第三段……………問答……………特設問答明傳統根源
- といふやうに見て、宗祖聖人の素意の在る所を窺ひたいと思ふ次第である。

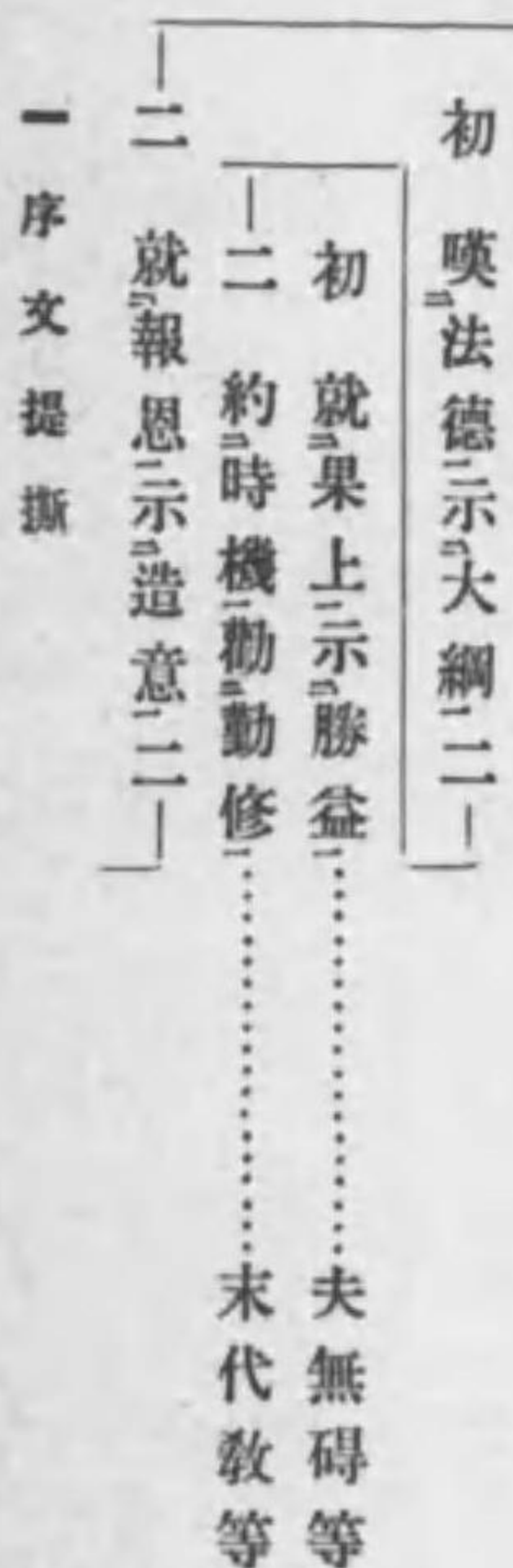
第二 總説段の解説

一 序 説

一 序 文 提 擧

玄談に叙べたやうに、本文一部に三段が分れてゐて、一に總説二に偈頌三に問答である。その中初の總説段の中に一序説、二正説、三結勸の三科が分れる。その中今は先初の序説について、その提擧を顯はす爲め豫めその科段を示して、更に本文を解説することにする。序説の科段左の如くである。

一 序説分爲二



初 勸順二尊教……………爾者受等
 二 正述撰集意……………爰片州等

凡て卷首に序文を安く所以は、或は一部の大綱を掲げて、豫め其書の内容を知らしめる爲めとか、或は成立の緣由を叙べて、著作の意圖を示さんが爲めである。佛書では前者を大綱序と呼び後者を緣起序と名づけてゐる。今此の書の序説にあつても、前半は大綱序であり後半は緣起序であると看做してよい。何となれば初の八句は果上に於ける法の勝徳を讚へて末代濁世の機を勧めたものであつて、これを外にして略本一部の大綱はないのである。而して後の十句は二尊の大悲に救はれた身は、その恩徳に報謝すべしと勧めつゝ、自分は今斯の師主の導きに因り、眞宗の教行證を敬信するを得たりと慶び、其恩徳窮盡し回ければ、自信教人信の思ひに驅られて、本書を撰述することとなつたのであると、著作の趣旨を表白せられたのである。

試に之を本文三段の内容に配當せんか、末代教行の四字及び敬信眞宗教行證の七字は、初の總説段の張本であるとするべく、最勝弘誓(彌陀)……………如來教勅(釋迦)……………印度西番

論説……………華漢日域師釋(七祖)は、偈頌段に於ける傳統次第を其儘に陳ねてあり、更に萬行圓備嘉號消障除疑……………受行……………奉持といへるは、自ら問答段に於ける機受一心の闡明に當るものと見られ得る。されば卷首序文中に於いて、既に一部の全體を標せるものと見られると同時に、その儘に之を造意と見るべきである。されば序文中に大綱と緣起とを分科はするものゝ、この二つは本來離れたものではないのである。これは更に本序文を翫味して、祖意の所在を窺ふべきである。

二 發端 文 旨

夫無碍難思……………消障除疑

【科文】 初序説分爲二。初嘆法徳示大綱二。初就果上示勝益。科段の意味は前述の如くである。

【句釋】 夫は發語の辭。無碍難思は十二光の中の二光。彌陀の光明は衆生を照らすに惡業煩惱に碍へられず、而も因人の測量を超えたれば、之を無碍難思と名づく。光徳廣く十二を數ふれど、天親は無碍光の一に合し、曇鸞は難思無稱の二光に合して不可思

議光といへり。されば今十二光を此二光に攝め以て無碍難思といふ、これ自ら九字十字の尊號に當る。光耀。光明照耀で、光明の照りかやくこと。語は大經の光明顯赫照耀十方の文に據る。滅苦證樂。生死流轉の苦を滅し無上涅槃の大樂を證すること。即ち淨土に往生すると同時に得る所の證果である。經に壽終之後皆蒙解脱と説く。萬行圓備嘉號。上は光明の益、今は名號の益なり。嘉號の嘉は美也と註し名號を讚めた詞。彌陀果上の名號には萬行萬善悉く圓滿具足して缺くることなければ、萬行圓備嘉號といふ。消鄣除疑。鄣は生死の苦果を招くべき惡業煩惱をいひ、疑は不了佛智の自力迷心に名づく。名號には萬行萬善圓かに備足し、聞信の一念に悉くこれを廻向したまへば、能く機の上に惑業の障を除き、疑無明を除いて、明信佛智の人たらしめる。即ち上の滅苦證樂の當益に對し、この消障除疑は現益である。この現當二益の外に他力眞宗の救濟はない。而して光明の下に當益の滅苦證樂を出し、名號の下に現益の消障除疑を出せるは、影略互顯の意と窺はれる。

末代教行專……必可勤斯

【科文】二約時機勸勤修。以下は前の光號現當の益を承け、末代濁世といふ時機に就いて、教

行の勤修を勧めた一段である。

【句釋】末代教行とは上の光明と名號とを承く。即ち名號は行であり、光明は名號の内容である。而して此光號の攝化を説けるものが即ち教である。上代正法の時には聖道門にも教行俱にあれど、末代にはたゞ教のみあつて行證を缺く。末法の時代に教行具足せるは他力眞宗に局る、故に專一に此の名號法を修すべしと勸勵せられた。次に濁世目足とは前の教行二法を目と足とに喩ふ。これ往生要集に夫往生極樂教行濁世末代之目足也といへるに據つて造語せしものにて、謂ゆる智目行足到清凉池(妙玄四之一)といふ如く、聖道の修行では必ず智慧と修行との目足相須ちて救ひの清凉池へ到達する。爾るに末代五濁の衆生は、慧眼盲ひ實踐の足缺けて、全く其救ひに洩れた機なれど、今は他力不思議なればこそ、智目行足相具して、涅槃の證果に到るのである。それゆゑ必ず斯を勤む可しと勸獎せられたのである。

【論攷】問 廣本總序には竊以難思弘誓度難度海大船、無碍光明破無明、闡惠日と、本願と光明とを以て發端し、略本の序文は光明と名號とを以て發端せるもの何の所由ありや。答 凡そ他力の體を出すに、本願あり光明あり名號あり。其中

廣本は本願と光明とを以て他力を標し、略本は光明と名號とを以て他力を標す。これ廣本は因願と成就とに亘りて、一宗の規模たる四法を建立する聖典なれば、因位の誓願と果上の光明とを以て、他力の體を出せり。然るに略本は別して成就に據りて信心を定得せしめる聖典なれば、單に果上の光明と名號とを以て、他力の體を出せるものと見るべきである。

問 廣本は何故に因願と成就とに亘るか、又略本は何が故に唯成就に依れるか。

答 廣本は相對的に三々法門の綱格を建て、以て眞宗の教相を批判せる書である。故に彌陀の因願に依つて、眞假を辨別せなくてはならない。若も三願の相對なかりせば、何に準據して眞假を批判すべきであらうか。然るに略本の所詮は、他力の信心を決得するにあれば、成就に依りて單に果上の光明他力と名號他力とを出せり。これ他力廻向の信心にあつては、法が絶對不二なると同時に機もまた絶對不二であるからである。更に之を考ふるに、略本は行中攝信の法相なれば、末代教行……濁世目足と教行二法を以て端を發す。されば萬行圓備嘉號と先づ絶對的に行を標せねばならない。廣本は廣く四法を打ち建て、行信別開の法相であるから、總序の次文に圓融至徳、嘉號、轉惡成徳、正智、

難信金剛、信樂、除疑獲證眞理也と、更に行信對立せしめてゐる。従ひて發端には本願と光明とを擧げて、名號を後に譲りてある。これ亦相對と絶對との相異に外ならない。

問 彌陀の勝徳は無量無邊である。その中何が故ぞ光明名號の二徳のみを出せるか。

答 光號の二徳は、大經一部所讚の法體であるのみか、超世不共の別徳たるに由る。他力の救ひといふも、此の光號の外には出でない。禮讚に、一切の諸佛は三身同じく證し悲智果圓かにして亦無二なるべし。何が故ぞ偏に西方を嘆じて専ら禮念等を勸むるかとの間に答へて、諸佛の所證平等は一なれども、若し願行を以て來し收むるに因縁なきにあらざると云ひ、然彌陀世尊本發深重誓願以光明名號攝十方等と、光明名號の二を不共の別徳としてゐられる。これを行卷には因縁の父母と喩顯し、偈には光明名號顯因縁と讚へられた。されば大經一部も此の光號二法の外にはない。若し因位の願行に約して、願を以て來し收むれば四十八願となる。行を以て來し收むれば永劫の大行となる。此の大願大行から成就せられたのが果上に於ける光明と名號とである。之を序分に眞實之利と説き、これを上卷終には聞其光明、下卷初に聞其名號と示し、これを流通分に無上大利と説く。大利とは即ち破闍滿願にして、光明に破闍の徳あり、名號

に滿願の徳あり。されば大經一部は光明名號で始まり、光明名號で終る。彌陀は之を以て超世の別徳とし、釋迦は之を以て出世本懐とせられた。これ光明名號の二徳を本書の冒頭とせられた所以であると窮ひ奉る。

三 勸 順 一 尊

爾者受行最勝……報恩謝徳

【科文】 二就報恩示造意二、一勸順二尊教 以下は宗祖が報佛恩の思ひから自信教人信の撰述意志を示し、其中先づ彌陀釋迦二尊の教に信順し奉行すべしと勧められたのである。

【句釋】 爾者とは上を承けた辭。上に末代濁世の時機に約し勤修を勧めたれば、今は其を承けて、如何に勤修すべきかの相を示された。受行は信受奉行で、本願を信じ念佛すること。最勝弘誓とは次の如來教勅に對照すれば、最勝は彌陀を指す、三十行偈に歌嘆最勝尊とあり、弘誓は因位の本願をいふ。奉持如來教勅 奉持は信奉し念持すること、釋迦の教命を奉戴し憶持するをいふ。故に此の下は彌陀弘誓と釋迦教勅とを對句とし、これに受行と奉持とを配し、更に捨穢忻淨と報恩謝徳といふ勸勵の辭を加へて

あれど、固より釋迦彌陀一致の大悲、二尊全く一教である。故に弘誓と教勅とが既に一體なれば、捨穢忻淨と報恩謝徳も影略互顯と見るを得べく、殊に受行と奉持とは、これを受持と奉行とに還元せしめて、信行不離を文字の交叉に顯はせるものとも見られ得る。然るに廣本總序では、特ニ仰ニ如來發遣ニ必歸ニ最勝直道ニとあつて、二河喩の發遣招喚のやうに、釋迦彌陀と次第されてゐる。それが今は弘誓教勅とあつて、彌陀釋迦の順序となつてゐるのは如何といふに、二河喩や廣本は機の相對趣入から釋迦彌陀と次第せられ、今此の略本は法の絶對開顯であるゆゑ、歎異鈔に、彌陀ノ本願マコトニオハシマサバ釋尊ノ説教虚言ナルベカラズとあるやうに、彌陀釋迦と次第せられたものと窺ひ得られる。

【論攷】 問 捨穢忻淨の語が解し難い。何となれば愚禿鈔下下に、聖道門は厭離爲本の教で、厭離を先とし忻求を後とする、淨土門は忻求爲本の教で、忻求を先とし厭離を後とすると批判されてある。されば廣本總序の捨穢忻淨迷行惑信とあるも亦自力迷心の人のことである。然るに今最勝弘誓を受行する他力眞實の行人が、捨穢忻淨の心を起すべきでないではないか。

答 此義一宗に取つて殊に肝要である。凡そ厭忻の前後之を愚禿鈔の意に依つて廣く案ずるに三の次第がある。一に厭離忻求の次第 是は聖道門豎出の機である。二に忻求厭離の次第 これは淨土門横出の機である。三に厭忻不次第の次第 これは聖道門豎超の機と淨土門横超の機である。捨穢忻淨の心といひ、離苦得樂の願といひ、これは佛教一般の通念であるけれど、その思想の内容によつて高次の宗教と低級の宗教とが判定せられる。されば愚禿鈔に於ける所判に従へば、此三類の次第中、前の厭忻と忻厭との二類は、聖淨二門に於ける權方便教漸機の低級思想である。第三類の厭離忻求を超えた高次の宗教にあつては、聖道門に於ける豎超の機にあつてすら、娑婆即寂光と觀じ生死即涅槃と悟つて、淨穢は元と不二である。厭ふべき娑婆の外に、忻ふべき淨土もないと、高遠の理想を語つてゐる。況んや横超他力の眞宗にあつては、聖道漸教の厭離主義から出て、また淨土要門の忻求主義をも超え、厭忻の次第に捕はれず、忻厭の次第にも拘泥せず、忻ふも厭ふも任運自然なれば、不次第であると言つてよい。されば他力の行者は或場合には信卷に忻淨厭穢之妙術とあるやうに、忻厭の次第に心の動くこともあらうし、又或場合には此に捨穢忻淨といひ、般舟讚三〇に厭ハ則娑婆永隔ハ忻ハ則淨土常ニ居セリ

(信卷末卷御引用)といへるやうに、厭忻の次第に現はれることもあらう。これらは絶對中の相對と見るべきであつて、不次第の上の次第と名づくべきである。

問 若し不次第の次第ならば、何が故ぞ今書は捨穢忻淨と言ひて厭忻の次第を用ひ、信卷は忻淨厭穢之妙術と讃へて、忻厭の次第を採れるか。

答 信卷は大信心の法徳を讃嘆せる十二名中の一名である。故に忻求欲生の心は、法にあつては、如來諸有の衆生を招喚したまふ勅命である。汝一心正念にして直に來れとある喚聲に、喚びさまされた信心なれば、自ら忻求が先にしてこれに伴ふ厭離である。然るに機より法に向ふ場合にあつては、先づ己が汚穢不淨に眼ざめて後に淨樂の境を念ふ。自ら厭離が前にして忻求は後に來る。これ厭忻不次第にして任運自然なれど、その不次第の中に自然の約束として、或は厭忻と現れ、或は忻厭と轉ず。今の序文は機の勸修を勸むるにあれば、その修相として厭忻穢淨と次第され、信卷は法徳を讃揚せんが爲めなれば、忻淨厭穢と次第されたものと看做し得られる。

四 敬信眞宗

爰片州愚禿……淨土文類聚矣

【科文】 二述撰集意二。一表「自敬信」、二正述「造意」。序說二段の中第二に就報恩示造意といふ中、上に二尊教に順ふことを勸め、今は撰集の趣旨を述べられる。その中更に二科を分つも、自信と教人信の二意自ら聯鎖してゐるのである。

【句釋】 爰は於此と書くと同じく、端を改めて勢をつける發語の辭。片州とは木片の如き小さき國、日本のこと。印度支那の大陸に比して、小國日本に生れた愚禿といふ意である。印度西番論說 西番の番は、蕃又は藩と同字にして、マガキのこと。支那を中國とすれば、印度は西の藩籬なればこれを西番といふ。論說は龍樹天親の二論を指す。歸は歸依の義。華漢は支那のこと、華は文化華麗なれば中華ともいひ、中國を夷國と簡ぶ語。日域は日出づる邦域で、日國といふと同じ。師釋は人師の釋で、上の二菩薩の論說に對し、漢和五祖の釋文を指す。仰は尊み慕ふこと。敬信眞宗教行證 敬信は恭敬深信の義。次に眞宗とはこの眞宗を以て定散要門に對して、弘願他力のことを眞

宗といへば、淨土門中に於ける眞假の分別である。又聖道門に對して淨土門を眞宗といへば、佛教内に於ける權假と眞實との分別である。今こゝに眞宗といへるを上述の如く相對的の意に解すれば、それらの意味も含んでゐるに相違ない。されどこれを絕對的に見れば往還二廻向がその儘に淨土眞宗であつて、教行信證は往相廻向の内容に外ならず、願成就一實圓滿の眞教たる眞宗としては、教行證いづれも絕對的のものとしてよいのであらう。特知 特は殊特の義で、前に出せる二尊七祖の恩を、一佛恩に結歸せしめ、その恩徳深遠にして、窮盡し難きを知れりといふ意と見られる。明用等の明の字は、明證するにといふ意、まことに窮盡し置き佛恩なれば、その明證として經釋の中から幾多の要文を鈔出し類聚して、所聞を嘆じ所獲を慶ばれたといふところに、本鈔の造由が打ち出されてゐる。

【論攷】 問 本文中に敬信眞宗教行證と言ふ。何が故ぞ教行信證の四法の中に、信の一のみを別舉して、教行證を敬信すと言へるか。

答 教行證に對して信の一を別舉し、「教行證を敬信す」といへるは、教行信證の四つの中に、機と法とを分ちて、教行證の三を法位に認め、信の一を機位に置きて、此に

始めて機法對立せしめたものと見られ得る。即ち教行證の三は所信の法であり、信の一は能信の機であつて、こゝに能所機法の對立の始めて形成せられたところに、絶對から相對へと一轉して、教行信證の四法をば、一往相廻向の内容として見出したる意味があると考へてよい。

問 然らば何が故ぞ同じ往相廻向の四法の中に、信の一を能信の機となし、行信證の三を所信の法となして、「教行證を敬信す」といふ形式を建てたるか。

答 こゝに能所といひ、機法と名づけて、四法中に機法能所の對立を認めたりするもそれは元より機法一體能所不二にして、無對立の上の對立であり、同じ往相廻向の絶對海中に動ける波瀾に過ぎないのである。それゆゑ之を世間普通の主觀客觀とか内界外界とかいへる考へ方に同視し、強ちに教行證は客觀の外にあり、信は主觀の内にと對立的のみ考へてはならない。絶對他力の一念では、本來機法能所が一體不二であるから、信が機位に置かれると同時に、法位にも置かれ得ることは勿論であるし、行が機法に通ずると俱に、教證二法といへどもこれをまた機に於ける行信の内容として見ることもさへもできるのである。

問 若し然らば一體の裏に機法を分ち不二の中に能所を判じて、絶對の四法を相對化せしめたる理由如何

答 願海に於ける機法は本來絶對不二にして、不可稱不可說不可思議なれど、一たび衆生の聞思に入つて、所聞となり所獲となつては、そこに機法能所の分裂を來し、相對化せざるを得ないのである。されば茲に宗祖が「眞宗の教行證を敬信す」と自督の心境を表白せられたるは、自然の約束として不二一體の機法能所の中に、相對的な機法と能所とを分ちたるものと見るべきである。それは正信念佛偈といへる題號が、既に行信二法の中に機法能所を分ちてあるのと同じ趣旨である。而も他力絶對の信海に、相對的な機法能所の對立を認めたるころ、こゝに教行信證の機構成の基調が存在するのであつて、これによつてこそ他力廻向といふことが吾人の上に信相として領解せられるのである。茲に宗祖が自督の形式にて、本鈔の大綱を表白するに、敬信眞宗教行證の語を以てせられたることは、序說として自ら撰集の意を述べられるについて、最も重要視せらるべき點である。

問 こゝに限りて唯信ずると言はず、信に敬の字を加へ、敬信の語を用ひられた趣旨

如何。

答 その語義は恭敬深信の意にして、偈に應以恭敬心執持とあるのと同義であらう。されど西本願寺所傳宗祖御眞蹟の名號には、愚禿親鸞敬信尊號八十四歳書之とあつて、同じく敬信の二字を使用せられた。(專修寺所傳眞蹟名號、桑子妙源寺所傳眞蹟名號等も同じく敬信尊號等と同じ形式で書かれてゐる)これは六字名號に上下の贊文(十八十二願文、必得超絶去の文)を書かれたもので、そこに今と同じく敬信の語を安かれたのは、恐らく宗祖がこの六字を本尊として至心歸命せる御態度を表現せるものと考へてよい。而して單に六字に對して敬禮するのではなく、此の上下贊文の語を通じて六字に敬禮せられるところに、宗祖に於ける信仰の特殊な内容の見出されることは、尊號眞像の銘文にあつて更に廣く其意味が窺ひ得られる。されば今こゝに宗祖が自督を表白せられるのに、敬信眞宗教行證の語を用ひてゐられるのも、六字本尊に歸敬せられるのと同じ意味であつて、本尊六字の上下の贊文は要するに眞宗教行證に外ならぬ意義を持つ十八十二願の文や必得超絶去等の文ではないか。之を更に九字十字の尊號や傳承宗師の上に及ぼせば、尊號眞像の銘文として見られるであらうし、更に之を廣く經釋の中から多

くの要文を摭ひ、眞宗の詮要を鈔録したのが、廣文類や略文類であると考へてよい。即ち幾多經釋に於ける要文銘文を、教行信證といへる規模の下に組織的に類聚せられたのが、廣略の文類であつて、これを六字尊號から見れば、敬信教行證は即ち敬信尊號に外ならず、廣略の文類は謂はゞ眞宗に於ける本尊の拜み方を表現せるものとも考へ得られる。之を本鈔一部の體制から言へば、初の總説四法の一段は正しく敬信教行證の組織的機構であり、次の偈頌の一段は更に其の歴史的傳統への讃仰であり、最後問答の一段は敬信の自督に對する根本反省である。昔から其中偈頌を取つてこれを朝暮勤行に本尊の前で讀誦するのは、それが敬信尊號であると同時に、敬信眞宗教行證の行的表現であると思つてよい。その教行證が幾多經釋の要語を銘文や註釋として、信心の上に内容づけられるばかりでなく、それが經論の三心一心の合一によつて中心の統一の持たれる渾一相續の心である。斯く敬信の意味を窺ふことによつて、本鈔一部が生き／＼と動いて、各部面それ／＼の意味を持つことになるばかりか、明用淨土文類聚矣とある序説の結句も、この要文の類聚こそ、教行證の眞實性が一々に明證せられるものであり、これを用ふることが即ち敬信にそれ／＼の内容を與へることとなるのであるから、窮盡し難き

佛恩といふこともその中に感激を喚び起すこととなり、この結句の意味が容易に理解せられることとなるであらう。

問 廣本の總序にも亦この敬信眞宗教行證の語がある。略本の今と同一とやせん異とやせん。

答 彼此共に宗祖自督の表白なるは同じ、これ廣略二本いづれもこの語を出せる所以であらう。されど廣本はこの自督から相對的に眞假の四法を展開せしめて、一宗の教相判釋を創建せられてゐるが、略本は單に絶對的に行中攝信の態勢の下に一宗の他力安心を顯彰せられてゐる。これ同じ敬信教行證の自督でありつゝ、而も廣略二本その機構に於いて聊か意味の相異なる所以である。

二 正 說

一 別 依 大 經

然言教者則大無量壽經也。

【科文】 二正說二。初明眞宗教三。初標章示體。總說段の中、上に序說を講了したれば、以下正說の一段にして、初に先づ眞宗に於いて教といふは大無量壽經であると、教と言はるゝものゝ體を指示せられた。

【句釋】 然とは上を承くる辭で、上の敬信眞宗教行證といふを承けて、其中の言教者と標したのである。廣本では四法各々卷を異にすれば、夫顯眞實教者則大無量壽經是也とあれど、略本は一連に四法を明せば、直に上を承けて、然言教者と章を標し、次に則大無量壽經也と教の體を示されてゐる。故に然の字は下の言行者言證者にも流至し、いづれも然の字を附けて見る意である。大無量壽經 上下二卷ある大部の經であるゆゑ大無量壽經といふ。而して廣本は相對的に他の諸寺の釋門や迷行惑信の徒に對して、眞宗の教を顯示するにあれば、顯と云ひ又眞實と云ふ。又別依觀經の他流や諸宗所依の經典に對して是といふ。略本は絶對的に他力信心を顯はすにあれば、是等の文字を省けるものと窺はれる。

【論攷】 問 何が故ぞ先づ教の體を指定して大無量壽經なりとせるか。

答 一宗の成立は所依經典の確定に由り、之を規準として特殊の教判が立てられる。

されば立教開宗の廣本にあつては、教卷に先づ大無量壽經眞實之教と標舉して、一宗の礎石を斯經の上に据えられた。而して之を化身土卷に於ける觀小二經に對すれば、方便之教に對する眞實之教であり、又淨土宗中の他の流派に對すれば、假宗に對する淨土眞宗であることが知られる。然るに今略本では絶對開顯を本義とすれば、自ら教體指示の意味を異にしなくてはならない。これを安心の絶對的立場から見れば、前の序説に受行最勝弘誓……奉持如來教勅と言へる彌陀弘誓に裏づけられた如來の教勅を外にして、吾人に取つて末代の教行はないのである。それゆゑ略本では十九二十の方便願を沙汰せず、三經一致の見方に立ち、單に大無量壽經を眞宗の教として如何にこれを見るべきかを示されてゐる。この立場から言へば、大無量壽經の大も、小に對する大として解するよりは、寧ろ絶對的の大として見る方が、祖意に親しいとも言ひ得られるであらう。

問 絶對的の立場から言はゞ、西山流で總依一代別依三經(宗要上六)と説き、鎮西流にあつて總依三經別依一經(十八通上三)と立つるやうに、眞宗にあつても寧ろ三經通じて所依とすべく、亦進んでは一代經悉くこれを所依とすべきではないか。殊に善導元祖俱に觀經に教化の主位を置きたれば、西鎮等の他流では、觀經を正依中の正依

としてゐる。何が故ぞ宗祖獨り大經を以て別して之を正依としたまへるか。

答 吾祖別して大經に依り給へる理由としては、古來種々の義が設けられてゐる。或は云く、本願弘誓を開説せる經典なるが故に。或は云く、大經は信心爲本の説相なるが故に。或は云く、大經は出世本懷を顯はせる經典なるが故にと。是等の諸義は、いづれも大經が他經に異なる特色と優越を彰はせるものであつて、之を以て大經立宗の所由とするに於いて、何人も異義はないであらう。但し善導や元祖が別依觀經なるか別依大經なるかに就いては、古來學者の論議せし所であるが、要するに其時機に對する弘通の方法としては、便宜上觀經を用ひられたけれども、其立宗の本意にあつては、兩祖共に別依大經であるといふことに學者の意見が一致するに至つた。これを七祖でいへば、前三祖は法の眞實を開顯することが本義とせられてゐたから、直に大經に依つて弘通せられたのであらうし、後四祖は已に末法に入つて其時機に對し定散の諸機を弘願念佛に誘引することに努められたから、觀經を用ひることが弘通の方法として便宜であつたに相違ない。されどその立教の大義から言へば、前三祖は勿論のこと、下四祖にあつても、別依大經であることは今さら其著述についてこれを證明するまでもないことであらう。

問 別依大經の理由及び七祖通じて大經立宗たるべきこと、既に命を聴く。されど宗祖が言教者大無量壽經也と此に經體を指定せられたのは、略本に於ける絶対的の立場であるとするれば、眞宗の安心上如何に之を考ふべきか。

答 絶対的に依經の意義を解すれば、言教者大無量壽經也とは、大無量壽經の外に教はないといふことではなくて、單に教といへば大無量壽經に外ならぬといふことである。既に廣本にあつては、夫顯眞實教者則大無量壽經是也と、相對的に眞實之教を開顯して、眞宗に於ける教とは、彼の華嚴經や、法華經の所説に非ず、又彼の觀經や小經の所説にも非ず、偏に大無量壽經の所説が是であると、已に明證を掲げて眞實教が顯され了つた。されば略本にあつては、たゞ絶対的に眞實救濟の教は大無量壽經であると言ひさへしたらそれでよい。これ即ち序文に表白せられた敬信眞宗教行證とある敬信の内容としての教に外ならぬのであつて、然の一字が直にそれを承けたものなることを示してゐる。されば同じく別依大經なれど、廣略二本に於いて、おのゝ詮顯するところがあるに窺ふべきである。

問 大乘非佛説の見、世の學者の間に滔々たり、大經立宗の義亦これに觸るゝことな

きか。

答 若し相對的に教相門から四法の次第を論ずれば、教は能詮、行信證は所詮である。眞宗元より佛教なれば、大經亦如來興世の正説たることはどこまでも動かされない。これ化卷五論に凡諸經起説不過五種一者佛説二者聖弟子、説三者天仙、説四者鬼神、説五者變化説、爾者四種所説不足信用スルニ、斯三經者則大聖、自説也と判じ、末燈鈔五。またこの五説を列ねて、コノ三部ノ經ハ釋迦如來ノ自説ニテマシマストシルベシトナリ、と示せる所以であらう。されど若し絶対的に安心門より四法の次第を言へば、行より信を別開し、信に重點を置けるところに、他力眞宗の生命が宿る。即ち行をして如實の眞實行たらしめるは、眞實の信であり、眞實の行信なかりせば其人にとつては眞實の教も亦存在しないのと同じである。されば教から廻向せられる行とは云はず、教も亦往相廻向の内容に屬し、釋迦教は彌陀教の外には獨立し得るものでない。其旨下の大意釋に現れてゐる。また行卷六字釋では、説字に告也述也宣スルニ、人意也と訓釋しつゝ、是ヲ以テ歸命者ハ本願招喚之勅命也ナリと仰せられた。これ即ち御文五に阿彌陀如來ノ仰セラレケルヤウハ末代ノ凡夫云云と示される根據と見るべきではあるまいか。さ

れば一家に於ける教の成立は、釋尊の金言に依ることは勿論であるが、それは單なる釋尊ではない、釋迦彌陀二尊一致であつてこそ、佛説に始めて眞實性を持つ。これ即ち歎異鈔に、彌陀ノ本願マコトニオハシマサバ、釋尊ノ説教虚言ナルベカラズ、と宣へる所以であらう。いづれにせよ機の上の絶對的立場では教も行も信によつて眞實となるのであつて、これを信卷末三〇五に、故ニ知一_ニ心是_ヲ名_ニ如實修行相應_ト即是正教_{ナリ}是正義_{ナリ}是正行_{ナリ}是正解_{ナリ}是正業_{ナリ}是正智也と斷じ、又和讃に、利他ノ信樂ウルヒトハ、願ニ相應スルユヘニ、教ト佛語ニシタガヘバ、外ノ雜縁サラニナシと讚へさせられた。眞宗の教は眞宗の信に依らねば其眞義が理解せられるものでない。

二 斯經大意

斯經大意者……以眞實之利

【科文】 二明經大意二。初正明大意。上に眞實教は大無量壽經也といへるを承けて、こゝに先づ一經の大意を明す。大意とは一部始終の法門を囊括して、これを卷首に掲げ、讀者に手渡しするといふ古來の釋風である。

【句釋】 八句四十字を以て大經一部の大意を示せる中、初四句は彌陀の招喚、後の四句は釋迦の發遣である。其中彌陀は他力廻向の施主、釋迦は出世本懷の教主であつて、こゝに二尊一致の大悲を以て大經の眞實教たる相が開顯されてゐる。斯經大意 上に出来る大經上下二卷に明す所の大體の趣意といふこと。彌陀超發於誓 大經の超發無上殊勝之願、又は發斯弘誓の文に依る。超發の超に超過と横超との二義あり。超過は諸佛の誓に勝れたることであり、横超は凡愚が速疾に大涅槃を超證することである。然るに凡愚速證は即ち諸佛の誓に勝るゝ所以なれば、この二義一致に歸す。されば唯信文意_ハには、超世ハ餘ノ佛ノ御チカヒニスグレタマヘリトナリと、その一義のみを擧ぐ。廣開法藏等 經の爲衆開法藏廣施功德寶の意。三誓の中で第二の大施の果と第三の名聞の果とを合せて、大經に説く所の果上の衆生攝化の相を述べ盡す語であるが、詳しく言へば彌陀がその因位に誓を超發して、果上に廣く法藏を開くといふ意味である。ここに法藏とは名號のことで、此名號は因位の萬行果地の萬徳を含藏するゆる法藏といふ。開とは貧人のため寶藏を開くが如し。致哀凡小選施功德之寶 致とは施し遂げること。凡小は佛菩薩の大人に對し凡夫の小人をいふ、福德智慧を失うた流轉の貧乏人のこ

とである。選施とは選擇廻向の意で、因位本願の約束通りに果上に於いて名號の一法を選んで施されること。功德之寶とは名號所藏の二回向四法の寶である。以上大經の大意を顯はせることは、上卷は彌陀の因果であり、下卷は衆生の因果である。下卷の因果は上卷の因果から施されるものであつて、これ所施の功德である。因果分つて與へるのではない、一名號の中へ收めて施したまふのである。これを東方偈に結んで、其佛本願力とは彌陀の因果、聞名欲往生等は衆生の因果である。だから大經一部彌陀に約すれば法藏を開いて功德を施すのがその大意である。釋迦出興於世等 以下は序分の出世本懷

の文を斷取し一經の大意を顯はせるもの。出興於世とは釋尊がこの五濁惡世に出ておこらせられたことは、小事小因縁にあらざといふこと。光闡道教 光闡とは光は廣也闡は明也(六要會本一五九)で、説き廣められたこと。道教とは六要に光指一代とあつて、釋尊一代の諸教のこと、即ち四乗の因を修して四乗の果に到る道を教へるのが道教である。欲拯群萌惠以眞實之利 欲とは意欲で、本懷を顯はす大切の文字である。群萌は群生と同じく、一多證文^{八九}群萌ハヨロヅノ衆生トイフとあり。惠は惠施の義。眞實之利とは證文^{八九}に眞實之利トマウスハ彌陀ノ誓願ヲマウスナリとあつて、聖道權

假の方便に對して、この經所説の本願一乗のことを眞實之利といふ。これを下卷に無上大利と説き、行卷^{一〇五}に信知大利無上者一乘眞實之利益也、小利有上者則是八萬四千之假門也とあつて、上の功德之寶の語と望めて、本願救済の價値の顯される要語である。既に本願の救済が絶対眞實の救ひであるとすれば、その利益にて群生を拯ふことが、釋尊出世の本懷でなくてはならない。以上の大意釋、初の一句を除き、後の八句四十字は、前後の句々互に對照して其語を聯ね、以て彌陀と釋尊と二尊一致の大悲攝化を顯はせるものなれば、兩々對照して祖意の在る所が窺ひ得られる。

【論攷】 問 宗祖が斯く大經の大意を見定めたまへるには其相承がなくてはならない。相承の典據何れにあるか。

答 其相承は元祖の大經釋(漢燈一五)に、將釋此經略有五意一者大意……大意者釋迦世尊捨無勝淨土而出此穢土爲欲引淨土教勸誘衆生令得生淨土彌陀如來捨此穢土而出彼淨土爲欲引導穢土衆生令得生淨土是則諸佛攝取淨土出興穢土之本意也とあるに據られたものとせられてゐる。而して元祖はまた善導の玄義分仰惟釋迦此方發遣彌陀即彼國來迎彼喚此遣豈容

不_レ去也とある文意に據りて、二尊一致の遣喚を以て大經の大意を陳べたものであると考へられる。

問 然らば何が故ぞ善導元祖は釋迦彌陀の順序を以て顯せるに、宗祖は彌陀釋迦の順序を以て示されたるか。

答 善導は觀經を釋するについて、要門と弘願とを分ち、其要門は娑婆の化主釋尊がこの觀經に於いて之を顯説し、其弘願は安樂の能人阿彌陀佛が大經に之を説けりと、二尊二教の對立から二尊一教へと轉廻する旨を顯はすを以て其釋意としたれば、釋迦_ハ此方_ニ發遣_シ彌陀_ハ彼國_{ヨリ}來迎_ス等と釋迦彌陀の順序で示されたのである。即ち觀經は釋迦教勅の發遣に答へて、彌陀は彼國より來迎して招喚するといふ法門である。されど大經は之に反して、彌陀本願の招喚に應へて、釋迦は此土にて發遣すといふ義相である。これ前にも陳べたやうに、相對趣入と絶對開顯との相異に外ならぬのであつて、大觀の二經おの／＼その立場を異にするに由る。善導は觀經を釋し、又元祖は偏依善導一師を標榜するが故に、釋迦彌陀の順序を採り、宗祖は別依大經の宗致なれば、彌陀釋迦の順序に依られたものと觀られ得る。

問 若し然らば何が故ぞこゝに大經の大意を釋するに、特に彌陀釋迦の二尊を出せるか。

答 上に既に大無量壽經一部を指定して、これを自ら敬信せる眞宗の教としてゐる。されば何が故に大經一部のみが眞實の教であるかといふことが理由づけられなくてはならない。それゆゑこの大意釋は、先づ大經一部が眞實教たるの理由を明にせられたものと見做してよい。本鈔_ニ明_ニ知_ニ緣_ニ二尊_ノ大悲_ニ獲_ニ一_ノ心_ノ佛因_トとある。佛因が獲られてこそ、そこに大悲があり、また眞實の教がある。即ち二尊一致の大悲であるといふことが、その眞實教たるの理由であると考へなくてはならない。

問 然らば如何にして二尊一致の大悲であるといふことが、大經の眞實教たる理由たり得るか。

答 是れ即ち此釋文八句四十字が前後兩々互に對應する所以であつて、何が故に釋迦出興の本懷であるかといへば、彌陀が誓を超發せられたからである。何が故に一代道教を光闡せられたかといへば、彌陀因位に廣く法藏を開いて選擇せられたからである。何が故に眞實之利であるかなれば、それは選んで施せる功德之寶であるからである、自

ら前の四句が後の四句を成立する。これ即ち眞宗の釋尊は單なる釋尊でない、本佛彌陀を背景とせる釋尊であり、その説ける教法は單なる釋迦の教法ではなくして、彌陀の本誓に裏づけられた教法であるといふことが、大經の眞實教たる所以でなくてはならない。されば大經を説ける釋尊は、大寂定彌陀三昧に入り、光顏巍巍たる彌陀の相となつて説かせられたといふも、この精神を表現せるものと見られてゐる。今その趣旨が二尊一致の大悲として、この大意釋の上に打ち出されてゐるのである。即ち彌陀あつての釋尊であつて、釋尊あつての彌陀ではない。若し機の趣入から言へば、釋迦教は彌陀教の前でありとも見られ得るけれど、法の開顯にあつては、彌陀教は必ず釋迦教の前にある。彌陀教が釋迦教の前にあつてこそ、眞實教の眞實教たる所以が成立する。觀經が機の趣入を基調とせる相對的の教であるのに反して、大經は法の開顯を立場とせる絶對的の教である。それゆゑ大經の大意は、彌陀釋迦の順序たるべき必然性が存するばかりか、こゝに眞實教の眞實教たる内容があるのである。

三 教 德 結 嘆

誠是如來興世……稱讚之正教也

【科文】 二結嘆教德。上の大意釋を承けて、大意既に斯くの如くなれば、大經こそ眞實教であると前を結びて教德を嘆釋する四句である。

【句釋】 誠是。上を押へて誠に是に違ひないと感嘆する語。 如來興世之眞說。序分

の如來以無蓋大悲矜哀三界所以出興於世の文に據り、眞實之利の佛說なりと嘆ず。 奇特最勝之妙典。序分の五德中に住奇特法、住最勝道とある二德中に他の三德を合し、斯の經を説かれし釋尊が、前後に比類なき瑞相を現はし、阿難がこれを未曾見と怪めるを以て、絶妙の經典なることを彰されたのである。 一乘究竟之極說。語は正宗分の究竟一乘至于彼岸に據るも、義は一經を貫く弘願一乘であつて、五乘齊入の本願に上越す一乘なければ、これを究竟の極說といふ。而して上の二句は能説の人に就いて嘆じ、この一句は所説の法に就いて嘆じたものと見られる。 十方稱讚之正教也。智慧段に十方國土諸佛如來常共稱揚讚嘆彼佛とあるに據る。大經に説ける彌陀の本願は、釋尊一佛のみ

の讃嘆する所ではなく、十方諸佛も各々其國にて稱揚し讃嘆するところで、その正教たることが知られる。正教とは散善義五に若佛、所有言説、即是正教正義等とあつて、正直の教といふこと。

【論攷】 問 廣本では教卷の最後に教の結嘆が置かれてゐる。今略本では何が故ぞ大意と宗體との中間にこの結嘆が置かれてゐるのであるか。

答 大意と宗體とは一聯のもので、一部の大意の知られたところで、一部の宗體の何であるか、知られる。故に廣本では大意に次いで宗體を出し、更に引文を列ねて後に結嘆するといふ順序となつてゐる。然るに今略本では、大意と宗體とを引き分け、その中間に結嘆の文を置かれたのは、廣本には引文があれど略本には引文がない。而して廣本の引文は序分に於ける五徳瑞現の文を出し、出世本懷の義を以て大經の眞實教たる明證とせられたのである。されど今略本では引文がないけれど、已に上の大意の中に於いて、釋迦出興於世等と出世本懷の義が出してあれば、今は直にそれを承けて結嘆せられたのである。

問 廣本では大意の後に直に宗體釋を出す、今何が故に宗體釋を後に廻せるか。

答 廣本は教行の二法卷を分つが故に、嘆教の語句を教卷の終りへ廻して、これを以て一卷の總結とせられた。今略本にあつては嘆教の四句を以て、引文をも兼ね顯はすのであるゆゑ、茲に出し、且つ宗體釋を以て行章の前に置いて、大經の宗體たる本願名號こそ即ち次の大行であると知らしめる祖意と窺はれる。されば次の宗體釋は、教行二法の連鎖となるのであつて、爲に結嘆の後に出不されてゐる。其義次下に至つて、更に備させらるべきである。

四 經 宗 經 體

説如來本願……爲經體也

【科文】 三判經宗體 大經に就いて、茲にその宗とその體とを判定せられた。

【句釋】 經論を釋するに、其宗と體とを判定することは、支那佛教において天台を以て最初とする。天台已前は、或は宗中に體を攝め或は體中に宗を収めて、宗體を分別してゐない。淨土門でも曇鸞は體を判ずれど宗を論ぜず、道綽は宗を判ずれど體を論ぜず、宗體を差別するは善導を初とする。されば今宗祖が茲に大經に就いて宗體を判定せ

られることは、其釋例の相承せるところ、遠くは天台にあり、近くは善導にありというてよい。斯くて宗體を分別する方式は、天台や善導に承くるとするも、これは釋例に過ぎず、その内容たる釋義にあつては、曇鸞の論註上七一に説ニ無量壽佛、莊嚴功德即チ以ニ佛、名號爲ニ經體トとあるに據られたものと見なくてはならない。然らば宗と體とは其意味が如何に區別せられるかといふに、宗とは宗要の義法華玄義一上四に宗者要也云云であつて、其經其論の一部始終に行き亘る肝要をいふのである。體とはその本體本質のこと妙宗鈔二三體者主質之義。又玄義八七體者一部之指歸、衆義之都會也であつて、其經其論の一部所明の法門が結歸する所の實質をいふのである。而して宗は能説の上で其肝要を提示するにあれば、説如來本願と言ひ、體は能説の語で顯さるゝ、實質を指示するにあれば、即以佛名號と言はれてゐる。彼の天台が法華經の宗體を判じて、因果爲宗實相爲體と釋せるは、以て其意味を理解する例とすべきである。即ち法華經では因果を以て宗とし實相を以て體とする。今大經では本願を以て宗とし名號を以て體とする。法華に於ける因果の體とは實相である。大經に於ける本願の體とは名號である。實相の上で因果を分つが法華の宗とする所。名號を以て救ひの本願となせる所に、大經の

宗がある。されば因果悉く實相に歸するが法華の體であり、本願悉く名號に歸するが大經の體である。斯の如くその方式にあつて、宗祖の宗體釋は、天台の所見に類同せるものがある。若し天台なれば實相爲體で、諸經諸論全て實相を以て體とせざるはない。故に若し體から見れば、諸經諸論同じく實相爲體であつて、其間に優劣といふものはない。然るに宗から見れば、諸經諸論固よりその宗とする所は各別であつて、自ら其間に優劣の差別がある。即ち天台の所判では、同じ因果でも他の經典は釋尊が隨他意の方便たる龜因龜果を説いたもので、獨り法華經のみが釋尊隨自意の眞實たる妙因妙果を説かれたものである。だから一代經中で法華經のみが最も勝れた圓頓一乘教であると主張せられるのである。今宗祖の所見では、其體より見れば一代經典いづれも名號を體とせざるはない。されど宗から見る時は、自ら其間に優劣が分れる。何となれば他の經典に説ける因果は、非本願の法門たる自力の因果に外ならない。爾るに同じ因果でも大經に説けるところは、彌陀本願の法門たる他力の因果である。されば非本願の法門を説く他經は、眞實救濟の教でない、獨り本願の宗教を説ける大經のみが、眞實教であると、こゝに淨土眞宗所依の大無量壽經の釋尊出世の本懷であり、眞實教たる所以を高調せられたのが、

この宗體釋である。

【論攷】 問 大經上卷には如來淨土の因果を説き、下卷には衆生往生の因果を説く。されば彌陀の因果と衆生の因果とを以て大經の宗とすべきである。それを今如來の本願とあつては、彌陀の因果のみであつて、衆生の因果を洩らすではないか。

答 大經一部を因果に攝めるは大意である。本願を説くにあると見るはその宗である。大意はその中に一部を囊括し、宗はその中の肝要たる喉衿である。されば一部を袋に入れるやうに、因果の袋に收めるのが大意であり、その咽喉を締めるやうに、しめくゝりをつけるが本願の宗である。衆生往生の因果といふことは、それが全く願力廻向に外ならざれば、本願爲宗といへば大經一部のしめくゝりがつく。これを四法二相て言へば、行信證の往相は三願の廻向であり、還相は二十二願の廻向である。往還俱に本願力の然らしむる所であつて、この本願を説くのが即ち一經の宗致である。

問 宗と體とは同一なるか又別異なるか。

答 宗は能説に就き、體は所説に就くとすれば、宗體不離にして、二にして而も不二である。天台では一乘の因果、無量の法門、松吹く風も岸打つ波もその體十如實相なら

ざるなしといふ。今眞宗では大經所説の淨土の因果衆生の因果、その體悉く名號ならざるはなしといふのである。されば即以名號云云といへる即以の二字、二にして而も不二といへる不離の關係が現れてゐる。

問 本願爲宗名號爲體と判ぜるに、その相承あるか。

答 本願爲宗とは、天親の觀佛本願力より出て、曇鸞に至つては大經一部を三願的證に收めてゐる。これ大經は本願爲宗であるとの趣旨に外ならない。善導之を相承して、言弘願者如大經説といひ、元祖更に襲ひて選擇本願と標榜せられた。これ大經は本願經なりと見よとの指南である。次に名號爲體とは天親の我依修多羅眞實功德相から出て、曇鸞は論註に即以佛名號爲經體と言はれた。吾祖の判全くこの語を斷取せられてゐる。元祖は既に獨留之教を獨留念佛としたまひ、三心も南無阿彌陀佛、五念も南無阿彌陀佛四修も南無阿彌陀佛(和語燈五_行)と見られた。これ大經は名號爲體と見よとの指南である。この本願名號こそ眞實成佛の法なれば、釋尊これを説くを以て本懷とせられ、諸佛之を讃むるを正意とせられた。これ即ち大經一部の宗體である。

問 本願や名號、名號や本願にして、同體不離なりとすれば、名號を宗とし本願を體

としても亦妨げないではないか。

答 爾らず、何となれば、この本願名號を宗體とすること、その淵源するところ十七十八二願にあるからである。即ち名號讚嘆は十七願に酬報する相であり、本願を説くは十八願の約束である。既に十七願に於いて十方の諸佛に我名を稱揚せられんと誓はれた。釋尊はこの願に酬いて名號を讚嘆せんがため此の大經を説かれたのである。されば大經所詮の經體は名號の外にはない。しかるにその名號を讚嘆するには、佛願の生起本末を説かねばならない。だから一部に通ずる肝要は如來の本願を説くことに極まるのである。それゆゑ宗は本願にして體は名號なること、そこに必然の意味をもつのである。

問 廣本と異つて、宗體釋を教章の最後に置かれたのは、如何なる意味があるか。

答 これは前に叙べておいたが、若し前段の大意釋に望めてみれば、超發於誓は本願爲宗であつて、釋尊の出世は之を説かんが爲に外ならず、又廣開法藏等は、名號が經體たるべき所由であつて、釋尊が群萌を拯ひ惠むに眞實之利を以てせられるといふのも、この名號のことであつた。而して次の結嘆四句の中、初の如來興世之眞說奇特最勝之妙典とある二句は、說如來本願爲經宗致に於ける能說の説意から所說の本願をそれに綺

へて成れる語句であり、又後の一乘究竟之極說十方稱讚之正教といへる二句は、名號爲體を所讚と能讚とにかけて造語せるものである。故に上の大意や結嘆を承けてそれを結ぶに此の宗體釋を以てしたところに、教の一章がこの結尾で重く引き締められてゐる。されど之を後の行章に望むれば、この名號爲體こそ即ち利他圓滿、大行に外ならず、十方稱讚之正教として、十方諸佛が彌陀の第十七願に酬いて、斯の名號一法を稱揚讚嘆せられるのであればこそ、そこに經體名號と言はれるのであると、教行二章がこゝに緊密な聯繫を持つこととなる。加之、此の行章の次下に然本願力廻向有二種相一者往相二者還相云々と、本願力から往還二廻向が開出せられてゐる。その本願力といふが則ちこの宗體釋に於ける本願爲宗の本願であることは、今更説明するにも及ばぬであらう。されば名號爲體に行章に於ける絶對行の説き出される據點があり、本願爲宗に行下から本願力廻向の開出せられる張本が置かれてゐるとすれば、略本にあつて宗體釋が教章の最後へ廻されてゐるところに、前後聯繫せる微妙な機構が窺知せられ、其精細巧妙な照應に感嘆せずにはゐられない。

五大行名體

言行者則利他圓滿大行也

【科文】 二明眞宗行三。一標章示體。已下四法中の第二行を明す一段であつて、其中初に言行者とは章を標し、利他圓滿大行也とは眞實行の體を舉示せられたのである。

【句釋】 言行者。序説に敬信眞宗教行證といへるを承けて、今愚禿が敬信する行と言ふはと、已下の一段は行を明すことを標せる語。行とは造作の義又は進趣の義であるといふけれど、祖釋のない限りは強ひて當て嵌めぬがよい。行は行としておいたがよい。聖道諸宗は諸善萬行を以て成佛の行とする。眞宗でも往生の證果に到るには、何等かの行を要する。そこで今は念佛一行を成佛の行とすることを顯はすのである。利他圓滿大行。利他とは他力の異名、論註の他利々他から出て、通途の自利々他の利他とは其意味を別にし、眞宗の行は自力で修する行に非ずして、他力の行であることを顯はす。次に圓滿とは、これを行體でいへば、一多證文註。一實眞如ノ妙理圓滿セルガ故ニといひ、如來會の重誓偈に圓滿善法無等倫とあるやうに、六字の中に全ての功德圓かに満つる

をいひ、又これを行用からいへば、淨土論に能令速満足等とあるやうに、貪瞋煩惱の中へ名號の功德が圓融し満足することをいふのである。次に大行也とは、若し他の劣れる小善根に對し念佛は勝れた大善根ゆゑ、之を大行と呼ぶといへば、相對的の大行となる。今は利他圓滿の大行であるから、因位の萬行果地の萬德名號の中に攝在して、十方衆生の往生の行體となるところの絶對的の大行でなくてはならない。即ち念佛は絶對善であるといふ意味であつて、其義後の文に顯はされてゐる。

【論攷】 問 何をか行といふか。

答 聖道諸宗で行といへば謂ゆる三學六度等諸善のことである。今淨土眞宗で行となせるは、稱名念佛のことである。故に大行者則稱無碍光如來名云々と明に規定せられた。

問 行は稱名念佛であるといはゞ、南無阿彌陀佛の名號は未だ行とは言はれぬか。

答 南無阿彌陀佛の六字が誓願の名號として、已に行と名づけ得られることは勿論である。されど稱名念佛を離れて、別に六字の名號ありと考へるには及ぶまい。稱へぬ前から行であるとか、稱へねば行にならぬとか、そんな考へや諍ひは自力の行のことである。利他圓滿の大行には、そんな分別や疑慮の必要はない。衆生の行として廻向成就し

たまへる本願の名號であるから、一念の當體では、稱名念佛を離れた名號といふことは考へ得られない。それゆゑ行と名づくるを得ない南無阿彌陀佛の名號があらう筈はない。

問 古來六字名號は所行であり、稱名念佛は能行であるといふ。かくて所行は法位にあり、能行は機位におかれることゝなる。然るに前説の如くならば、機位の能行の外に、法位の所行あることを認めざるか。

答 認めぬのではない。たゞ妄情の計度を嫌ふのである。領解のためには、能所機法といふ如き相對分別も、また深い意味がある。されど往相廻向の大行は絶對的なものである。領解の信相では、そこに言葉の上に能所とか機法とか分れても、それは固より一念の内容である。一念の當體は全く絶對的で、それを能所不二といひ機法一體といふ。されば能所は單なる能所でなくて、不二を前提とせる能所であり、機法もまた一體の上の機法である。されば相對的には機位の能行の外に、法位の所行ありと考へられ、行を法位法體におくことに、領解として尊い意義のあることを否定するものではない。されど今は廻向の大行である。その利他圓滿の大行であり、極速圓滿するといふは、機法能所の對立分別にあらずして、寧ろ一體不二であるところにあると見るのである。

問 行は所行の法である(六要會一軌等)といふ。所行といへば既に能行に對する。然るに何ぞ行に能所を見ざるを本義とするといふか。

答 所行の法とは、能信の機に對する語である(六要會一軌同三軌)。故に所行あれば必ず能行ありと考ふるは當らず。能行の機、即ち能修の人に對しての所行の法である。これを能所機法で言へば、能は機、所は法である。服むは人、服まれるは藥なるが如し。故に所行は法であるけれど、能行するは必ずしも法ではない。機法で言へば、それは機である。藥が藥を服むのではなくて、人が藥を服むのである。若し所行を能行するといへば、その能行するは人である。故に所行の法とは、能行に對する語ではなくて、正しく能修の人に對して、その人が所行の法である。而もその人と法とは不二であるが、二の中に且らく能所を分ちて所行の法といふ。所行そのまゝに之を人から言へば能行である。服まれる藥を離れて、別に服むといふ行爲のあらう筈はない。されば六要會五三三所行法、能行人と相對し、同二法所覺法覺能覺人と相對す、これ人法能所の用語例である。行信にあつても能所機法といへば、人法相對の義は動かかない。故に能は行に屬せずして、人に屬する。愚禿鈔下二に我能護汝の語を釋して、我言盡十方無碍光

如來也、能言對不堪^二と宣へるも、亦能を人に屬してゐる。但しこれを相對的に言へば、雜行雜修等は所行の法でない。念佛だけが能信の機に對する所行の法であるとは解し得られるであらう。たゞ廻向の絕對行で言へば、語の上に名號と稱名との二があるのて、概念的に所行と能行との二つが成立すれど、少くも名號には口稱の義は離れず、稱名に名號は離れないから、他力大行の當體では、人が所行の法の外に、別に能行の實體はないのである。

問　その能行の人とは即ち信心の機でなくてはならない。然るに其信心を能信の機なりとすれば、所行の法は即ち所信の法たり得るか。

答　名號が機の能信に對して、所聞所信たるべきことは、願成就に於ける聞其名號信心歡喜の眞教、動かすべからざるものがある。若し廣本に於ける如く眞實の行信ありまた方便の行信あり一節と行信を相對的に考ふれば、信は行から分開せられて、行は信の所信となる。即ち十八願の機位の信から見れば、十七願の行は法位に置かれる。是れ即ち十八願から十七願の分相せられた理由と見られるのであつて、名號法が能信の機に對する所信の法たるべきことは、宗義の一面として動かされない重要な意味がある。され

ど今は相對的の見方でない、略本に於ける絕對的の立場である。往相廻向の行信として、絕對的の立場からは、願成就の上でも、徒らに機法分立して能聞能信あれば必ず所聞所信ありといふ如き相對的の考へ方に始終すべきではない。一念發起の當體にあつては、能所は不二であり機法は一體である。そこに能信と所信とが對立さるべきでない。故に六要鈔でも、所行の法とは言うてゐても、所信の法とまでは言うてゐない。但し六要會四言信心者是能歸、心對三所歸、法所發信也と言はれてゐるが、これは行信の具不具を釋したもので、必ずしも所行の法が即ち所信の法であるとは言うてゐない。それは少くも一念の信の具體的内容としての能歸所歸であつて、機位の信から願れば所歸の法が其の對象の位置に置かれるのに過ぎない。相對的に見たらさうでなくてはならないことである。然るに往相廻向の行信にあつては、行といへば絕對の大行であつて、其中に信を含攝する。この名號には必ず願力の信心を具してゐるのである。だから行は所行所信であるというて、法位とか法體とかいふ遠くの離れた所に置かねばならぬやうな行ではない。行の存在は大行として近く往相廻向の中にあるのである。

六十七願名

即是出於諸佛咨嗟……正業之願

【科文】 二示能出願。上に大行の體を示したれば、此一段はその大行の由つて出づる本願を示し、以て自力の行に非ずして他力の大行たることを顯された。

【句釋】 即是。上に示す利他圓滿の大行を指す。出於。出の字を出生の義とすれば、他力廻向を顯はす。大行は十七願の廻向、淨信は十八願の廻向、證果は十一願の廻向、還相は二十二願の廻向である。それゆゑ以下能出の願として示せる四願にいつれも出於の二字を指き、往還共に他力廻向なることを顯はす。但し出の字を出來の義とすれば、出來上つたこと、成就されたこと、解されるであらうし、又顯出の義と見れば、行は十七願に顯され、信は十八願に顯されたこと、解してもよいこととなる。諸義これを並べ取るも別に妨げはない。諸佛咨嗟之願。已下二名願文に十方世界、無量、諸佛不悉咨嗟稱我名者云々とあるに據る。咨嗟とは六要會二劫興云、咨者讚也、嗟者嘆也とあり、一多證文^{一五}咨嗟トマフスハヨロヅノ佛ニホメラレタテマツルトマフス御コトナリと釋

せられた。復名諸佛稱名之願。復は復重の義。稱名とは願文に稱我名者とあり、六要會二劫言稱名者此非稱念今稱揚彼名義也と釋す。同じ稱名といふ語でも、善導に於ける稱我名號の稱名は稱念の義で稱へることであり、今十七願の稱名は稱揚の義で、讚めることである。亦可名往相正業之願。前の二名は文に依つて立て、此一名は義に依つて立つ、而も此は宗祖已證の願名であるから、亦可の二字を措かれた。亦是傍及の義、可は許可の義。また斯く名づけても宜かるべしと謙退の意を表はす二字である。往相は往相廻向のこと。これは次下に出づる如く往相廻向の中に行信證の三があり、其中十八願は往相信心の願、十一願は往相證果の願、それに對して十七願は往相廻向の眞實行を成就せる願であるから、これを往相正業之願と名づけたのである。されば往相の二字は下の二十二願の還相に對し、正業の二字は下の十八十一の信心證果に對して、十七願の内容を往相正業の二字で現されてゐる。正業とは五正行中で前三後一の助業に對し、第四の稱名正行を指し、稱名は本願に順ぜる正當の業因であるといふ意味から、これを正業と名づくる。蓋しこれ散善義の一心專念彌陀名號乃至念々不捨者是名正定之業順彼佛願故の釋意から成れる語である。今十七願を正業といふは十八十一に對し

て名號正定業の義である。

【論攷】 問 出於の二字を成就の義とすれば、出於諸佛咨嗟之願とは、南無阿彌陀佛の名號が十七願に成就せられたことを顯はす語となる。爾るに十八願は念佛往生を誓ひ、選擇本願と稱せらる。故に名號成就は十八願にして十七願は諸佛之を讚嘆するに過ぎずと見るべきではないか。

答 名號成就の願を定むるに就いて、古來種々の異説あり、或は十二十三の光壽無量の願に酬い現れたが彌陀の覺體であるから、體のあるところ必ず名ありて、覺體の成就せる時、既に名號が成就せられてゐると見る説。或は四十八願悉く成就して正覺の彌陀とならせられたのであるから、名號成就は廣く四十八願に通ずると見る説。或は名號は十八願成就、これを讚嘆するのが十七願とする説。以上の如き諸説があつて、孰れも相當の理由があるには相違ない。大體が四十八願は不可分の機構から成立してゐるもので、四十八願成就せるところで彌陀正覺の果體が出来上つたのであるから、名號成就もまた四十八願に通ずるといふ見解も成り立つてあらうし、殊に光明壽命の誓願が大悲の本となつてゐるから十二十三の願で覺體成就せる時に已に名號も成就したのであるといふ考

へ方も、否定し得られぬものがある。されど四十八願を第十八の一願に結歸する該攝門の立場でいへば、名號成就は十八願に在るといふことは今更言ふまでもないことである。これ即ち善導が念佛往生の願と呼び、元祖が選擇本願と稱したまへる所以であらう。だから名號成就を十八願と見るは、善導元祖に於ける一願建立の義門であることを銘記せられなくてはならない。爾るに宗祖にあつては、別に曇鸞を祖述して五願別開したまへる分相門の立場である。一願建立は別家を以て本家へ攝める義門であり、五願分相は本家別家の棟を分ける法相である。既に十八願を信心成就の願としたれば、自ら名號成就は十七願の願功と見られることとなる。これ廣本では十七願に選擇稱名の願目を與へ、略本では往相正業の願目を附する所以であつて、宗祖にあつて、名號成就は明に十七願とせられてゐる。隨ひて一願建立の義門と五願建立の義門とは、飽くまで之を混同することを避けねばならないことであつて、名號成就といふことは、宗祖にあつてこれを論ずべきも、元祖にあつて論ずべき義門でないとせられてゐる。

問 十七願は諸佛の讚嘆を誓はれてゐるが、これは單に能讚を誓ふたのであらうか、また所讚までも誓はれてゐるのであらうか。若し能讚の誓ひのみであるならば、往相正

業の願とも選擇稱名の願とも名づけられまい。若し所讚まで誓うて、それが此願に成就せられてあるといふならば、十八願と何の箇ぶ所があらうか。進退共に難あり、如何に之を決擇すべきか。

答 十七願には諸佛の能讚を誓うてあるけれど、その能讚を離れて所讚の名號があるのではない。十七願の行を以て直にそれが念佛であるというては、十八願の乃至十念と混淆するやうであるが、十七願の行は元よりそれが乃至十念の行である。即ち諸佛にあつては十七願の行であり、衆生に現れては十八願の行である。法にあつても乃至十念、機にあつてもまた乃至十念である。されば十七願の能讚には、十八願の十念がその儘に所讚として離れないことゝ考へてよい。

問 若し爾らば一願建立の義門となつて、二願各立の法相に背くではないか。

答 爾らず、一願建立は十八願を念佛往生の本願と名乗る時のこととて、此時は十八願に於ける三信を十念に攝めてしまふ。又二願各立は十八願を以て至心信樂の願と名乗る時のこととて、此場合は十八願に於ける十念を以て、三信に攝めてしまふ。然らば二願各立の時に、十八願の十念は全く消えてしまふかといふに、此時は十八の十念を以て十七

の讚嘆に持たせてしまふ。本家の物を持たせてやつて新家ができたと同様で、そこに二願分開の分開といふ意義がある。それならば十八の十念が送り出されて留守になつてしまひはせぬかといふに、それは必具名號として機の上に現れる。されば十七願の讚嘆は全く十八願の乃至十念であると顯はすのが、彼の行卷の選擇本願の行といふ細註である。一願建立で言へば、選擇本願といふ語は十八願の名に相異ない。故に信卷一願に斯大願名選擇本願とある。爾るにその選擇本願の名を五願分相で十七願にまで與へたのは、十七願の讚嘆は即ち十八願の乃至十念に外ならぬからである。本家の物を別家に持たせたやうに、十八願の十念を分けて十七願の讚嘆へもたせたのが、二願棟を分つ分相門の法相である。

問 何が故ぞ十八願の行を、十七願の讚嘆へ持たせたのであるか。

答 所讚の大行は諸佛の勸讚によつてのみ廻向の目的を達するからである。廣本に往相廻向之願といへる總名を十七願の別名としたのも、恐らく此の南無阿彌陀佛の廻向といふことが、これら諸佛の讚嘆を俟つて達成せられるからであらう。

七 往還開出

然本願力廻向有二種相一者往相二者還相

【科文】 三廣明廻向相三。初標列往還一行を明す中、こゝに忽ち本願力から二種廻向を開出せることは、やゝ唐突の如くに見ゆれども、必ずしも然らず。前に利他圓滿大行也と、名號は果上の佛力廻向なることを示し、更に即是出於等と因位の願力廻向から大行の成就せることを顯はされた。これ上の宗體釋で名號爲體でありつゝ、而も本願爲宗であると判定せる意味に繋りを有つ。十七願の廻向はたゞ一名號の廻向に過ぎないけれど、和讃に南無阿彌陀佛ノ廻向ノ乃至還相廻向ニ廻入セリとあるやうに、一名號の廻向から往還二相が開出せられ、更に往相からは行信證の三法が展開する。斯く廻向の内容は、二廻向四法と展開して、こゝに二利圓滿の他力救済が達成せられるのであるけれど、それが本願力廻向として一名號に統攝せられる。これ即ち南無阿彌陀佛の廻向の恩徳廣大不思議なるところで、略本が絶對的に安心を開示せられた聖典であるといふことも、斯うした統制を名號の一法に攝める組織の上に實踐的な意味が看取せられる。

【句釋】 然。承上接下の辭で、上に利他圓滿大行也とあるを承けて、下の本願力云

に續く。本願力廻向等。淨土論九以本願力廻向故とあり、論註下五廻向有二種相一者往相二者還相とある文に依つて造語せらる。本願力とは、これを二廻向四法に被らしむれば、十七十八十一二十二の四願に通ずるものと見てよい。本願力とは、本願は因位、力は果上で、論註下九依二本一法藏菩薩四十八願一今日阿彌陀如來自在神力一願以成レ力一力以就レ願一、願不徒然一力不虛設一等とある。往相とは往生淨土の相狀で、生死の苦海に沈める吾人が、此の迷ひの娑婆を捨て、彼の悟の淨土に往いて成佛する自利の救ひであり、還相とは還來度生の相狀であつて、願土に到り無上涅槃を證すれば、直に大悲を起して娑婆に還つて人天を度する利他の大用である。この往還の自利々他は、行者の上一に現はれる救済の相であるけれど、自利の因果、利他の大用、悉くこれ行者自身の力にあらず、彌陀願力のなさしめたまふ所であるゆゑ、俱に廻向の言を加へて、往相、廻向還相、廻向といふ。廻向とは廻轉趣向の義で、如來の方の功德利益を廻轉して、衆生の方へ趣向せしめるといふ意味である。但し論・論註の當意では、往還俱に行者の廻向であるがやうに見えるけれど、卷末に於ける三願的證から願ればいづれも願力の廻向と見られることゝなる。即ち論註下三に他利々他の深義を明し了りて、凡是レ生三彼淨

土^二及彼菩薩人天所起諸行、皆緣^レ阿彌陀如來、本願力^二故云云と云うて、次に十八十一二十二の三願を的證せられてある。今家て他力とか願力とかいふことは、全く此に淵源するのであるが、此中で生彼淨土とあるが往相の因果であり、所起諸行とあるが還相の大用である。この往還俱に阿彌陀如來の本願力に緣る。若し然らずんば四十八願は徒設になつてしまつてあらうと、そこに三願を的證せられた。是より論註上下二卷を逆觀すれば、一部の始終、五念も五功德も因果悉く願力廻向ならざるはなしである。されば行卷末^二三願に言他力者如來本願力也とあつて、本願力の廻向を外にして、他力の救濟はないのである。そして其救濟の相といへば、即ち往相と還相の入出二利に外ならない。廣本も略本も全くこの他力救濟の相を明せるものであつて、親鸞聖人の宗教は、往還二利の大乗菩薩道であると言ひ得られる。

【論攷】 問 此に本願力廻向とある本願とは、何れの願を指すか。

答 既に本願力廻向の内容を往還二相と指標してある。其往相を廻向するは、十七十八十一の三願である。故に次下に行を明す下には十七願、信を明す下には十八願、證を明す下には十一願を出されてある。又還相を廻向するは二十二願であるゆゑ、後に還相

を明す下では、二十二願が引かれてある。されば往相還相皆是れ本願力より廻向したまふのであつて、その本願とは十七十八十一二十二の四願であると見られ得る。

問 本願の目は上の四願に通ずべしとするも、普通に本願力といへる本願は、十八願を指せる名である。されば本願力廻向といへるは、總じては四十八願、別しては十八願であるとするべきではないか。されど今の場合は大行の下に提唱せられた本願力廻向であるから、こゝは特に十七願を本願力と呼べるものとも考へられる。果して孰れの願を指して此に本願力と標示せるか。

答 善導元祖にあつて、略して本願と云ひ、具に選擇本願といへば、四十八願を該攝したる第十八願の名目であることに異論はない。然るに宗祖にあつて本願若くは選擇本願といへば、分相門の立場から十七十八の兩願に通ずるといふ説に従うてよい。三經往生文類の所明では選擇本願の目が十七十八十一二十二の四願に繋りてあり、往還廻向文類にも、十七十八十一の三願を引き、コレヲノ本誓悲願ヲ選擇本願トマフスナリと結んである。されば選擇本願の語は、これを願名としては十八願に限るとせんも、選擇本願の義は、餘の願にも通ずることは否まれない。仍て今茲には汎爾に本願力と喚んでゐら

れるので、廣くは四十八に通じ、又別して下に出せる四願に通ずることは勿論であるが、今は大行下にあつて本願力と標せられてゐる。既に他の諸願に對して大行の下で本願力と稱せるは、特に十七願を指して本願力と稱せられたものと見てよいのである。

問 何等の理由あつてか之を十七願にのみ限定せんとするのであるか。

答 大行の下にあつて、本願力と呼ぶことであらば、それが十七願でなくてはならぬ。いばかりか、茲に本願力を標せるは、廻向を言はんが爲めに外ならない。それなればこそ本願力から往還二種の廻向が開出せられてゐる。然るに四十八願中、廻向といへばそれは特に十七願の使命とする所である。されば廣本では往相廻向といへる願名をこれに獨占せしめ、十方諸佛の勸讚によつて廻向の達成せられるのであることを示された。殊に大行たる名號によつて、廻向の機能が實現せられるから、和讚には南無阿彌陀佛ノ廻向ノ恩徳廣大不思議ニテ云々と、その威徳を讃へてゐる。六要會二に凡於三四十八願之中ニ此願至要ナリ、若シ無クハ此願名號之徳何ヲ聞ク十方ニ聞ク而信行スルハ此願之力ナリ、若シ無クハ此願ニ超世ノ願意諸佛何ヲ證メン、依テ證ニ立ルハ信ヲ又此ノ願ノ恩也と、十七願の力用を讃揚せられたばかりか、同會二には其佛本願力の文を釋して問ク今所レ言ク之本願力者、指シ何ノ願ヲ乎、答指シ第十七ニ云ク本願力トと判定せられてゐる。仍てこゝの本願力は十七願に取り切るのである。

問 廣本では教卷の首に、謹案淨土眞宗有二種廻向等と淨土眞宗から二廻向を開出してゐる。爾るに今略本では行章の下で、本願力から二廻向を開出してゐる。何が故に斯る相異なるか。

答 廣本は立教開宗の本典であるゆゑ、先づ教卷で所依の經典を定め、宗名を掲げてある。故に廣本ではその淨土眞宗から他力救済の内容たる二廻向四法を開出し、この二廻向四法の救済こそ即ち淨土眞宗と呼ばれる宗教であることを標榜せられた。爾るに略本では、安心爲要の立場から特に行下に於いて本願力から二廻向等を開出したものと窺はれる。且つ廣本は相對的に教學批判を主義とすれば、最初の教卷にてこれを掲げ、略本は絶對的に安心を要とすれば、行章にてこれを開出せられたものと看做してよい。

問 然らば略本では眞宗の二廻向四法たることは顯されざるか。

答 序文に敬信眞宗教行證トと言へり。四法は二廻向と離れず、されば淨土眞宗の二廻向四法たること、既に此の序文に顯されてゐる。たゞ相對的に之を標榜せられないば

かりである。

八廻向行信

一言往相廻向者

【科文】 二隨釋二。初明往相廻向三。初總標。上に本願力廻向に二種の相を開出したれば、已下それを釋する中、初に往相を明すについて、先づ總じて標した語である。是より下行信證の三法を明し終るまでの標文であるゆゑ、總標といふ。

【句釋】 此七字寛永刊本福傳寺本等に存するも、淨興寺所傳本、慶長刊本、光延寺所傳本及び覺如上人延書本等には之を缺く。若し教卷の總標に準ずれば一者往相二者還相と列ねて直に就往相とあつてよい筈である。されど碁の二言還相廻向者に對すれば、茲に一言往相廻向者とあつても然るべきである。殊に教卷では就往相廻向有眞實教行信證とあつて、往相廻向の四字の成語が使はれてゐるのに、略本では就往相有大行云とのみある。若も此七字を缺く時は、下の還相廻向に對して、往相廻向の四字成語が略本に無いこととなるから、必ずしも後人の加筆とのみ考へられない。

就往相有大行亦有淨信

【科文】 二別釋二。初明往相因三。初標列。下に行信證の三法を明すにつき、初に往相の因として、行信二法を明すについて、往相を標して、更に行信を列したのである。されば同じ標文でも前の言往相廻向者の六字は行信證の三法へかゝり、この就往相の三字は行信二法へかゝることとなる。

【句釋】 此標列の文は行卷の初に謹案往相廻向有大行有大信とあると規を同じうする。但し廣本に有大信とあるのを略本では有淨信と改め且つ亦の字を加へられた。これ廣本では行信別開して卷を異にすれば、大行大信と牛角の如く對立せしめてゐるけれど、略本では大行淨信と別稱して肩を並べぬばかりか、そこに亦の字を加へてゐる。亦は傍及の義であつて、行信同じく往相廻向の内容であるとしても、有大行亦有淨信との語句は、信が行に従屬することを現はすものと見られる。されば同じ往相の下に行信二法を明すとしても、この二法が不離一體にして行信互に相具することを顯はすばかりでない。此の略本では行の下から往相の行信證が開出せられて、其中證の果は行信の因に歸し、行信の因の中で、信は行に攝まる態勢となつてゐる。古來から略本は行中攝

信の明し方であるといふのが、こゝら邊に現れてゐる。就[○]往[○]相[○] 廻向には往相と還相との二種の方面ある中で、往相に就いてその内容に行と信とがあるといふこと。即ち行信共に他力廻向であるといふことを顯はすのである。有[○]大[○]行[○] 絶對不二の他力の行なれば大行といふ。亦[○]有[○]淨[○]信[○] 淨信とは如來會十八願成就の文に一念淨信とあつて、清淨の信心といふこと。凡夫有漏の信心ではなくて、如來廻向の清淨眞實の信心であるといふ意味である。亦の字はこれもまたといふ意。往相廻向には大行もあるが、其中に亦淨信もあると知らせる文字である。

【論攷】 問 二廻向と四法とは如何に關聯するか。

答 廣本の所明に依れば二廻向と四法との關係に就いては、二廻向中に四法を攝する義相と、四法中に二廻向を攝する義相とがある。初に二廻向中に四法を攝する義相とは、教卷の初に二廻向中の往相廻向から四法を開出せるものがそれであつて、これは如來の廻向に約して教行信證の四法孰れも他力眞實なることを知らしめたものである。次に四法中に二廻向を攝する義相といふは、證卷に至つて證の中から還相を開出せるもので、これは行者の所得に約して、證果の體に具する利他の大用を知らしめたのである。教卷

には二廻向の中、往相廻向に就いて眞實の教行信證ありと標しながら、證卷に至つて、證の中へ還相を攝したまふ所以のものは、これ恐らく一は如來の廻向に約し、また一は行者の所得に約して、二廻向と四法との間に、この二つの相攝關係あることを顯彰せられたものであらう。

問 廣本は往相廻向から教行信證の四法を開けるに、今略本では往相廻向から僅に行信二法を開かれた。この相異なる理由如何。

答 廣本は教卷の首にあつて浄土眞宗から二廻向を開かれた。これは立教開宗の本典なるが故に、先づ教卷で往相の中に眞實の四法を開顯し、之を以て化卷に明す所の方便の四法に相對せんが爲である。然るに略本は絶對の立場なれば、行章にあつて本願力から二廻向を開かれた。既に本願力から開くことゝなれば、謂ゆる四法三願にして、行は十七願、信は十八願、證は十一願で、行信證の三法は孰れも彌陀因位の本願に由る。爾るに、教の一には別願はない、それゆゑ本願力廻向からは教の一は取り除かれることゝなつたものと思はれる。

問 若し教には別願なしとせば、廣本では何が故に之を往相廻向の中に攝したるか。

答 眞宗に於ける教とは、十方稱讚の正教にして、諸佛讚嘆の言教に外ならない。教が已に諸佛の讚嘆に外ならざれば、これ亦彌陀因位の十七願諸佛稱揚の願力から起る。これ教體を名號とせられる所以であつて、此趣旨から見れば、教も亦十七願力の廻向と看做すべきが故に、これを往相廻向に屬するといふが、恐らく廣文類所明の趣旨であらう。

問 略本ではたゞ行信二法を以て往相廻向とするか。證の一法をも亦往相廻向に攝するか。

答 略本では四法を列ね明しつゝも、往相廻向の内容としては、四法を略して或は行信の二法とし、或は行信證の三法とする所に、略本の略本たる所以のあることが窺はれる。即ち廣本では四法の網格嚴然として其卷を異にし、而も悉く往相廻向の内容としてゐられるけれど、略本ではこゝに先づ一に言往相廻向者と標しつゝ、後に二言還相廻向者と列ねてゐる所から見ると、中間に於ける行信證の三法は、悉く是れ往相廻向の内容であると思はなくてはならない。これ即ち略本に於いて行信證の三法を往相廻向に屬すると見らるゝ態勢である。されどまた言證者則利他圓滿妙果也の標章を、前の就往相

有_二大行亦有淨信、大行者云云、言淨信者云云と對照する時は、證の一法は行信二法と異なつて、往相廻向の外に出て、行信二法のみが往相廻向の内容となる。これ即ち行信は往生の因であり、證は往生の果である。故に果を以て因に攝すれば、行信二法のみが往相廻向の内容となるのであつて、それを茲に就_二往相有_二大行亦有淨信と打ち出されたものと見られ得る。これ行信二法を往相廻向に屬したものと見られる略本の態勢である。されど更に之を要約すれば、略本が行章にあつて二廻向を開き、その中往相に行信の二法又は行信證の三法を屬してゐるのは、廻向の本源を十七願に置いて、行も信もまた證も悉く一南無阿彌陀佛の廻向なることを知らしめんが爲に外ならない。これ前の教章を結べる宗體釋に次いで、こゝに行章の本願力廻向が提唱せられる所以であらう。されば此の略本にあつて、往相廻向の内容が、或は教行信證の四法とも見られ、或は行信證の三法とも見られ、或は行信二法とも見られ、或は亦行の一法とも見られるのであつて、斯く眞實の教行信證がその開合自在なるところに、絶對的な他力廻向の情景が顯彰せられてゐる。

九 大行體相

大行者則……故名大行

【科文】 二隨釋行信二。初明大行二。初正明三。初顯行體相。已下正しく上の所標に隨ひ、先づ大行より釋するに、初に正しく明し、次に信經言乃至已下は追釋である。而して初の正明の中にて、更に初に直顯、二に引文、三に結嘆といふ次第。今此下は初に大行の體相を顯はす一段である。

【句釋】 大行者。上に標列せる大行淨信の中、先づ大行を牒舉して往相廻向の他力大行といふはとこれを標す。則稱無碍光如來名。語の據は論註下^二に論の稱彼如來名を釋して、稱無碍光如來名といへるにあり。五念門の中讚嘆門の行を現はす語であるから、宗祖は論并に註を相承して今茲に大行者則云云とのたまふ。稱とは口に稱へること。一多證文^{二六}に稱ハミナヲトナフルトナリと釋せらる。斯行徧攝一切行。斯行とは上の句の稱無碍光如來名を指す。徧攝一切行とあるを廣本行卷では攝諸善法^{具三}諸徳本^一とあり、善法とは因位の萬行であつて、三學六度等の一切因位の善根のこと。

又徳本とは果地の萬徳であつて、四智三身十力等の果上の功德である。略本ではそれらを總稱して一切行といふ。今名號の中には是等一切の萬善萬徳悉く攝め盡すといふことで、徧攝一切行といふ。極速圓滿。行卷には極速圓滿眞如一實功德寶海とあり。これは淨土論の能令速滿足功德大寶海の語に依られたものと見るべく、故に極速は論文の速の字に極の字を加へたものである。一多證文^三に速ハスミヤカニトイフ、トキコトトイフナリと釋す。圓滿は論文では滿足とあり、一多證文にコノ功德ヲヨク信ズルヒトノコ、ロノウチニスミヤカニトクミチタリヌトシラシメントナリといふ。即ち極速は頓極頓速で、經に一念大無上功德と説き、論には能令速滿足とあれば、今南無阿彌陀佛の六字には、不可稱不可說不可思議の功德を具へて、其功德を信ずる一念の極速に行者の身に圓滿せしむる徳ありといふのである。故名大行。この一句は結釋にして、故の字で上を結び、斯行云云の下は大と名づけられる理由、稱無碍光如來名は行と名けられる理由であると解せらるべきである。即ち初に大行者と標し、終に故名大行と結ぶ。其中間の釋は之を行と名け又これを大と名づくる理由を顯はせるものと見てよいのである。

【論攷】 問 茲に大行を釋するに、大行者、無碍光如來、名ナリと言はず、稱シユルナリ無碍光如來、名ト言へるに就いて、之を行の相狀を明して行の得名を釋したものと見る説あり、如何に考ふべきか。

答 稱名が行相であると考へ、終に故名「大行」と結んであれば、これを行の相狀を明してその得名を釋したものと見ることに別に異論はない。されど絶対の大行にあつて、行體と行相とは必ずしも區別して考へられるべきでない。往相廻向の大行としては、能所本より不二である。されば信を内含せる行の當體にあつては、行體の名號と行相の稱名とは引き離さうとしたとて、これを二つに引き離されるものではあるまい。それゆゑ私は此の一段には、行に能所の別を立てず、こゝに往相廻向に於ける絶対的大行の體相を打出して、直に大行の何物であるかを開顯せるものと見るのである。而して大行の得名を釋するは、恐らく釋名が目的ではなくて、其名の詮せる自性を指示せんが爲であらう。されば前に既に利他圓滿大行と行體を示せるを、今更に其内容を具さにしたのに外ならず、これを茲に往相廻向となせるは即ち利他であり、これを偏攝一切行極速圓滿といへるは、即ち圓滿である。さればこれを句面の如く解説すべきであつて、祖釋に於

いて其指示なき限り、漫に體相用を區別する概念に捕はるべきでない。

問 若し文字通りに解せば、稱無碍光如來名は機位に於ける能行となるではないか。

答 是れ論註に論の稱彼如來名を釋せる語を取つて、大行を定義せられたものである。爾るに論々註では五念門中讚嘆門を釋せる語であつて、これを略讚嘆の念佛に約すれば、それが名義相應せる如實の行であることは、動かすべくもないことである。若もこゝに觀經に於ける稱南無阿彌陀佛の語を出さば、それは隱顯兩義に亘り、自力と他力とに通ずるでもあらう。爾るに今は觀經に依つて稱南無阿彌陀佛と言はず、論々註の稱無碍光如來名を出したのであるゆゑ、これが絶対純粹の他力大行であることは、誰も異論はないであらう。既に絶対純粹の他力大行であるとすれば、これを所行と見るもその所行たるや必ずしも機位を離れて能行の外にあるのではない。若も全く能行を離れたら如來の發願廻向といふも、それは單に如來の行を廻施するのであつて、これを衆生、行を廻施するとは言はれまい。たとひ又これを能行と見るも、それは法位に於ける所行を離れた能行ではあるまい。六字はたとひ之を機位に置くも、六字は常に六字にして、眞實信心の稱名は彌陀廻向の法たることを失ふものではない。譬へば同じ一つの財寶が息子の手

にあつても、息子はそれを己が有と思はず親の有と申うてゐる。親は親でそれを息子の有として與へてゐるところに、父子一體の妙處があるやうなものである。世上動もすれば、或は能行、或は稱名といへば、これを全く所行とか法とかいふことと切り離されたものと思ひ、忽ち稱名正因とか口稱募りとかいふ異解に陥ることを懼れる輩があるが、それは定散自力の稱名のことである。絶対純粹の他力大行は、全く斯る定散自力から超越せる眞實の世界である。

一〇 破 闍 滿 願

是故稱名能破……一切志願

【科文】 二明行徳用。上に出せる稱彼如來名の大行には、破闍滿願の徳用あることを顯はす。

【句釋】 是故。上を承け下を成ずる語。前の徧攝一切行極速圓滿とあるを承け、後の破闍滿願の理由としたのである。稱名。前の稱無碍光如來名を要約す。この二字、能所を分てば分ち得られるけれど、能所本より不二である。能破衆生一切無明能滿衆生一切志願。此十六字論註下名義相應釋の文を取る。衆生一切無明とは六要會四

能破等者、明滅罪徳一切言、中應攝惑障業障報障諸不善也とあつて、一切の煩惱を總稱せる語とす。されど別しては本願を信ぜざる不了佛智の疑ひを無明といふ。これ無明に總別二義の分たる、所以であつて、總じて言へば惡業煩惱別して言へば不了佛智の疑惑である。聖道の極談は開佛知見にあり、迷へば無明、悟れば法性、その根本無明を斷滅し、中道實相の佛知見を開覺するより外にはない、之を斷無明證中道といふ。然るに眞宗の所談は斷疑生信にあり、生死流轉の本源をつなぐものは、不了佛智の疑惑であり、涅槃常樂の佛果に至るは、明信佛智の信である。疑へば迷ひ信ずれば證る。されば凡夫不成の迷情に、令諸衆生の佛智滿入して聞名信喜する一念に、不了佛智の疑を破り、三有生死の雲を晴らす。故に迷の因となるは不了佛智の疑、不は無也、了は明也で、これを無明といふ。これ眞宗の別義である。されど眞宗にあつても迷悟をいへば、その基準とするところ、また聖道通相に違せず、故に總無明別無明の目あり。次に一切志願といふに、亦總別の二義がある。總じては上求下化の自利々他の大願である。これ淨土論二十九種莊嚴の中、依報十七種の終結が所求満足功德であつて、自身利益大功德力成就と利益他功德成就とであるので知られる。又別して言へば往生淨土の願心である。

以上之を要するに、廻向の大行は極速圓滿の徳あれば、稱名念佛には全ての無明を破する破闇の力と又一切の志願を成ずる満願の力とがあると、大行の徳用を顯はせる一段である。

一一 稱名轉釋

稱名即憶念……則是南無阿彌陀佛

【科文】三轉釋歸體 大行を明すについて、上に先づ衆生の能稱に約して行の體相を出し、次に同じく衆生の能稱に約して行の徳用を顯はした。故に更に此能稱は十九二十の如き無信單行に非ず、第十八願の能信に離れざる能行である。此能信に離れざる能行こそ、十方諸佛の讚嘆して十方衆生に説き聞かしめたまふ所の所讚の名號たる南無阿彌陀佛であると、これを六字の絶對的本體に結歸せられたのである。

【句釋】稱名即憶念 易行品ハ皆稱名憶念ハ阿彌陀佛ハ本願ハ如是とあり、又論註下ニ然有稱名憶念而無明由在而不滿所願者トとあるに據れるか。憶念とは信心のこと、稱名即憶念とは、口に浮ぶ稱名全く心てたもつ信心なること、波の舉體その儘に

水なるが如くである。これ即ち行信不離の意であつて、若し假に能所の別を立て稱名を能行と見れば、憶念は即ち能信である。故に能行の舉體即ち能信なりと顯はすが、第一重轉釋の意である。憶念即念佛 心に持つ信心全く口に現れて念佛となる。水の舉體其儘に波である。これは語を觀經の何況憶念若念佛者の文に取れるか。前が行信不離の義なれば、今は行信不離の義で能信を離れて能行なきことを示されたものと見られる。御一代記聞書ハオモヒウチニアレバ、色ホカニアラハル、トアリ、サレバ信ヲエタル體ハスナハチ南無阿彌陀佛ナリト心得レバ、口モ心モヒトツナリとあるが此義である。念佛則是南無阿彌陀佛 上に出せる稱名念佛を以て、六字の名號に結歸せられたのは、能稱の念佛と所稱の名號との不二無別なることを顯はせるものであるが、これを念佛の能行(信具の行)を以て所行所信の法體に結歸したものと見るもまた差支はない。元祖は其撰著に選擇本願念佛集と題し、更に往生之業念佛爲本と標して、其中間に南無阿彌陀佛と安きたまふ。これ上に題する念佛も下に註せる念佛も、其體六字に外ならずと顯はせるものであつて、この六字は念佛の能稱に對する所稱であると同時に、またそれが行者の所歸所信たることを認めざるを得ないのである。されば茲に念佛則是南無阿彌陀佛

とあるは、能稱と所稱との不二無別なることを顯はすと同時に、行と信と互に相離れず、行のあるところ必ずその廻向の法に對する信の具することを示されたものと見られ得る。されば行信の關係にあつて、之を絶對的に見れば、行も絶對なれば信も亦絶對である。此場合は行を離れたる信もなく、信を離れたる行もない。行といへば必ず信を具し、信といへば必ず行を具し、全く不二一體である。されど更に之を相對的に見れば、行は所行の法であり、信は能信の機である。それゆゑ機位に於ける能行能稱は、必ずしも所信の法ならず、それは彌陀廻向の法としてのみ、名號が所信の法となり得るのである。されば今こゝに念佛則是南無阿彌陀佛として、能稱能行の念佛を、所稱所行の名號に結歸せられたのは、上に出せる稱名即憶念の第一重轉釋は、行に信の具する絶對的の立場であり、憶念即念佛の第二重轉釋は、信に行の具する同じ絶對的立場の逆轉であり、而して念佛則是南無阿彌陀佛の第三重轉釋は、即ち相對的の行信不離の立場にあつて、行が信の所信たるは、機位に於ける能稱そのものにあらずして、その能稱と不二無別なる彌陀廻向の法としての六字名號たることを知らしめたものと見るべきである。されば第一重第二重に即といひ、第三重に則是といふ。即は體即全是の義にして、行信其相を異に

すれど、其體の一なることを顯はし、則是の則の字は法則の則で、斯うあれば斯うてなくてはならぬといふ意味である。そこで既にそれが廻向の念佛であつて見れば、それは則ち是れ南無阿彌陀佛の本願の名號に外ならぬのである。こゝに初めて絶對行の中に、その内容たる信が分立して、行はその法體たる名號として相對的に所信の地位に置かれるのである。

【論攷】 問 上の破闍滿願も稱名の益であり、この轉釋も亦稱名即憶念と稱名から出發してゐる。然るに最後に念佛則是南無阿彌陀佛と名號に結歸せられてゐるから、前に稱名とあるは要するに名號のことであつて、これを所行所信の法體行と見られ得るではないか。

答 然り、相對的にそうした見方も確に成立する。既に後に信章が置かれ、これを序文の敬信眞宗教行證と言へるから見れば、衆生聞信の機に對し、六字の名號が所聞所信の位に置かれることは理在絶言である。されど亦之を句面の如く解すれば、既に稱名とある限り、これを行中攝信の態勢から、眞實信心の稱名と見てゆけばそれでよい。和讃に彌陀ノ名號トナヘツ、信心マコトニウルヒトとあるが、こゝの稱名は即ち憶念である。

自力定散の稱名では稱名即憶念とは言はれない。信心マコトニウルヒトハ憶念ノ心ツネニシテと、他力の信にあつては、口と心とが一つである。されば化卷四四に此の絶對超越の立場から、横超者、憶念シ本願ヲ離ル自力之心ヲ、專修者、唯稱念シ佛名ヲ離ル自力之心ヲ、是ヲ名ニ横超他力ニ也ト……已ニ顯シ眞實行ノ之中ニ畢シと記されてゐる。これに依れば、眞實行の卷の中に已に顯はし畢れるものは、憶念本願と稱念佛名とであつて、自力の心さへ離れたら憶念と稱念とは全く一つで、共に横超他力と名づけられるといふことである。それがこゝに稱名即憶念、憶念即念佛と言はれてゐる。觀經では念佛衆生攝取不捨とあれど、宗祖が行卷七四に、歸ニ命スル斯ノ行信ニ者攝取シテ不レ捨テ故ニ名ニ阿彌陀トと語を改められたのも、此の意味から理解せられ得るであらう。要は自力の心さへ離れたら、信心一つと云うても、稱へるばかりと云うても、どちらでもよい。念佛爲本と信心爲本とが兩立し得るやうに、それは全く同じである。これを西山流のやうに、行を佛體の上のみにおいて、衆生の信心と懸け離れたものとしてしまつては、機の上の信行と法の上の名號とが別になつてしまふ。それでは眞實に救はれず、他力の正意が隠れてしまふゆゑ行中攝信の態勢で懇ろに示されたのが此の略本であると頂かれる。兎角自力が離れぬと

稱に偏したり、名に偏したりするのである。稱に偏して稱へることに力瘡がいれば鎮西流となり、名に偏して稱を拂へば西山流に傾く。末燈鈔四には彌陀佛の御チカヒノモトヨリ行者ノハカラヒニアラズシテ、南無阿彌陀佛トタノマセタマヒテ、ムカヘントハカラハセタマヒタルニヨリテとあり、歎異鈔三には、マツ彌陀ノ大悲大願ノ不思議ニタスケラレマイラセテ、生死ヲイツベシト信ジテ、念佛マウサル、モ如來ノ御ハカラヒナリトオモヘバ云々と示されてゐる。我が眞宗としては、是等の御詞に規準をおいたら、それは仰せのままに頂かれる。行も信も如來の本願であり、本願力の廻向であるといふこと、此の略本を文字通り拜したら、誰でも眼に入らぬといふ筈はないのである。

一一 成就連引

願成就文經言……住不退轉

【科文】 二引文二。初正引二。初引ニ聖言ニ。初成就經文。上來大行を明すに、直顯の一段が終つて、此からが引文である。其引文中に正引私釋と分れ、其正引中、經文論文と次第される中、今は經文なればこれを次の論說に對して聖言といふ。その經文を引く中に今は成就、次は付屬と分れ

てゐる。

【句釋】願成就文經言。廣本は因願をも引けど今は願成就のみを引く。具にいへば諸佛稱名願成就文なれど、上に即是出於諸佛吞嗟之願云云とあれば、それを承けて單に願成就文といふ。又經言とのみあつて經名を出さぬは、上の言、教者則大無量壽經也を承けて、唯大經のみに依られたから別に簡ぶに及ばぬのである。十方恒沙諸佛如來皆共讚嘆。この十二字は諸佛の能讚、無量壽佛以下十二字は所讚の佛徳である。威神功德とは光明と名號との彌陀不共の別徳、不可思議とは之を開けば法界に遍く、之を卷けば六字に攝る言亡慮絶の義である。以上は十七願の成就であつて、次の諸有衆生以下第十八願成就である。諸有とは、淨土和讃(十三卷三)の左訓にシヨウハ二十五ウノシユジャウトイフ云とあり。因願の十方衆生は悲願の廣大を顯はし、今の諸有衆生は本願の實機を顯はす。其名號とは諸佛讚嘆の名號にて即ち所聞所信である。これと同時に聞とは行者受得の能聞能信である。一多證文ニキクトイフハ本願ヲキ、テウタガフコ、ロナキヲ聞トイフナリ。マタキクトイフハ、信心ヲアラハス御ノリナリとあつて、これを聞即信といひ、眞宗の詮要この一字に極まる。信心歡喜。一多證文ニ信心ハ如來ノ御

チカヒヲキ、テウタガフコ、ロナキナリとあり、上の聞の字の釋と同じ、聞即信なるが故である。これ聞其名號と信心歡喜と即得往生とが、語の上では前後の順序あれど、事體としては信の一念の時にある。これを聞き開いて後に信じ、また信じて後に往生治定するが如く考へるは、全く誤れる考へ方である。謂ゆる信樂開發の時剋の極速にあつては、聞き開くと、信ずると、往生が定まるとは、たゞ一念の端的にあるといふのである。歡喜とは證文ニ此二字を身と心とに分けて釋し、ウベキコトヲエテムズトサキヨリヨロコブコ、ロナリと示された。更に乃至一念には、乃至ハオホキヲモスクナキヲモ、ヒサシキヲモチカキヲモ、サキヲモノチヲモ、ミナカネオサムルコトバナリ、一念トイフハ、信心ヲウルトキノキハマリヲアラハスコトバナリとの釋を與へ、これを行の一念と見ず、信の一念と見られたところに、今家の一念發起平生業成と強調する宗義が成立するのである。至心廻向。證文ニ、至心ハ眞實トイフコトバナリ、眞實ハ阿彌陀如來ノ御コ、ロナリ。廻向ハ本願ノ名號ヲモテ十方ノ衆生ニアタヘタマフ御ノリナリと釋し、至心ニ廻向セシメタマヘリと訓點を與へて、至心も廻向も之を法の方の他力に約して釋せられた。これを願々鈔ニ、至心廻向ノ四字ハ承上起下トナラフナリと釋し、成

就の文を因願の三信に配すれば、聞名信喜は信樂に當り、至心廻向は至心に當り、願生彼國は欲生我國に當る。故に成就の文では信樂至心欲生の順序になつてゐて、因願の三信とは三信の次第が違ふ。だから願々鈔でこれを解説して、上の信心歡喜の信樂も下の願生彼國の欲生も、及び即得往生の利益まで、凡夫自力の所爲に非ず、全く如來の他力廻向であることを顯はす爲に、至心の成就を其中間におかれたものと見ることが、祖師以來相承せる見方であると示されてゐる。即ち至心廻向の四字は成上起下の意にして、まづ成上とは、名號を聞くところて信心歡喜の一念起るは何故ぞや、曰く法藏因中の至心のまことから廻向し給へるが故である。次に起下とは聞くところにて願生彼國即得往生の救ひの達成せられるは何故ぞや、曰く如來大悲の至心から廻向したまへるが故である。斯の如く願成就の三十二字を聞の一字と至心廻向の四字とへ攝めて、一念業成の義相を顯はすが、三代傳持の釋であると示されてゐる。願生彼國 因願では彌陀招喚の相なれば欲生我國といひ、成就は釋迦發遣の教であつて、この娑婆から彼の淨土を願はしむれば、願生彼國と説かれてゐる。即得往生住不退轉 卽は同時即。得は證文註に、得ハウベキコトヲエタリトイフ云と定得往生の義で釋し、眞要鈔本一註に、ウル

トイフハサダマルコ、ロナリと其意味を明了にせられた。これ經の即得を論の即時入必定て釋せるものであること、行卷大正にて知られる。住不退轉は彌勒と同じき等覺不退である。

【論攷】 問 廣本では十七成就の文を行の證文として行卷に引き、十八成就の文を信の證文として信卷に引かれた。斯く廣本では二願成就の文を引き離し、之を行信二卷に分引せられてゐるのに、今略本では何故に十八成就の文を信の下に引かず、これを十七成就と一連にして行の下に引かれたのか。

答 これ即ち略本が行中攝信の態勢であると謂はれる所以であつて、既に其組織にあつて、行章の下に本願力から往還二廻向を開出し、而もその往相について、大行淨信の二法を展開せしめてゐる。廣本も亦行卷に謹按往相廻向有大行有大信と行信二法を行下に統攝せしめてはゐるけれど、これを表はすに大行大信と相對の語を以てし、而も行信二法その卷を異にしてゐる。これ廣本は方便の行信に對して、眞實の行信を開顯する相對的の立場にあれば、信卷には卷首に別序さへ附して、殊に行から信を獨立せしめてゐる。然るに略本は大行に對して淨信といひ、善導元祖の宗義を承けて、信を行中に

從屬せしめる絶對的の立場にあること、上來陳べ來れる如くである。されば今引文にあつても、十七十八の成就その文相既に聯鎖して不離なれば、これを行下に連引して、行中攝信の趣旨を明にせられたものと考へてよい。

問 二願の連引が行中攝信の趣旨を顯はすにありとすれば、十七十八二願の關係を如何に考ふべきであらうか。

答 古來の學匠、二願不離の關係を規定するに種々の義相がある。或は曰く、能讚と所讚との關係であると。或は曰く、能廻向と所廻向との關係であると。或は曰く、所選擇と能選擇との關係であると。或は亦曰く所行所信と能信能行との關係であると。斯くの如く學匠おの／＼二願不離の關係を考察して、其間に種々の義相が設けられてゐる。是等は孰れも其道理の存することではあれど、今直に之を以て、この略本行下に於ける二願連引の所由とすれば、恐らく義門の混雜を招くであらう。何となれば是等二願關係の義相は孰れも二願を差別せる相對的の考へ方である。爾るに今略本行下に二願を連引せるは、二願を一致せしめる絶對的の考へ方であつて、之を差別して關係を論ずる相對的の考へ方ではない。既に略本の内容が行中攝信の態勢であるとすれば、行信對立せざる

絶對的の立場から考へられなくてはならない。されば二願の關係は不離であるけれど、今茲に二願を連引せるは單に二願の關係を顯はす爲ではなくて、行信二法一體不離の關係を規定せんが爲の引證である。隨ひて二願の間に能讚所讚、能廻向所廻向、所選擇能選擇といふが如き關係の存することが考へ得られるとしても、必ずしもこの場合に適用せらるべきでない。又所行所信と能信能行との關係の如きそれをこゝに當て嵌めて考へれば考へられるに相異なる、それが誤つてゐるとは言はれぬけれど、それは相對的に行信不離の義相を批判せるものに外ならない。爾るに今は略本として絶對的に能所不二機法一體の立場から、行中攝信の義相を顯はさんが爲に、二願を連引せるものであるとすれば、斯る相對的の關係は直に茲に當て嵌められるものでない。十七十八は元より相離れず、二願に不離の關係あり、隨ひて行信不離なることは勿論であるけれど、今は行信の關係を相對的に考へるのでなくて、これを絶對的の立場から考へるのである。六要會一統に行中攝信の義を論じて、信行不離機法是レ一ナリ由ニ此ノ義ニ故ニ以テ信ヲ攝ス行ニと結釋してゐる。この中に信行不離とあるは相に約する相對的の見方であるが、これも二體の不離ではなくて、實は一體の不離である。機法是一とあるは體に約する絶對的の見

方であつて、機法といふも絶対中の相對である。されば行中攝信といふことは、これを相對的に行信不離の關係からも論じ得られることは勿論であるが、今略本にあつては、安心爲要の立場から機法是一といふ絶対的の立場から、判定せられなくてはならない。從ひて信に離れざる行といふよりも、寧ろ信を具する行として、具體的に之を見てゆくべきである。所信の法體たる名號から能信の信が廻向せられるのであると考へることは正しいに相異ないけれど、その考へ方に於いて信を獲たる體が南無阿彌陀佛であるといふこと、別であつてはならない。行信二法が機法一體であることの外に、廻向といふことの成立する筈はないのである。

一三 付 屬 經 文

又言佛語彌勒……無上功德^上

【科文】。二付屬經文 行の一念を説いた經文であるゆゑ、此に引いて大行の證文とせられた。

【句釋】 佛告彌勒 十七願に酬ひて番々出世の諸佛孰れも本願を傳へ説く。今亦釋尊が出世本懷所説の法門を當來の彌勒菩薩に付屬せられ、法滅百歳の末まで傳へたまふ。

宗祖之を彌勒付屬の文と名け給ふこと、如來會下^八今此法門付屬於汝應愛樂修習とあるに據る。其有得聞彼佛名號 一多證文^三本願ノ名號ヲ信ズベシト釋尊トキタマヘル御ノリナリ等と釋し、諸有衆生其名號を聞いて歡喜一念すれば、求めず知らざるに無上大利を具足するといふのである。踊躍 天におどり地におどり慶樂するありさま乃至一念。この一念は一聲稱へる行の一念で、行卷^九行則有^二一念亦信^三有^一一念、言^二行之一念者謂^三就^一稱名^二徧數^三顯^一開^二選擇易行^三至極^一故^二とあり、諸善萬行中から念佛一行を選取せるは易行なるが故であり、更に又一聲の稱名で救はれるといふは、易行の至極であることがこゝに顯開せられてゐるといふのである。末燈鈔^五行ト申ハ本願ノ名號ヲ一聲トナヘテ往生スト申コトヲキ、テヒトコエヲモトナヘモシハ十念ヲモセンハ行ナリ等とあるので、行の一念を考ふべし。當知此人 證文^三に、信心ノヒトヲアラハス御ノリナリと釋し、更に爲得大利トイフハ、無上涅槃ヲサトルユヘニ則是具足無上功德トモノタマヘルナリと釋してある。無上功德 證文^三に一念ハ功德ノキハマリ、一念ニ萬徳コトククソナハル、ヨロヅノ善ミナオサマルナリとこれを解し、行卷^{一〇}には言^二大利者對^三小利之言^一、言^二無上者對^三有上之言^一也。信^二知^一大利無上者一乘眞

實之利益ナリ也、小利有上ハ者則是八萬四千之假門ナリ也と判定せられた。これら孰れも
行の救ひの内容を顯はす要語である。

【論攷】 問 行の證文として上に既に成就の文を引用せらる。何が故ぞ更に付屬の文
を引用せられたか。

答 十七願に十方諸佛の名號稱揚を誓ふ。其の成就の文は諸佛之に酬ひて皆共讚嘆す
る相を説く。これに依つて横に十方諸佛が讚嘆するといふことは顯はれたけれど、未だ
豎に三世諸佛の讚嘆せられるといふことが知られない。然るに今釋尊が當來の彌勒に之
を付屬せられるといふにより、前佛後佛相傳へて彌陀の本願を説き名號を讚揚すること
がその出世本懷たることが知られ、斯くて彌陀の名號は横に十方に亘り豎に三世を貫ぬ
き、諸佛悉く稱揚讚嘆せられるといふことによつて、こゝに大悲の願意が徹底するので
ある。これ願成就に次いで付屬の文を引用し、以て十七願成就の大行を證明せられた所
以であらう。

問 十方三世に亘る横豎の讚嘆といふこと、その命を聴く。されど此の二の證文は十
七願の爲の證文ではなくて、大行の爲の證文でなくてはならない。横豎の讚嘆また大行

の讚嘆に外ならずとせんも、所讚の大行より言はゞ、此二文によつて何等か證明せらる
ゝものありとするか。

答 聖意測り難けれど、今試に之を解説せば、行の救ひの内容として、前に引ける二
願成就の説くところ、未だ必ずしもそれが明瞭でない。何となれば、十七願成就に無量
壽佛威神功德不可思議と説き、更に十八願成就に信心歡喜乃至一念至心廻向願生彼國即
得往生住不退轉と説いてはゐるけれど、前者にあつて其功德の内容未だ捕捉し難く、後
者にあつては寧ろ信の利益であつて、行の利益ではない。殊に即得往生といへる利益の
内容が知られ難い。それゆゑ今付屬の文にあつて、正しく行の一念に約して、爲得大利
と説き、則是具足無上功德と顯された所以がそこに知られるではないか。其義既に選擇
集本三六に願成就文、中雖云二一念亦不説カ功德、大利二至此一念説テ爲シ大利、歎シ爲ス無
上一當レ知ル是レ指ス一念一也、此、大利者、是、對スル小利二之言也と明に現れてゐるし、行卷に
之を信ニ知ス大利無上者一乘眞實之利益也と釋顯せられたばかりか、更に一乘海の御釋
や他力の御釋を追加したまへるもの、それが威神功德の内容であり、また即得往生の救
ひの利益でなくて何であらうか。若しこれを前の直顯大行の下に願れば、稱名に於ける

破闍滿願の益を示せるもの、即ち即得往生住不退轉であり、又遍攝一切行、極速圓滿の内容を顯はせるもの、即ち爲得大利則是具足無上功德であるとも看做し得られる。是等の功德利益が三世と十方とに亘りて、諸有衆生の上に施し惠まるゝところ、これ他力大行の他力大行たる所以であると證明せられるところに、この二文の引意があると窺ひ得られる。

問 願成就の一念を信の一念となせるに、何が故ぞ付屬の一念はこれを行の一念とするか。

答 經文の當相已に歡喜踊躍と説き、又行々相對して大利無上と言へるが故に、これを行の一念と見られたのである。されど竊に案ずるに、往相廻向の大行は、たゞ横に十方を攝化するばかりでない、それが豎に時代の流れを貫き、過去から現在、現在から未來へと大悲救済の實現しゆくところに、行の行たる所以がある。唯信文意を如來尊號甚分明、十方世界普流行の語意を解して、コノ如來ノ尊號ハ不可稱不可說不可思議ニマシマスユヘニ、一切衆生ヲシテ無上大般涅槃ニイタラシメタマフ大悲ノチカヒノ御名ナリ……十方世界普流行トイフハ、普ハアマネクヒロクキハナシトイフ。流行ハ十方

微塵世界ニアマネクヒロマリテ佛教ヲス、メ行ゼシメタマフナリ云云といひ、普く一切衆生を救ふ大悲大悲は、十方と共に三世に互らねばならない。されば彌勒に付屬して遐代に流至せしめることは、往相廻向の大行として、恩徳の廣大不思議なることを示すものにして、斯くてこそ利他圓滿の大行と名づけられる。それゆゑ付屬の一念を以て行の一念とする所以のもの、それは行の遐代流通といふことゝ、彌勒付屬といふことゝの間に、意味の關聯するものあることを以てその理由の一に加へ得られることゝなる。

一四 二論 引意

龍樹菩薩十住……華開即見佛

【科文】 二引論說二。初十住論文。上は經説、以下は論文。其中初に龍樹の論、次は天親の論である。

【句釋】 十住毘婆娑論云 十住は十地のこと。毘婆娑此に翻じて廣解といふ。廣く華嚴の十地品を解説せる論といふ意味である。若人欲疾得不退轉地者 以下五言二十字は易行品の十佛章の偈文である。得の字、現本並に行卷(會本二九)に至に作る、異本

ありと見ゆ。若人は本願の十方衆生。不退轉地は梵に阿惟越致といひ、この十住論では初地不退で、歡喜地のことなれど、宗祖は之を正定聚不退轉のこととせられる。疾得とは疾は速也、頓極頓速で、即得往生住不退轉の意である。行諸難行久乃可得に對す。以恭敬心。身業の敬ひてはなくて、恭敬心とあれば意業の恭敬即ち信心のことである。恭は謙遜して謙下ること、敬は先方の智徳を敬ふこと。故に機法二種の深信に當る。執持稱名號。執持は本鈔五六に祖釋あり、恭敬の心が相續して移り替らぬこと。若人種善根等。以下五言二十字は彌陀章の偈文で、大經智慧段の胎生化生の經意に依り、信疑の得失を批判する。若人は經の若有衆生て願生の人を指す。種善根は經の修習善本で、善根の本たる名號を稱ふること。同じ名號を稱へても、疑ふものと信ずるものとが分れる。疑とは即ち不了佛智の疑ひで、斯の者は胎宮に生れて五百歳、花に含まれ不見三寶の厄を受くる。信心清淨とは明信佛智のこと、疑は濁水の如く、信は澄淨である。他力の信は蓮華の泥に染まぬ如く貪瞋煩惱中にあつても清淨である。華開見佛。經に七寶華中自然化生と説き、眞實報土に生るれば、初から華が開けてゐて、かの含花の人が三寶を見聞せざるに反して、直に彌陀の眞佛を見奉るのである。

【論攷】 問 十住論の中から、僅に此の二偈を引用したまへる祖意如何。

答 初の偈文は易行により疾く不退轉地に至らんとするものは、恭敬の心に執持して名號を稱せよとあれば、易行念佛を説く文である。難行の行體が三學六度であるのに對し、易行の行體は念佛である。その易行易修の念佛にて不退に至れるとあれば、眞實行の證文となる。又後の偈文も若人種善根とあるが念佛を稱ふることゆゑ、これ亦名號を讚嘆せるもので、眞實行の證文となるのである。

問 前の偈文に恭敬心執持と云ひ、後の偈文また信疑に由つて華の開不ありと云ふ。

これは行の證文と言はんよりは、寧ろ信の證文と見るべきではないか。

答 行と信とは不離である。故に行のあるところ必ず信が具せねばならない。仍て前の偈文で易行念佛を明せるも、たゞ稱ふる念佛では不退に至られぬ、恭敬心を以て執持する信がなくては、何ほど稱へても不退に至れぬ、疾得不退の因は唯信心にありと顯はすのであれば、これは信の證文ともなる。又次の偈文が若人種善根の行を明すとしても、信疑の得失を明して勸信誠疑するにあれば、これ亦信の證文たり得ること勿論である。これは上の成就の文が二願連引されて、行中攝信の態勢をとり、絶對的に信具の行

て示されたのと同じ趣旨であると考へてよい。行といへば信は必ず來るのであつて、これを引き離さうとして引き離されぬことが示されてゐる。それゆゑ略本は行に信を攝して明し、引文も行の證文の中に信の證文まで收めて引かれてゐると考へてよい。

問 若人欲疾得等の偈文は、易行品の十佛章に出て、彌陀の名號のことでない。今何が故ぞ彌陀章に出づる若人種善根の偈文と一連に之を引證せるか。

答 易行品の文相では、十佛の稱名易行と百七佛の稱名易行と、又彌陀一佛の稱名易行とは、勿論其性質を異にしてゐる。されど若し其文旨を得て、絶對的の立場から之を見れば、諸佛の稱名易行は全く彌陀の稱名易行たることを妨げず。されば廣本では易行品の外に他の三品までも引用して、これを眞實行の證文とせられてゐる。これ元祖が傍明往生淨土の論と判ぜる十住論を宗祖が正明往生淨土論と見られる所以であつて、一論の起盡易行を明すを以て目的とし、他の諸品を以て易行品に攝し來れば、十住論の全體彌陀の本願を明すにありと見られるのである。

天親菩薩淨土論……功德大寶海

【科文】 二淨土論文 天親の論を引くに、願生偈三十四行中三行の偈文を出す。

【句釋】 天親菩薩淨土論云 此論多名あれど、淨土論の名は安樂集上天親淨土論とあるを初とし、玄義分禮讚等亦之を用ひ、往生要集下末無量壽經優婆提舍願生偈或名淨土論とあり、吾祖は銘文本此にコノ論ヲバ淨土論トイフマタ往生論トイフナリと二名共に襲用せられた。世尊 佛十號の一。今は世尊よと呼び掛け偈を造ることを告げたまふ御言。我心 論主自ら私の信仰は斯の通りと自督の安心を告白するところ。歸命盡十方無碍光如來 前の一心の信相である、即ち歸命は能歸の一心の相であつて、盡十方無碍光如來はその一心の所歸となる佛名であつて、この十字の尊號即ち六字の名號である。一心の相は如何といへば、盡十方無碍光如來に歸命するのが即ち一心であると示されたのである。願生安樂國 論註上此一句は是作願門天親菩薩歸命之意也と註し無碍光佛の願行を信じて安樂國に生れんと願ふ心である。但しこれ一心所具の願生心であつて願生即歸命とはいはれない。我依修多羅眞實功德相 以下成上起下の四句で、論主自ら三部修多羅に依り、この願生偈を作れることを述べたもの。修多羅は正しくは經と翻じ絲筋のこと、それを漢土の風に從へて經と翻す。今は大乘修多羅即ち淨土の三部經を指すのである。眞實功德相を論註では三經所説の三種莊嚴のこと、註す

れど、吾祖銘文本に眞實功德相トイフハ誓願ノ尊號ナリと釋し、これを経體南無阿彌陀佛なりと見られた。依とは論註に何所依、何故依、云何依の三義を以て檢覈せられた。説願偈摠持與佛教相應。願偈は願生偈のこと。これを銘文では、本願ノコ、ロヲアラハスコトバヲ偈トイフナリと、本に約して釋せられた。横超の大誓願を光闡する偈文なるが故である。摠持とは梵に陀羅尼此に摠持と翻す。盥に水をもれるやうに、今は二十四行の偈に三種莊嚴を收めて洩さぬといふこと。銘文では、摠持トイフハ智慧ナリ、無碍光ノ智ヲ摠持トマフスナリと、本に約して釋す。これ無量の莊嚴を二十九種に收むるは、無碍光佛の智慧により、又三經の法門を二十四行に收むるは論主の智慧に外ならぬからである。與佛教相應とは、函蓋相稱ふが如く、佛教と少しも異はぬこと。この相應に據つてこそ願生偈が優婆提舍としての權威を持つ。觀佛本願力遇無空過者。不虛作住持功德の四句で、論では上の偈文との間に十六行の偈頌がある。前後遙に隔たれどもこれを一連に見よとの意で、其間に乃至の語を置かれてゐない。これ偈文中第十八願の利益を説く重要の一偈であるから、一多證文三銘文本に御釋がある。佛本願力とは四十八願を全うした第十八願である。觀とは之を五念門へ當つれば起行の觀察

なれど、安心から云へば觀知の義で、信ずることである。一多證文三に、觀ハ願力ヲコ、ロニウカベミルトマウス、マタシルトイフコ、ロナリとある。遇とは證文三に遇ハマウアフトイフマウアフトイフハ本願力ヲ信ズルナリとあり、遇へども信ぜざれば遇はざるが如し、故は遇ふとは信ずることである。無空過者は證文に、信心アランヒトムナシク生死ニトマルコトナシと釋し、これぞ不虛作と名けられる所似である。能令速満足功德大寶海。能は不能に對し、佛力願力の手強さを顯はす。速は頓速の義。満足は圓滿具足の義、上の極速圓滿の語はこれに據る。功德大寶海は證文三功德トマウスハ名號ナリ、大寶海ハヨロヅノ善根功德ミチキハマルヲ海ニタトヘタマフとあり、諸水海に入り一味なるが如く、名號の中に功德の實を具する海の如くなれば、今本願力を信ずる一念に、速に功德大寶海を行者の身に満足せしむるといふ意である。

【論攷】 問 廣本行卷では具に七祖を連引して大行の證文とせられた。今略本では大行の證文に五祖を拂つて唯龍天の二祖を擧げたまふ祖意如何。

答 是れ恐らく龍天の二祖に他の五祖を攝したまふ意ならんか。何となれば龍樹は初歡喜地の菩薩、天親は十向滿位の菩薩である。二菩薩已に淨土を願生し眞宗を弘通した

まふ。深位の菩薩すら斯の如し、況や一般人師に於いてをやと顯さんが爲に、七祖の中略して二祖を挙げられたのであらう。此の義行卷には善導の下に傍依諸宗の十師を列ねて助顯せられてゐるので、ほゞ祖意の所在を知るに足るべく、特に今略本では、或は龍樹菩薩十住毘婆娑論云と標し、或は天親菩薩淨土論云と掲ぐ。廣本すら唯書目を舉げて論主の名を略せるに、略本却つて書目の上に論主の名を標せるもの、その意全く龍天二祖を以て他の五祖を攝し、これを高く代表せしめたものと看做してよい。

問 淨土論に二十四行ある中、何の理由あつてかこの三行のみを抄出して大行の證文とせられたか。

答 初の建章の一偈は、論主自ら己心の安心を告白せるものであつて、これが以下偈文の全體に流至するものと見れば、二十四行悉く一心偈となつてしまふ。されど長行から見て五念門を主として見てゆけば、偈頌奄含の義から偈文は五念門に配當せられる。従ひて此の初の一行に約安心と約起行との二義があつて、初にこれを論主が一心の安心を告白せるものと見れば、一心は禮拜等五念の由つて發る根據であつて、信の證文となる。されど起行に約して長行から振り返つて見れば、其一心から後起相續する起行五念

門を説いた偈文となる。されば此の一偈一文兩義なれば、之を行下に引用して、行信不離を彰されたものと考へられる。

問 爾らば第二の我依修多羅の一偈、何の所由あつて之を引用せられたか。

答 修多羅は三部經のことで、眞實功德とは三部經に説かれた誓願の名號のことである。これ即ち釋尊が彌陀の十七願に應へて名號を讚嘆せられたのである。然るに今天親菩薩が願生偈を造られたのは、その名號讚嘆を傳承せられたのであるが、それは與佛教相應の如實修行に外ならぬことを顯はせるものであつて、天親菩薩の讚嘆の行は、全く信具の行であることを示されたものと窺はれる。而もそれは優婆提舍の名を成立せしめるものであるとすれば、こゝに教と行と信とが一體にして不離なることが顯される。

問 第三の觀佛本願力の偈を引用せる趣旨如何。

答 宗祖は願偈といふを彌陀の本願を説き顯はす偈と解せられた。然るに二十四行中正しく十八願を説き顯はせるはこの一偈である。淨土論一部に讚頌せるところ、或は五念或は五功德、或は二十九種莊嚴と、その内容甚だ廣けれど、要中の要といへば、十八願を説き顯はせる此の一偈の外にはない。十七願に應へて諸佛の讚嘆せるところ、十八

願に極まれること、上に引ける願成就に顯れてゐるが、今も亦淨土論一部に讚嘆するところは、この偈文の外に出てないのである。これ偈の當相は第十八願であるゆゑ、信の證文とすべきであるけれど、今は信を行に攝めて、信の證文を行の下に出されたものを見るべきである。

問 廣本の例格として、經論釋を引用するに、經文には言の字を用ひ、論文には曰の字を用ひ、釋文には云の字を用ひられてゐる。然るに今何が故ぞ略本では茲に二論を引用するに、其例格を亂して俱に云の字を用ひたるか。

答 上の經文を引くには、願成就文經言、又言と言の字を用ひ、今二論を引くに云の字を用ふ。若し之を下五宗師釋云、又下六宗師解云と、善導の釋を引くに云の字を用ひてゐるに對照すれば、恐らくこれ龍天二祖を他の五祖と一列に置いて、五祖を二祖の中に含めることを顯はせるものに相異なる。これ廣本に於ける例格を破つて、今は言曰云の三字を經論釋に配當せず、僅に言云の二字によつて經釋を分ちたまへる意趣であらう。

問 七祖を代表せしめるに、龍天の二祖を以てしたるは、單に高位の菩薩たるに由るか、若し然らば寧ろ後五祖と區別して曰の字又は言の字を用ゆべきであらう。何が故ぞ

之を人師の五祖と同格ならしめて、菩薩の論に云の字を使用されたか。

答 是れ恐らくは眞宗傳統の規準を定めたものであらう。何となれば行卷に七祖を列するは、正信偈の依釋分と共に、他力眞宗の傳承を三國七祖と規定せるものであることは、今更説明を要しない。然るに今七祖を略して其中龍天二祖を出せることは、人師の釋よりも菩薩の論に重きの置かれる趣旨であること、已に前陳の如くである。されど他力の信心に至つては、菩薩と人師との間に何等の差別なく、解行全く一味でなくてはならない。これ云の字によつて、上二祖と下五祖とを同格ならしめ、以て他力の解行に至つては祖々全く一味なることを示されたものであらうか。

問 若し爾らば何が故ぞ天親と曇鸞とを以てこれを代表せしめざるか。已に三經一論の次第を守り、論主と宗師との傳統を重んずれば、こゝに天親曇鸞の二祖を出すべきであらう。何が故ぞ宗祖の常規に異なりて、茲に龍天の二祖を出せるか。

答 聖意のあるところ漫に之を付度するを懼るれど、聊か予が所見を陳ぶるを容さるゝならば、これ即ち傳統の本源を明にせるものである。香月院も已に此の下で講ぜられた、偈頌は讚嘆の義にして、龍樹菩薩や天親菩薩が易行の念佛を讚嘆したまふ文である。

上に眞實行の證文として大經を引くは釋迦や諸佛が彌陀の第十七諸佛稱名の願に應へて彌陀の名號を讚嘆する名號讚嘆である。次に龍樹天親の論を引いて、七祖もその佛の名號讚嘆を傳へて、また同じく名號を讚嘆したまふ所の文である（講辯取意）といはれ、而も龍樹の下でも天親の下でも、眞實行の證文をば行を明す下に引きたまふに微意の存することを力説せられた。こゝは深く考へらるべき點であつて、略本の第三段たる三一問答は、經の三信と論の一心との相異せる疑問につき、これが融會に明證を出されたものであるが、予をして言はしむれば、これぞ即ち眞宗に於ける傳統の本源に、その確定的基礎を與へられたものであつた。されば行卷に引用せられざる建章四句が、略本ではこの行下に引用されてゐることは特に注意せらるべきことと、偶ま以て後に三一問答の由つて起るべき張本と看做すべきではないか。而も三一問答は第二祖天親と根本經典との融會釋であるが、彌陀の本願から直に天親の論へと傳承せらるべきではない。第二祖天親の其前に初祖龍樹のあるあり又龍樹の前に教主釋尊の在すことを忘れられるやうな宗祖ではない。それゆゑ茲に龍天二祖を連引して、以て天親の一心歸命の承くる所は、龍樹の恭敬心執持にあり、而も龍樹天親の本づく所は釋尊の願成就に於ける信心歡喜乃

至一念にありと知らしめ、更に後の三一問答に至つて之を彌陀如來の本願の三心と聯繫せしめたことは、これを略本の一部の組織から大觀して、其義の顯然たるものあることを信ずるのである。正信偈の讚頌内容が、彌陀・釋迦・七祖の順序となつてゐることは、之を行章の所に移して、傳統次第の規範とせらるべきである。而も今の所引の論文、十住論も淨土論も共に偈頌讚嘆の形式であることは、正信偈の同じ讚頌形式であること一致し、眞宗の歴史的傳統の流れが、十七願の諸佛讚嘆といふことと、何等か其流源の相通するものあることを想はしめる。

一五 不廻向行

聖言論說特用……名不廻向

【科文】二結釋、上の引文に經と論とを擧げれば、茲に御私釋を施して廻向の行を結ばれた。

【句釋】聖言論說 大聖の眞言と菩薩の論說とて、上に引ける經の三文及び論の二文のことをいふ。特用知 上に引ける經論の證文明かなことと、とりわけ格別に之を以て知ることができるといふ意。用は以の字と同義なれど意稍重し。非凡夫廻向行等

上に出せる往相廻向の大行は、全く凡夫自力の廻向を超えた絶対他力の現れであると、こゝに今家別途の不廻向の宗義を以て結ばせられた。凡夫廻向行とは、淨土の行にあらざる雜行のことである。行卷九四には明_ニ知_ス是非_ニ凡_ニ聖_ニ自力_ニ之行_ニ故_ニ名_ニ不_ニ廻_ニ向_ニ之行_ニ也とあつて、凡夫聖者に通じ總じて自力の行を簡ばれた。今は別して凡夫の虚假雜毒の行を簡びて非凡夫廻向行と仰せられた。化卷四四自_レ本_ニ非_ニ往_ニ生_ニ因_ニ種_ニ廻_ニ心_ニ廻_ニ向_ニ之_ニ善_ニ故_ニ曰_ニ淨_ニ土_ニ之_ニ雜_ニ行_ニ也とあり、可知。是_ニ大_ニ悲_ニ廻_ニ向_ニ行_ニ故_ニ大_ニ悲_ニの願_ニ即_ニち第十七の本願力から廻向したまふ行であるからといふ意。故_ニ名_ニ不_ニ廻_ニ向_ニこれは吾祖の名づけたまふのではない。元祖が選擇集二行章私釋本行に念佛と諸行とを相對して廻向不廻向の一対を立てられた。念佛は不廻向の行、諸行は廻向の行である。文の表は正助二行に通じてあれど、元祖の意は助業にあらず、第四の稱名念佛を不廻向と名づけられたのである。御文八故_ニ凡_ニ夫_ニノ方_ニヨリ_ニナサ_ニヌ廻_ニ向_ニナルガ_ニユヘ_ニニ、コレヲモテ如來ノ廻向ヲバ行者ノカタヨリハ不廻向トハ申スナリとあるは、こゝに據られたものと拜せられる。

【論攷】 問 大行は如來の大悲廻向にして、凡夫の廻向にあらずといへること、其旨上の引文のいづれに顯れたるか。大經の言、龍天の論、不廻向の義見え難し、何故に之

を以て結釋したまへるか。

答 上に引く十七願成就は、已に是れ他力廻向の根本である。これを十八願成就に來つて明に至心廻向と説き、これを付屬に來つて具足無上功德と説く。更に龍樹が恭敬心執持と言へるは、謙下敬上の己を忘れた不廻向の相と見るべく、天親これを能令速満足等と讚へたるは、大悲廻向の相といふべし。眞實信心ノ稱名ハ、彌陀廻向ノ法ナレバ不廻向トナツケテゾ云彌陀廻向の法にして行者不廻向の義、經論にあつて明かである。故に不廻向の義を以て結ばれたのである。

一六四 句 結 嘆

誠是選擇攝取……………圓修之勝行也

【科文】 三結嘆 行章を結ぶに、教章の終と同じく四句の嘆釋を以てし、行徳を顯された。

【句釋】 誠_ニ是_ニ前_ニに_ニ同_ニじ_ニ。選擇_ニ攝_ニ取_ニ之_ニ本_ニ願_ニ。元祖相承の語。選擇は異譯に依り、攝取は大經に出づ、言異義同である。法藏の因中に餘行を選捨し念佛を選択したことで、念佛は選擇本願の行であると嘆ず。即ち前の不廻向の行といふと同じ意である。無上

超世之弘誓。經の超發無上殊勝之願の語、及び我建超世願の語に據る。選擇攝取の本願なるが故に、無上超世の誓ひである。故に二句を合すれば、選擇攝取したまへる無上超世の本弘誓願の行といふこととなる。即ち凡夫自力の廻向の行ではないといふことである。一乘眞妙之正法。善導の頓教一乘海。五會法事讚（行卷所引）の念佛三昧、是眞無上深妙門。及び禪律如何、是正法、念佛三昧、是眞宗に語據を見出す。即ち善導に依つて一乘といひ後善導に依つて眞妙といひ正法といふ。大小善惡の人を簡はず、同一に念佛成佛するが一乘であり、其一乘の眞實にして利益不可思議なるを眞妙といふ。こゝに權實眞假が批判されるので、これを正法と名づく。萬善圓修之勝行也。元照の彌陀經疏（行卷所引）に一乘極唱……萬行圓修、最勝獨推於果號とあるに據る。如來の方に永劫の間萬善萬行、之を圓滿に修して成就せる廻向の大行であるから、行者之を修するにもまた萬行萬善圓融して衆生往生の行體となる殊勝の行であるといふこと。

【論攷】 問 四句の結嘆何等の趣旨あるか。

答 廣本行卷の結嘆また四句ありて今と大同小異である。今の四句之を案ずるに、初の二句は願と誓との一對であり、後の二句は法と行との一對である。これ往相の大行が、

大悲廻向の行にして、行者の方より不廻向の行なることは、全く如來の方に選擇攝取の本願を成就したまへるに由るのである。而してこの選擇攝取の本願なればこそ、諸佛の救ひに洩れた悪人女人が悉く救はれるのであつて、こゝに無上超世の弘誓といふことが成立する。これ即ち初の二句は念佛の大行を佛願の本に約して嘆美せる願と誓との一對である。斯くて悪人女人悉く念佛成佛するのであるから、これぞ即ち一乘であり、眞實微妙の正法であると、我が眞宗を他の方便邪偽の教法と簡びて、念佛成佛是眞宗のみが最高價値の宗教であると讃へ、更に念佛の勝行たる所以は、名號は萬善萬徳の所歸にして、内證外用一切の功德悉く其中に攝まり、これを圓修することができるからである、正しく行徳に結歸せられたのである。これ後の二句は、念佛の大行を衆生の末に約して教と行との両面から嘆美せる一對である。

一七 行 信 一 念

經言乃至者……正念卽是正業也

【科文】 二追釋二。初釋付屬一念。上來往相大行について、正明の一段を終り、こゝに經の要義

を追釋する。其中先づ付屬流通の行の一念を釋す。

【句釋】經言乃至者。經の流通の乃至を牒し擧ぐ。兼上下略中之言。善導元祖の釋意を承けて乃至を釋す。上は上盡一形。下は下至十聲一聲。略中は上盡一形の稱へ終りの念佛と下至一聲の稱へ初めの念佛とを擧げて、その中間を略せるをいふ。即ち乃至は上盡一形下至一念を兼ね顯はす語であつて、その上下を兼ねて乃至といふのであるから、具さにはその中間をも出すべきだが、今は乃至してその中間を都て略したといふのである。止觀補行二之三五九越却二中間ヲ故云三乃至成佛トの釋今と同意である。言一念者即是專念。以下行の一念の説明に轉釋を以てせらる。即是專念とは散善義の一心專念の專念であつて、此の專念を以て行の一念を釋す。信卷末二宗師云三專念ト即是一行ヲとあつて、之を行と定められた。專念即是一聲。散善義の專念を禮讚の一聲にて釋す。即ち專念の念は意念ではない、念聲は一であることを顯はす。一聲即是稱名。觀經下上品の稱南無阿彌陀佛稱佛名故とある稱名で、禮讚の一聲を釋す。稱名即是憶念。下上品の一聲稱名を流通の何況憶念で釋す。稱名の行其體憶念の信にして、行信體一不離なりと顯はすのである。憶念即是正念。散善義二河喩の一心正念の正念

を以て、觀經の憶念を釋す。此の正念は一心の憶念から現はるゝ行なることを顯はす轉釋である。正念即是正業也。二河喩の正念の語を更に散善義の是名正定之業の正業で釋す。即ち初が散善義の一心專念の專念で釋したから、こゝで再び本に歸して、行の一念は要するに第十七願に成就せる名號正定業であると結ばせられた。

復乃至一念者……一念也應知

【科文】二釋成就一念。一念に行の一念と信の一念とのある中で、吾祖は付屬を以て行とし、成就を以て信としたまふ。故に上に次いで成就に出づる信の一念を釋する。

【句釋】復乃至一念者。復は復重の義、同じ乃至一念を上は流通の意で行として釋し、今重ねて之を成就の意で信として釋す。故に復といふ。即更非言觀想功德徧數等之一念。更の字これを國語で解すれば、一向に、さら／＼などいふに同じ。觀想功德。佛の相好の功德を觀察し憶想すること。徧數。念佛の徧數のこと。一遍の稱名を一念といひ、十遍を十念といふ。それを今は觀想の一念でもなければ、稱名の一念でもない、是等の一念を簡ばれたのである。何故にこの二つを簡んだのかといふに、論註上三に一念を釋してそこに觀念と稱念との二義を擧げ、觀念とは阿彌陀佛を憶念するに若は總相

にせよ若は別相にせよ、佛の相好功德を觀想する一思ひが一念であり、又名號を稱すれば一聲を一念といふとある。然るに今は成就の一念を信の一念とするのであるから是等の一念を簡ばれたのである。等とは、今の一念に濫ずるものは、この二種に限るのではない。論註の六十刹那を一念とする如き、他の一念を此の等の字に收む。就獲得往生心行時節延促言乃至一念也。往生心行とは往生淨土の大信大行である。但し信行といはず心行といへるは宗祖の一格である。即ち十八願が、りて三信十念の場合には信行と書く、淨土論が、りて一心一行又は一心五念といふ場合には心行と書く。曇鸞和讃に、コレヲノ廻向ニヨリテコソ心行トモニエシムナレに次いで、次の一首に悲願ノ信行エシムレバと、前後二首に之を使ひ分けさせられてある。故に心行も信行も同じこと、心得てよい。今は願成就の信の一念を釋するのであるが、聞其名號の一念に一心も五念も一名號に攝めてこれを廻向せられる。それゆゑ今は信心を獲得する一念であるが、信といへば必ず行を具し、稱名の行は一念の信についてくるゆゑ、これを獲得心行と示されたのである。時節延促 延は延長で多念相續と延びゆく相。促は極促で引きちぢめた初一念である。今成就の一念は信樂開發の時剋の極促を顯はすので、至極ちぢめた初

念のことである。然るに今何が故ぞ時節の延促と仰せられたかといふに、これは今成就の一念は、觀念でもなければ稱念でもないと對簡して、一念の語義を規定するのである。故に獲得往生心行時節とそれが時節の一念であることを定められたのである。されば時節の延促とあつても、意の取る所は促の方にあつて、延の方にはないのであると見るべきである。應知 意を止めて見るべきである、上來所明を押へて應知の二字を置くは、淨土論の例格である。

【論攷】 問 乃至一念の語について、こゝに前後兩釋を出す。經言とあるは、何れの經文と見るべきか。

答 前釋は行の一念、後釋は信の一念なれば、次の如く付屬の經文と成就の經文とを當つべし。何となれば、既に行卷に付屬の一念を行の一念とし、又信卷に成就の一念を信の一念としてある。これに準據すれば、前釋の行に約する一念釋は付屬の經文、後釋の信に約する一念釋は成就の經文と見らるべきである。

問 前後兩釋の内容を検するに、前釋を行の一念釋とするも、其中に稱名即是憶念憶念即是正念といふが如き行信混淆せるものがあり、後釋を信の一念釋とするも獲得往

生心行時節延促とあつて、行と信とに通ずるかの如くに見られる。而も別に付屬とも成就とも記されてゐない。されば兩釋共に成就と付屬との一念を釋したものと解し得べく、從ひて一念は信と行とに通ずることを顯はせるものとも見られるではないか。

答 行と信とは不離一體の關係ありとするも、行信二法の別開は、十七十八の二願を根據とし、往相廻向の機能を顯せるものであつて、一宗の綱格嚴として動かすべからざるものがある。これ行卷六四に凡就往相廻向行信行則有二念亦信有一念云々と、營に往相廻向中に大行大信を別開せるばかりか、更に行にも一念あり信にも亦一念ありと、行信各別に一念といふ單位を立てられた所以である。若しも行に一念なかりせば、選擇易行の至極は顯開せられず、大利無上の利益もこゝに隠れることとなり、若しまた信に一念なかりせば、信樂開發の時刻の極速は顯はれず、一念發起平生業成の宗義は全く成立しないことになつてしまふ。されば末燈鈔六六信行一念章にあつて、二法不離の關係を詳にせるにも、先づ信ノ一念行ノ一念フタツナレドモと標し、更に信ト行ト二トキケドモというてその不離を釋し、最後に行ト信トハ御チカヒヲ申ナリと結釋せられた。これを十八願の一願で見ても、三信と十念とは別に誓はれ、更に二願を別開すれば、十七は

行成就の願であり、十八は信成就の願である。されば一願該攝の義相よりするも、二願分相の義相よりするも、如何に行信が不離一體の關係にあればとて、これを混淆すべきではない。既に行と名づけ又信と名づけたる限りは、行信差別せらるべきであつて、一念には行の一念釋と信の一念釋とが區別せられる。隨ひて廣本の綱格に準據すれば、前は付屬の一念、後は成就の一念と見らるべきである。

問 廣本では行の一念は行卷に釋し、信の一念は信卷に釋す。今は行信の兩釋、これを一連に行章に擧げたまふは何等の理由あるか。

答 前に屢々陳べたやうに、略本は行中攝信の態勢である。既に二願成就の文を連引して、信卷に出された十八願成就の文を行下十七願成就の文に従屬せしめたのも、行中攝信の義を顯はさんが爲であつたと解せられる。されば今も亦信の下に出すべき信一念釋を以て、行の下にて之を行一念釋の後に加へたるは、略本としては寧ろ當然のことであると言つてよい。

問 若し爾らば上の引文に成就付屬と次第せるが如く、今も信一念行一念として信行の順序に隨ひ釋すべきではないか。何が故ぞ引文の列次に反して之を行信と次第せる

か。

答 當段は行を明す所なれば、先づ行を明して信に及び、行中攝信の義を顯はすのである。上の引文は經説の順序に従ひ成就付屬と次第せるものなるべきも、今は先づ其後の引文たる付屬の一念を釋し、更に成就の一念に及び、以て文義を連續せしめてあることは、是れ自然の筆法である。加之、信の一念釋は直に次に擧げられる信の一段へと連續し、以て義脈を互に聯繫せしむるものと見てこそ、こゝに追釋を加ふる妙趣が發揮せられるのである。

問 然らば何が故ぞ行の一念釋に、憶念の信を雜へ、信の一念釋に心行というて行を加へたるか。

答 是れ恐らくは行信一念の不離なるを知らしめたものであらう。行信は既に不離なるが故に、行のあるところ必ず信あり、信のある所亦必ず行あり、行中に既に信を攝すれば、信中にも亦行を攝し得べし。故に廣本にあつても、行卷には行信の語を用ひ信卷には信行の語を用ゆ。これを絶對的に見れば大行も絶對であり、大信も絶對である。隨ひて唯行だけでも完全に救はる、行中に信があるからである。信だけでもまた完全に救

はる、行を離れた信はないからである。これ元祖の念佛爲本と宗祖の信心爲本とが、兩立して相碍へぬ所以である。されど廣本は立教開宗の本典にして、相對的に權實眞假を批判するにあれば、行信別開して、一念を釋するにも、信は信として之を釋し、行は行として之を釋せなくてはならないのである。然るに略本はこれに異りて安心爲要の著述であるから、三々の法門といふが如き、相對的な批判は悉く之を除き、偏に絶對的の立場から行信不離の相を知らしめやうとせられた。これ一念の兩釋に行信混同せるが如く見ゆる所以であらう。

問 信の一念釋に時節の延促とあるは如何に理解すべきであらうか。

答 之を解説するに古來二説がある。其の第一説は信卷は單に一念の釋であつて、乃至の二字は別に釋してあれば、これを時刻の極促といひ、促とのみ言ひて延とは言はない。今略本は乃至一念者とあり、乃至の二字を併せ釋すれば、延促といはれてゐると。又第二説は延促とはいへど、意のある所は促の字にありて延の字に及ばない。其例は漢文に多いことであると。今云く、此の二説中後説を取るべし。何となれば今は獲得往生心行の時節であつて、獲得は一念の極促にあり、それが延び行く長時に獲得するのでは

ないからである。

一八 淨信名體

言淨信者則利他深廣信心也

【科文】 二明淨信三。初標章示體。上に行を明し了つたので、是より信を明す一段である。但し此の一段を教行信證の四法肩を並べて一列に科する見方もあるけれど、今は教行二法で大科を統べ、而も行中攝信の態勢で、行下より信を分開せるものと見る。

【句釋】 言淨信者 上の亦有淨信を牒す。淨信とは如來會に一念淨信とあり、清淨の信心といふこと上に引く十住論にも信心清淨者とあり、凡夫の胸の裏は貪瞋煩惱で汚れてゐるけれど、如來廻向の信樂であるから淨信といはれる。利他 他力を顯はす語。深廣信心 信卷一三利他深廣之信樂とあり、深廣とは他力なるが故に深且つ廣である。即ち深廣といへるは佛智他力を顯さんが爲めてである。これを経に如來智慧海深廣無涯底と説き、大海の深廣にして不可測なる如く、二乗の智慧でも量られぬが彌陀の佛智である。今他力の信心はこの不思議の佛智を明信し、佛智他力のさづけによるもので

あるから、信心また深廣である。故に信心の智慧（和讃）と名づけ、又は無上智慧の信心（唯信文意註）と稱せられる。そこで今眞宗に於ける眞實信の體を定めて、利他深廣信心也と顯された。

【論攷】 問 四法を標するに、他の三章には單に教行證といふ。この一章に限つて淨信といへるは如何。

答 前の行下に有大行亦有淨信とあるを承け、行中攝信の態勢を整へんが爲てである。

問 信は凡夫の機位にあり、何が故ぞ之を淨といひ又深廣といへるか。

答 凡夫自力の信心にあらずして、利他廻向の信心なることを顯さんが爲めてである。即ち文に利他とあつて、他力廻向の信心なるが故に、佛心清淨なれば信心亦清淨であり、佛智深廣なれば、信心亦深廣である。深とは化卷四六對二諸機、淺信二故言深……復就二一心二有レ深有淺、深者、利他眞實之心是也、淺者定散自利之心是也とあり、又廣とは下大廣大無碍、淨信とあるので其義が知られる。

問 何が故ぞ行證二法には利他圓滿といひ、信に限つて利他深廣といへるか。

答 行信證の三法の中、一應これに就いて能信と所信とを分たば、序文に敬信眞宗、教行證とあつて、行證は教と共に所信にして法位に置かれ、信は能信にして機位に置かれる。既に行證は所信にして法位に置かるれば、法體本より絶對にして圓滿である、故に行證二法の體を定めて利他圓滿といふ。之に對して信は能信にして機位に置かれるから、衆生の機にあつては必ず相對差別せられる。されば淺に對して深といひ、狹に對して廣といふ。實は衆生貪瞋煩惱中にあつては、白道四五寸の信に過ぎざれど、今は機に現れた信の威徳廣大の邊より深廣といふのである。又本章に限つて淨といへる相對の語を用ひたるも、それと同意である。これ即ち同じ往相廻向の行信でありつゝ、淨信が大行の中へ攝せらるゝ所以である。

一九十八願名

即是出於念佛往生之願……往相信心之願

【科文】 二示能出願。信體既に定りたれば、それを成就せる本願を出し、以て他力の大信たることを顯された。

【句釋】 即是出於の義上の行下の如し。念佛往生之願。選擇集本に諸師釋別云、十念往生願善導獨云念佛往生願等とあり、諸師はたゞ十念の語に着目し乃至の語を顧みぬから、偏に十聲稱へるものといふ意に謬る。善導は乃至の語に着眼し、上盡一形下至十聲一聲等と釋す。元祖其意を承け念佛往生の願名を立つ。これ善導元祖相承の願目なれば、之を初に出す。亦名至心信樂之願。以下の二名已證の願目なれば、亦名といひ、復可名といふ。至心信樂とは本願の三信を此の二つに代表せしめたもので、十九願の至心發願と二十願の至心廻向とに對し、十八願の他力信心を顯はす願目である。復可名往相信心之願。往相の語は二十二願の還相に對し、信心の語は十七願の正業と十一願の證果とに對する。即ち往相廻向中の信心を成就せる願であつて、これは本願の三信を信樂に攝め、更に成就の信心に會して、往相信心之願と名づけたのである。

【論攷】 問 第十八願に此の三名を列ぬること、何等の意趣に由るか。

答 初の一名は元祖相承、後の二名は宗祖已證である。故に初の一名は行に約し、後の二名は信に約してゐる。

問 願名は願の内容を規定し、願に對する見方を表はすものである。今念佛往生の願名は行に約し、他の二名は信に約すると言はゞ、宗祖の十八願に對する見方は、行にありとすべきか、信にありとすべきか。

答 十八願に對する見方に二様がある。一は該攝門の一願建立の義相に依る見方、一は分相門の五願建立に依る見方である。其中前者の見方は善導元祖を稟承せるもので念佛往生の行に約する見方となり、後者の見方が宗祖己證の信に約する見方である。それゆゑ此に三名を列ねたるは、十八願に對するこの二様の見方を表現せるものと見なくてはならない。

問 廣略二本は俱に宗祖の己證を開顯せられたものであるから、五願分相の義相に依れるものと見るべきではないか。何が故ぞこゝに一願該攝の義相に依つて、先づ念佛往生の願名を掲げたのであるか。

答 是れ即ち二願の見方に對し學說多端にして、行信論の上に煩瑣を來せる所以である。何となれば、第十八願に對して、斯くも二様の見方があるとすれば、これを如何に意義づけ、又如何に調和せしめるかといふことは、廣略二本の研究としても、又行信論の解決としても、最も重要な問題である。今此に古來の學說を批議する暇もないから、直に予が所見を記すであらう。既に念佛往生の願名が一願該攝の義相であるとすれば、十八願を行に約する見方に依るべきことは異求せられない。これ善導元祖の宗義を稟承せるものであつて、此の場合にあつては、行といへばそれは念佛爲本の絶對的の行であつて、必ずしも信と對立するものではない。即ち和語燈五_三衆生稱念必得往生ト知りヌレバ自然ニ三心ヲ具足スル故ニ此理ヲ顯サンガ爲ニ略シ給ヘル也とあつて、三信は全く行に内具して別立しないといふが、彼の十八願加減の文の趣旨である。それゆゑ今これを信章の下に出されたといふことは、此の信たるやこれ即ち大行に具する淨信であつて、淨信といふも上の大行より出でたるものに外ならない。略本の態勢が已に行中攝信の相より成れば、茲に先づ第十八願について、善導元祖を相承せる絶對的の行を出して、宗祖己證の五願別開にあつてこれを信心成就の願と見るといふことも、徒らに行信對立せしめるものではない、行信二法は本來能所不二機法は一でその本質が絶對的であるから、これを理解するに必ず一願該攝の絶對的立場を見失うてはならぬことを示唆せられるものと考へてよい。

問 善導元祖の宗義にあつては、十八願が絶対行なるべきこと命を聴く。今宗祖の四法建立にあつて、其絶対行は既に大行の下に出されてゐて、彼處に行中攝信の義が現れ了つてゐる。何ぞ煩はしく此に再び信の下に其義を出せりといふか。

答 大行の中に具し、大行の中から出づる淨信なればこそ他力の信心にして、凡夫の所發にあらざることが知られるばかりか、翻つて善導元祖の念佛往生といふも、それは單行無信にあらざして、必ず大信を具する念佛であることを知らしめたのである。それゆゑ行信不離といふことも、これを二法對立してのみ不離といふことを考ふべきでない。能所といへどそれが不二の能所であり、機法といへどそれは一體の機法であるから、行には信を具し、信には行を具し、謂ゆる玉鏡の表裏、圓珠の向背で、これを行信一體の上の不離として考へらるべきである。

二〇 難易料簡

然薄地凡夫底下……所經縛疑網故

【科文】 三正明淨信二。初料簡難易二。初就機相示難由。以下正しく淨信の相を明すに、初

に、獲信の難易を分別する一段であつて、自力では獲難いといふから始むる。

【句釋】 然薄地凡夫底下群生。然は上を承けて按ずる語。薄地凡夫の成語は元照彌陀經義疏（愚禿鈔上_三所引）に出づ。薄は逼迫の義でせまること、凡夫の地位は恒に業煩惱に逼め迫られてゐるから薄地凡夫といふ。底下は經に底極所下と説く。極惡最下の最も下劣なるものを底下といふ。淨信_一叵獲極果_二叵證也。淨信は利他深廣の信心で因、極果は無上涅槃で果である。以上劣機を擧げて難信を示す。難信なるが故に難證である。何以故。難信難證の理由如何と徵問す。不由往相廻向故。淨信は他力廻向の法である。然るに他力廻向に由らず、自力で獲やうとするから得難いのであるといふ。これ難獲の第一由。由所經縛疑網故。疑心自力に邪魔せられるからといふのが、難獲の第二由。疑情を網に喩ふ。網には難脱の義がある。魚鳥が網にかゝつて脱れ難いやうに、疑惑の心に纏ひ縛られたら容易に脱けられぬをいふ。

【論攷】 問 淨信を明すに何が故ぞ先づ難信難證の義を明すか。

答 是れ即ち信別開の所由である。されば信卷別序には末代道俗近世、宗師沈_ニ自性唯心_一貶_ニ淨土_一眞證_ニ迷_ニ定散_一、自心_ニ昏_ニ金剛_一眞信_一と、沈迷二機を擧げて悲嘆されてゐ

る。これ宗祖の當時、黒谷の會下に列れる輩が、多くは定散自心に迷ひ、疑網に纏縛せられてゐたから、こゝに元祖の眞意を發揮し、信の一法を別開せられた。廣略二本の御著述もこれが爲に外ならない。今略本で難信難證を標示せられたのも、また同じ理由であるとするべきであらう。

乃由如來加威力……獲清淨眞實信心

【科文】 二明由佛力易獲四。初正示獲信由。以下佛力他力に由つてのみ獲信することを明す。

【句釋】 乃。乃をイマシと訓む。言海にイマシの語が代名詞の時は汝に同じと解し、副詞の時はシは第二類の天爾波にて、今といふに同じというてある。こゝは副詞として見ればよく解る。由如來加威力故。如來會下^九由^九彼^九如來^九加威力^九故^九とあるに據る。これ獲信の第一由で、加は加被、威力は威神力で、彌陀果上に加被せられる光明威神力は衆生獲信の緣由であると顯はす意。無碍光ノ利益ヨリ威德廣大ノ信ヲエテとあるは、無碍光の力の威德廣大を顯はせると同意である。博因^九大悲廣慧力^九故^九如來會下^{一五}彼^九因^九廣慧力^九故^九に據る。廣慧は廣大の智慧で、如來の智慧のこと。これ獲信の第

二由である。如來會には大悲の二字なし。智慧は因果に通ず。故に上は光明名號で果力、今は慈悲智慧で因力、因果二力で清淨眞實の信心を獲ることを顯はされた。獲清淨眞實信心。獲信の二句を結成す。如來會の淨信の語より出づ。

是心不顛倒是心不虛僞

【科文】 二示信心法德。上の信心を更に法德に約して、清淨眞實とする所以を示される。

【句釋】 是心不顛倒等。論註上^六依^二法性^一入^二清淨^一相^二是^一法不顛倒^二不^三虛僞^一名^二爲^三眞實^一功德^一。同下^九眞^九言^九不^九虛僞^九不^九顛倒^九とあり。不顛倒是上の清淨の二字を承け、不虛僞は眞實の二字を受く。凡夫の心は妄想顛倒なれど、今は他力廻向の清淨信心なるが故に顛倒せず、自力の信心ならば虚僞迷妄であるけれど、今は他力廻向の眞實信心であるが故に虚僞でない、信心の清淨眞實なることを成立せられた二句である。

信知無上妙果……實難得

【科文】 三結歎難信。初の難信に立ち還つて之を結歎せらる。上の二段に、初は信心は自力で

は獲難いと標し、次に佛力に因るが故に信心の獲られることを明された。今はそれを結んで信心の實に獲難いことを歎ぜられたのである。

【句釋】 信知。下の言を以て上を成ずる辭。無上妙果。無上菩提の妙果のこと。この一段その語勢は、心地觀經(三〇五經ノ)菩提妙果不難成、眞善知識實難遇とあるに取、而も大經の易往而無人の意を顯された。不難成。淨土へは行き易きこと。

眞實淨信實難得。これが而無人の意。御文に、この經文をあげ、コノ文ノコ、ロハ、安心ヲトリテ彌陀ヲ一向ニタノメバ、淨土へハマイリヤスケレドモ、信心ヲトルヒトマレナレバ、淨土へハユキヤスケシテ人ナシトイヘルハ、コノ經文ノコ、ロナリとあるが、此下の釋意を承けてみられる。

【論攷】 問 廣本では無上妙果不難成、眞實淨信實難得、何ヲ以故、乃由如來加威力故、博因大悲廣惠力故(即自稱ニ〇五)とあつて、加威力廣慧力の二由は難信の所由となつてゐる。然るに何が故ぞ略本では却て之を獲信の所由となせるか。

答 此の二由は一文兩義である。これを獲信の所由とすることは上の如く、これを難信の所由とすることは廣本の如し。故に他力廻向の信で救はれといふことは、一面にそれが難の理由ともなれば、一面にそれが易の理由ともなる。例せば一日に千里を行くは難し、飛行機を獲てそれに乗らねば行かれぬからといふことと、一日に千里行くは易し、今では飛行機に乗りさへしたら行かれるからといふこととは、兩義俱に成立し得ると同じである。加威力と廣慧力との二由は、即ち佛の願力に乗託するといふことに外ならねば、獲信の所由とすると同時に易信の所由たることを得るのである。故に極難信であると俱に、易往易修であるといふことは、矛盾に似て決して矛盾ではない。是れ信卷別序(即自稱ニ〇五)夫以獲得淨信樂發起自如來選擇願心と言ひつゝ、化卷(即自稱ニ〇五)大信心海甚以入從佛力發起故と示された所以である。

獲眞實淨信得大慶喜心

【科文】 四示獲信益二。初正示。上の如き獲難き信心なれば、遇ま淨信を獲れば大慶喜心が得られると、その得益を示された。

【句釋】 獲眞實淨信。成就の文の信心歡喜の意で、信卷末(即自稱ニ〇五)獲得金剛眞心、者云と現生十種の益を列ね、中に心多歡喜の益を出せると同格である。得大慶喜心。

三十行偈に見敬得大慶とある。讚彌陀偈に信心歡喜慶所聞と讚へ、和讚に一念慶喜スルヒトハ云云といふ如き、何れも成就と三十行偈とを引き合せてゐる。信卷三四では遇獲淨信者是心不顛倒是心不虛偽是以極惡深重衆生得大慶喜心とあり、對照せらるべきである。

得大慶喜心經言……功德殊勝取要

【科文】 二引證二。初大經。以下大經並に如來會を引き、得大慶の益を證明せらる。これは眞實信の引文ではない。文類として信の下の引文は、已に行の下に引き上げられてゐる。こゝは單に得益の引證と見るがよい。

【句釋】 經言。大經悲化段の文で、第十八願開説の語と見られる。其有至心願生安樂國者。其は十方衆生。至心は本願三信中の至心。願生安樂國は欲生我國。智慧明達等は信樂と乃至十念。可得は得らるゝといふことで、現益である。而して上の大悲廣慧の力に因るが故に智慧明達であり、如來の加威力に由るが故に功德殊勝である。即ち愚痴無智の凡夫なれど、佛智の不思議を疑ひなく信ずれば、智慧明達といふべく、信ず

る一念に名號の功德悉く行者の身に満足すれば、功德殊勝といはれるのである。信卷(末卷)には此文を眞佛弟子の釋下に引證せられ、至德具足の益を示せるものと解せられる。六要會本五三現益として註解せられてゐる。取要 上下二卷の經文中から唯此一文を引かれたことを取要と註された。

又經言是人……廣大勝解者已上

【科文】 二如來會。

【句釋】 又經言。如來會なれど同じ大經の異譯であるから、前の大經に續けて又經言として引かれる。信卷の引例これと同じ。是人 二字如來會になけれど觀經の是人名芬陀利華に依つて之を加ふ。獲信の人を指す。即是大威德者 大威德は廣大威神の德にて名號のこと、この名號を我身に具足するゆゑに大威德者と讚められる。上の大經の功德殊勝の語を成ずるのである。亦說廣大勝解者 勝解とは殊勝の解了といふ義で、決定の智慧をいふ。如來の智慧海に對して、少しも疑惑し猶豫する心なく、往生一定の思ひに住するは、廣大な勝解である。これ上の智慧明達の語を成ずるのである。爾

れば如來の加威力に由るが故に、功德殊勝であり、之を大威徳者と讃へ、又大悲廣慧の力に因る故に智慧明達であり、之を廣大勝解者と嘆ずるのである。

【論攷】 問 他力の大信を明すに、何が故ぞ難信難證の義を高調せるか。却つて易信易往の邊を力説すべきではないか。

答 難信難證の義は、他力大信の價値の絶高なるを顯さんが爲である。得易きは實とするに足らず、容易に獲られねばこそそれが實である。されば經に極難信と説き、一代諸經ノ信ヨリモ弘願ノ信樂ナヲカタシと讃ふること、他力信心の價値の最高なるを示されたのである。

問 然らば何が故ぞ茲に證文を引いて獲信の益を示されたるか。

答 他力の大信に救はれたる身は、正定聚の機たることを顯さんが爲である。この義廣本に照らせば、信卷の卷頭標舉に正定聚之機と指標し、その末卷に現生十益を列舉し、且つ横超斷の義及び眞佛弟子の義を追釋したまへる所以のもの、全く極惡深重の衆生も他力の信に入り大慶喜心を得れば、平生業成の救ひにより、正定聚の機たることを開顯せられたのである。これ即ち願成就の即得往生住不退轉に據つて、眞宗の主張する

一念發起平生業成の義を顯はせるものに外ならない。偈に獲信見敬大慶喜即横超截五惡趣……佛言廣大勝解者是人名芬陀利華とあるが、即ちそれである。

【論攷】 問 上に得大慶喜心者と標して、經文を引證せるも、文の中に大慶喜の相なきは如何。

答 智慧明達等といひ、大威徳者又は廣大勝解者といふ。これ即ち信心歡喜慶所聞といひ、斯ヲ以テ慶シ所ヲ聞ク嘆ス所ヲ獲ルといふ大慶喜の内容に外ならない。故に信卷では眞佛弟子の釋の下に、是等の諸文を引證せられた。

二一四 句 結 嘆

誠是除疑獲徳……廣大之淨信也

【科文】 二結嘆。正明淨信の下、上に難易を分別し了り、更に四句の嘆辭を以て之を結ぶ。

【句釋】 誠是 感嘆の辭。除疑獲徳之神方 廻向の淨信は不了佛智の疑網を斷除すると同時に、廣大殊勝の威徳を獲得する不測（神）の方術であるといふこと。元照の觀經疏序に信ニ知シ是レ除疑捨障之神方、長生不死之要術とあるに依つて造語せらる。極

速圓融之眞詮。極速は頓極頓速の義で、信ずる一念の時刻の極速に、佛の方に成就せる恒沙の功德が、圓滿に缺目なく行者の方に融通して、如來の功德其儘に衆生の功德となるといふこと。眞詮の詮は詮表で、能詮の教のこと、眞教又は眞言と言ふが如し。今は信の下であるけれど、本願圓頓一乘の義で、これを教に寄せて嘆ず。上の行の下でも一乘眞妙之正法とあつて、同じく行を教に寄せて嘆ず、信卷末謂編故知一心是名如實修行相應即正教是正義等とあつて、眞實信を離れては、行者の上に眞實行も眞實教も成立しないのであるから、こゝらも教に寄せて信を嘆ずるといふよりは、寧ろ信に寄せて教を嘆じたものと見てもよいのである。これを和讃で言へば、逆惡攝すと信知してこそ、本願圓頓一乘たることが詮表せられるのであつて、これ即ち眞詮と稱せられる所以である。此下香月院の講辯参考せらるべきである。長生不死之妙術。語據は上の元照疏に出づ。信の一念に更生して心命方に盡き已に永遠の生命に入る、身命盡くるや即ち無量壽の佛果を證る。故に此淨信こそ長生不死の妙術である。威德廣大之淨信也。語據は上の引文中の大威德者並に廣大勝解者にあり、威德廣大なる無碍光の利益から、今は行者の身に威德廣大の淨信を得たりと嘆美せられた語である。廣本信卷では卷

首に十二句を列ねて眞實信の徳を嘆ず。今は略して四句を章尾に置けば、これを結嘆てあると見る。

二三 無因他因

爾者若行若信無……他因有也應知

【科文】 三結簡 上來往相の因果の中、往相の因に就いて行信二法を明し來つたが、こゝで行信を合せて總じて之を結び、更に無因と他因との濫を簡ばれたのである。

【句釋】 爾者。信章の下にあれど、義は行信二章を結びて爾ればといふ。廣本でも信卷の引文畢れる所(三左)に此の總結を出せること、體制今と同じ。若行若信。行と信とは一具の法で相離れねば、これを一所に總へ結ぶこと廣本また之に同じ。特に略本は行中攝信の態勢なれば、こゝに行信併せ結びて若行若信といふ。無有一事非阿彌陀如來清淨願心之所廻向成就。論註下三に此三種莊嚴成就由本、四十八願等清淨願心之所莊嚴因淨故果淨非無因他因有也とあるに據つて造語せられたもの。一事の事は事體の義で一つの物柄もといふこと、今は行も信もどれ一つとしてといふ意味

である。阿彌陀如來清淨願心とは、彌陀の因位法藏菩薩の無漏清淨心より起したまへる本願といふこと。廻向成就とは衆生往生の因たる行も信も佛の方に本願力で成就して、それを衆生に廻向したまふ。その廻向を佛の方に成就せられた所が、彌陀の廻向成就といふのである。非無因他因有也。無因と他因との邪計を簡ぶ。印度に無因外道と他因外道とあり、無因外道の方は、萬有は因なくして自然に生ずるのだと主張する。他因外道の方は、天地萬物悉く大自在天の造り出せるものだと言明する。世間の邪見はこの二つの誤れる見解に本づく。我佛教の眞理性は、正しき因果の理法に基礎づけられるのであつて、必ず有因有果を宗とし、自因自果を以て原則とする。然るに今他力の行信で淨土に往生し、願力成就の報土には自力の心行いたらぬというては、無因外道の思想に同じかるべしといふ疑難あれば、爰に無因に非ずと簡んだのである。そして又阿彌陀如來の本願力で成就せられたものが往生の因となるといはゞ、他因外道の思想に濫すべしとの疑難がある。それで如來廻向の行信を行行者の方に獲得して、己が行信となり、その行信で淨土に往生するのであるから、爰に他因に非ずと簡ばれたのである。

【論攷】 問 無因と他因との疑難を拂ふことは、現になほ一宗にとつての緊要事であ

る。但だ他の謗難に對してでなく、自己の信念としても明徴を要する。されば如何に先づ此一段の文旨を解すべきか。

答 本文に於いて、非無因他因有の無因を上清淨願心に望むれば、既に如來の清淨願心を因とするゆゑ、他力の救済は無因ではないと顯はされ、又他因有を上清淨願心に望むれば、如來既に行信を成就し廻向したまへば、行者の方に信あるが故に、他因ではないと闡明されるといふ趣旨である。即ち彌陀願力の行信を因とするが故に、無因に非ず、凡夫の方に信を得するが故に他因にも非ずといふ簡濫の意味である。

問 疑難の點は、之を要するに既に自力の因果を否定せる上は、如何に自己の上に他力の因果が成立するかといふにあり、然るに今の如く無因にも非ず他因にも非ずと否定的に言ひ顯はせど、未だ積極的に他力の因果が成立せりとは考へ得られないではないか。

答 爾り、單に無因に非ずといふことが、自己の上に有因なりとは限られない。何となれば行信は如來の御誓ひであつて、必ずしも自己のものではないからである。これと同時に他因に非ずといへばとて、それが必ずしも自因であるとは限らない。何となれば

廻向の行信はそれを凡夫が自ら用ひて自因とすべきでないからである。それゆゑ自己の上にてこれが他力の因果であるというて積極的に因果は把握せられない。この因果は本願の上に約束された法爾の因果であつて、自己が勝手にこれが因である果であると約束すべきものでない。それゆゑ茲に無有一一事二非三阿彌陀如來、清淨願心之所四廻向成就一と、法の方にあつてのみ積極的に肯定されつゝ、機の方では單に非無因亦非他因二と消極的に否定せられた。一事として如來の方の廻向成就ならぬのではないのであつて、法爾必然の因果の外には、機の方で勝手に約束される因果は悉く否定せられるのである。

問 然らば他力の因果は、信仰として自己の内面に把握せられないか。

答 信卷に言一聞者衆生聞佛願生起本末二無有三疑心四とあり、偈には報土、因果顯誓願一とある。この因果の聞持せられることの外に、他力の信心のあらう筈はない。されどその聞持といふことは決して自力の把握でない。そこに願心の廻向といふことがあるのである。然るに此の救ひの因果を自己の上にて之を肯定せんとしたのが、鎮西流である。鎮西は行者自力の行信を因となすのであるから、眞宗から見ると却つてそれは無因である。又之を如來の方にのみ肯定せんとしたのが西山流である。西山は彌陀

の佛體の上にてのみ衆生往生の因果の成立を認めやうとするから、眞宗から見ると全くそれは他因である。ひとり我が眞宗では、他力の因果といふことが、己が内面に信心として把握せられる、それが即ち敬信眞宗教行證といふことである。それはたゞ無因にもあらず他因にもあらずして、如來報土の因果その儘に衆生往生の因果たるものが、全く如來清淨願心の廻向成就せる所に見出されといふことであつて、その外に、聞佛願生起本末一無有疑心二といふことの體驗はないのである。

二三 證果體相

言證者則利他圓滿妙果也

【科文】 二明往相果三。初標章示體。以下往相の因より果に移つて證を明すに、先づ其名を標示體を規定する。

【句釋】 言證者。序文の敬信眞宗教行證の證を承く。利他圓滿妙果。廣本に利他圓滿之妙位無上涅槃之極果三とあるを要約す。利他とは因の行信他力なれば、果の證も亦他力なりと顯はし、圓滿は因の行信の圓滿深廣なるに従ひ、果の證も亦絕對圓滿な

ることを示す。即ち利他は他力廻向を顯はし、圓滿とは佛果圓滿で、自覺覺他覺行窮滿の意。妙果は微妙至極の證果であつて、法事讚下左二八彌陀妙果號曰三無上涅槃とあるを宗祖は衆生の證果とせられる。即ち彌陀同體の證であることを顯はすのである。

即是出於必至……證果之願

【科文】 一示能出願 十一願に三名を出す。

【句釋】 必至滅度之願 願文に依つて立つ。滅度は涅槃の譯語。生死の苦を滅し迷の海を度りおふせたといふ意。十一願に正定聚と滅度との二の願事がある。諸師は概ね正しくは正定聚を誓ひ、兼ねては滅度を誓ふと見る。故に住正定聚願とは名づけても必至滅度願とは名づけぬ。これ彼土正定聚の見により、彼土に至つて正定聚に住し、漸く滅度に至ることと考へられたからである。然れば宗祖が必至滅度之願と呼ばれたのは、第十一願に對する見方を表はせるものである。即ち念佛往生の願因により必至滅度の願果を得ると言はれ、彼土に往生すれば必ず滅度を證るのであつて、自ら正定聚は現益と見ることとなつたのである。亦名證大涅槃之願 以下二名宗祖の己證である。證大涅槃

槃の語は、如來會の十一願文に出づ。大涅槃は聲聞緣覺の得る小乘の涅槃に簡んで、大乘無上の涅槃であることを詮はすばかりか、諸師に對して必至滅度は往生即成佛なることを顯はす要語であり、中にも證とは宗祖が教行信證と立つる證の字の根據である。

往相證果之願 往相の四法に十一七十八の三願あり、その中十七は往相正業、十八は往相信心と名づけたのに對し、茲に十一願を往相證果と名づけられた。即ち往相は十二に對し、證果は十七十八に對する願目である。

即是清淨眞實至極畢竟無生

【科文】 三正明證果三。初直顯 引文に先ち略して證果の體を出す。

【句釋】 即是 上の利他圓滿妙果を承く。清淨眞實至極畢竟無生 涅槃の證の相を顯はす語で、論註下左四夫法性清淨畢竟無生、言生者是得生者之情耳とあるより出づ。清淨は法性清淨で涅槃の妙果は有漏雜染の穢を絶つ。眞實とは偽に對し虚に對して不變常住の實在をいふ。至極畢竟は最後終極で此上なしのおんづまりをいふ。無生は無生無滅で、涅槃の異名である。

無上涅槃願成就文……及不定聚

【科文】 二引文三。初住正定聚文。

【句釋】 無上涅槃願成就文。無上涅槃の四字は義兼兩向である。即ち上に向へば前に出づる清淨眞實至極畢竟無生とあるは、報土にて證るべき無上涅槃の體相に外ならずと顯はし、下に向へばこの四字により後の引文は證果成就の經文にして無上涅槃を證ることを知らしめるのであると、此の四字は義兼兩向と見るべきである。故に無生の下に也の字を安かずして直に無上涅槃に接續せしめて、成上の義を示し、又下に引く十一成就の文に證果成就の相見えぬ。故に無上涅槃の四字を願成就文に接續せしめて、接下の意を顯はす。されば此の四字義兼兩向にして、成上接下の巧妙なる文體である。經言下卷初めの經文。生彼國者。一多證文五カノクニ、ムマレントスルモノハと訓んである。皆悉住於等。これを如來會の經文に照らし、現生正定聚の意に解することは、常の如くである。

又言但因願餘方……無極之體

【科文】 二必至滅度文。上は十一願正定聚の成就、今は滅度の成就で平等一味の涅槃の證果を示す文である。

【句釋】 又言。上卷感成極樂段の文。上の十一願成就に必至滅度の事を缺いてあるから、此文にて補ひたまふ祖意である。そのこと證卷引文に大經十一成就と如來會十一成就との間にこの文を引用せられたので知られる。但因願餘方故等。淨土では同じ涅槃の證果であるのに、或は天或は人といふ如き名のあるのは、他方世界に因願するが故である。その實は非天非人である。聲聞と名づけ菩薩と名づけてあるも亦因願他方である。皆受自然虛無之身無極之體。上の顔貌端正は形色、容色微妙は顯色、今は正しく涅槃の果體を顯はす。淨土の聖衆の色相勝れたるは人天の如き業果の身相でない。法性に順じ法本に乖かざる任運自爾の莊嚴であるから自然といひ、法身は作所作にあらざれば虛無之身といふ。和讃左訓にコムシントイフハキワモナキホフシンノタイナリとあり。又法身の體窮極なく、無盡無窮であれば無極之體と言はれた。

又言必得超絶……自然之所牽

【科文】 三横超昇道文 此文は上の二文を助成して此土正定彼土滅度の現當兩益を併證せんが爲に引用せらる。

【句釋】 又言 悲化段の文 必得超絶去 必は銘文本四カナラズイフハ自然トイフコ
コロナリとあり、願力他力を顯はす。超絶去は流轉生死を超え離れること。即ち此の娑
婆を捨て淨土へ往くことであるゆゑ、次に往生安養國といふ。この二句即ち釋尊の發遣
である。横截五惡趣惡趣自然閉 上の超絶の相をこの二句で説く。横截は横さまに迷
を斷ち截ること。五惡趣は五道のこと、常には三惡趣であるが、こゝは淨土に對して五
道悉く惡趣と呼ぶ。惡趣自然閉とは上に三惡道の果を離るゝことを説く、今は惡趣の因
まで離るゝこと顯はす、即ち因亡じ果滅するのである。自然の二字は願力を顯はす。
昇道無窮極 昇道の道は無上正眞道の道で、佛果涅槃のこと、大涅槃の佛果に昇り
つめるを昇道といふ。無窮極は此上なしの證といふことである。此五字に往生即成佛の
宗義が根據を有つ。易往而無人 聖道自力で佛果には往き難し、今淨土他力に乗ず
れば往き易けれど、信心を得る人希なれば淨土に生るゝ人が無いといふ意。信卷本（會

四極）所引の用歛の釋可見。其國不逆違 往きたくても其國が逆ひ違はゞ往かれ
ぬ。今彌陀の淨土は凡夫往生の邪魔するものなく、こちらが往かぬでこそあれ、向ふか
ら逆ひ違ふといふことはないといふ意。自然之所牽 銘文本六の御釋、この自然に二
義あり、一に眞實信ヲエタルヒトハ大願業力ノユヘニ云云とあるは本願他力のことを自
然といふ。二に他力ノ至心信樂ノ業因ノ自然ニヒクトナリとあるは、信心を得たる人は
その信心の業因違はずして自然に牽くといふ。要するに因果必然なるを自然といふので
あつて、其因を法に約すれば大願業力、機に約すれば信心である。

二四 正定滅度

聖言明知煩惱成就……正定之聚

【科文】 三結釋二。初結住正定聚。以下眞實證を結嘆するのであつて、初に住正定聚の結釋で
ある。

【句釋】 聖言明知 上に引く大聖の眞言たる經説によつて、明かに知られるといふこ
と。煩惱成就凡夫生死罪濁群萌 論註下七有凡夫人煩惱成就一とあり、成就は具足

に同じ。又論註下一六若人雖有三無量生死之罪濁とあり、衆生の罪惡を水の濁りに喩ふ。此二句先づ凡夫の機相を擧げて、斯る濁惡の凡夫が現在に正定聚に住し、命終つて大涅槃を證るのであると、惡人救濟の相を示さる。獲往相心行。往相廻向の心行を獲得することて、上の信一念釋の下の獲得往生心行といふ語と同意である。即住大乘正定聚。即の字龍樹の即時曇鸞の即入と共に同時即であつて、現生正定聚の據である。大乘正定聚は論註上一に出づる語、小乗の正定聚に簡ぶ。即ち大乘の大般涅槃を證るべき身に定つた位のことである。

住正定聚故……即是一如也

【科文】 二結必至減度 上に住正定聚を結釋したれば、こゝに必至減度を結釋する。

【句釋】 住正定聚必至減度 論註下三住正定聚故必至減度とあるに據る。

現生に正定聚に住するが故に、命終れば必ず減度に至るといふこと。これ論註卷末に三願的證して、十一願文を引ける下に、十一願の成就の相を説いた語である。必至減度即是常樂 この必至減度の語、因より果を説くと、果から因へ對するとの二義を含む。

これを因より果を約束する必然の義と解すれば、彼土で減度に至ることが今から定つてゐるといふことを必至減度といふたのであるゆゑ、現生正定聚のこととなる。これ住正定聚必至減度といふ時の意味である。然るに果より因に對して、必ず減度に至りぬれば即ち是れ常樂といふ時は、必至減度は既に淨土へ生れ了つた後の證果に外ならないのである。故に必至減度の四字は、若し必至の必の字に重きを置き、これを能至の因に約して因から果を説くことに解すれば、現益となるのであつて、本願鈔二一念歡喜ノオモヒオコルニツイテ、往生タチドコロニサダマルヲ、正定聚ノクラキニ住ストモイヒカナラズ減度ニイタルトモイヒとこれを住正定聚と同視してゐる。御文二同等同意である。されど四字の中、至減度の三字に重きを置き、所至の果に約して果から因に對して解すれば、當益となる。廣略二本に之を十一願の願名とし、御文一一益二益を分別する下の如きは其意である。即是常樂 玄義分三捨此穢身即證二彼ノ法性之常樂とあり、涅槃四徳の中の二、小乗の減度に簡ぶ。大涅槃即是利他教化地果 論註下三至教化地の論文を釋して以二廻向一因證二教化地果一無レ有二一事一不能レ利他とあり、果の五門の中前四は自利、第五園林遊戲地門は利他の果で、淨土の菩薩利他の